
COBALT-SERIES
鬱金の暁闇5
うこんのぎょうあん
破妖の剣6
前田珠子
集英社

COBALT-SERIES

破妖の剣　6

鬱金の暁闇５

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

破妖の剣　6

鬱金の暁闇 5

前田珠子

集英社

目次

鬱金の暁闇 5

第十六章　自分らしいやり方 …… 9

第十七章　見据える先 …… 59

第十八章　前夜 …… 105

第十九章　砂時計——最初の一粒 …… 169

まんが「破妖の剣　ザ・ダイジェスト　紅蓮姫は恋をする」 …… 211

あとがき …… 223

破妖の剣　鬱金の暁闇

これまでのあらすじ

創造神ガンダルの生み出した世界、ガンダル・アルス。人々は複数の命と強大な力を持つ魔性たちに脅かされていた。彼らに対抗できる力を持つ人間たち――封魔の力を持つ捕縛師、滅魔の剣に選ばれた破妖剣士、魔性を味方に引き入れる力を持つ魅縛師――が「浮城」に集い、魔性との闘いに尽力していた。

ラエスリールは、金の妖主を父に、かつて城長だった魅縛師を母に持つ少女。浮城屈指の破妖刀「紅蓮姫」に選ばれた彼女は破妖剣士として著しい活躍をするが、闇主という謎の魔性に愛され翻弄され、魔性として生きることを選んだ弟・乱華には歪んだ執着心で追いかけられ、彼女にはなにかと切れぬ絆や因縁がつきまとうのだった。

翡翠の妖主の守護者の罠によって浮城を追放されたラエスリールは、数々の死闘を繰り広げ、この世に五人しかいない妖主の一人、翡翠の妖主を滅ぼす。父の配下の魔性に命を狙われ、浮城で編成された紅蓮姫奪還チームに追われ、行き場のなくなったラエスリールは、闇主とともに逃亡していた。しかし突然現れた父によって喉元に手をかけられ、仮死状態に。その肉体は浮城最奥の氷室に紅蓮姫の「鞘」として収められる。抜き身の紅蓮姫の新しい使い手として選ばれたのは、紅蓮姫奪還チームの一人で、紅蓮姫のかつての恋人の生まれ変わりであるアーゼンターラ。しかし自らの苦悩に振り回され、思うように闘うことができない。そんななか、密かに誕生していた第六の妖主（雛の君）が次々に妖主たちを配下に従え、ある目論見を現実のものにしようとしていた。一方で、死んだはずのラスの母もある決心をしていて――!?

妖主たち

金 **王蜜の妖主**
ラスの父。最愛の妻を亡くして以来、姿を消す。

赤 **柘榴の妖主**
クセ者ぞろいの妖主たちの中でもかなりの強者。

緑 **翡翠の妖主**
夢に通じる力を持つ。ラスによって滅ぼされる。

白 
白焔の妖主(白煉)
熱に通じる力を持つ。一時期人間だった。

夫婦?

紫 
紫紺の妖主(藍絲)
糸に通じる力を持つ。白煉に執着している。

第六の妖主(雛の君)
緑の妖主の死により現れた新しい妖主なのだが…。

娘



息子

ラエスリール(ラス)
破妖刀「紅蓮姫」の使い手。半人半妖で魅了眼を持つ。不器用な性格。



アーゼンタータ(ターラ)
現在「紅蓮姫」の使い手だが、悩みも深い。

リメラトーン(トーン)
妖貴の大火で生き別れになっていたターラの弟。

双子

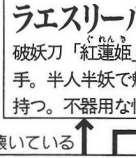
オルグァン
破妖剣士。「氷結斬」と呼ばれる破妖の斧を使う。



スラヴィエーラ
破妖刀「夢晶結」を操る、破妖剣士の少女。

マイタード
捕縛師。自らの刺青に魔性の命を封じ込める。

懐いている



邪羅(ザハト)
妖主夫婦の息子で、ラスを姉のように慕う。

紅蓮姫奪還チーム

破妖の剣 人物相関図

親友　夫婦

チェリク(リーク)
浮城の元城長で、伝説的魅縛師だが妖主と結婚。

息子



マンスラム
浮城の前城長。ラスを養女として育てた。



濫花(リー)
ラスが拾った半人半妖の少年。乱華に酷似。

乱華(リーダイル)
ラスの弟。魔性として生きる超弩級のシスコン。

懐いている

アーヴィヌス
現在の城長。かつては捕縛師として活躍した。



闇主(千禍)
ラスの護り手。壮絶な美しさと極悪非道な性格は魔性のなかでも群を抜く。

護り手



セスラン
捕縛師。人あたりはいいが、実は食わせ者!?



サティン
面倒見のよい捕縛師。ラスの姉のような存在。



彩糸
リーヴシェランを溺愛する美しく聡明な護り手。

護り手



リーヴシェラン
琴の音を用いる魅縛師で、気の強い美少女。

いいかんじ(?

浮城における ラスの理解者たち

イラスト／小島　榊

第十六章　自分らしいやり方

1

耳をつんざく轟音が響き渡り、分厚い扉が粉々に砕け散った。

室内にいた数人の大人たちが息を呑むなか、子供はびくりと身を震わせた——音のした、砕かれた扉の向こうから姿を現した異形の存在が、自分だけを見つめていることを子供はひしひしと感じていた。

陽光を背に現れたソレは、人間によく似た、しかし人間ではあり得ない影を室内に落としていた。

その一点を除けば、それは多少ずんぐりした男の影にも見える。しかし、頭部の頂から伸びた角としか形容できないモノが——いや、それだけに留まらない異質さが子供を恐怖の底にたたき落とすのだ。

瞼のないまん丸な目が、子供をじいっと見つめてくる。

鼻の隆起はない。丸い二つの穴があるだけだ。

口は耳元までも裂け、その奥からは二つに裂けたかのような舌がちろちろと覗いている。
太い首、がっしりとした肩、太すぎるほどの四肢――その肌と思える部分の全てを覆うぬるりとしたゼラチン状の薄膜。
人間ではあり得ない。
妖鬼だ。
恐ろしい魔性だ。
その魔性が、分厚い扉を容易く砕いて、自分を見つめて――否、求めて家の入り口に立っているのだ。
爬虫類か両生類を思わせる丸い瞳に、自分に対する食欲だけを色濃く滲ませて。
「その子供を渡せ」
と、獰猛な響きを込めて告げてきた。
子供は、息もできずにその場に凍りついた。
蛇に睨まれた蛙という言葉を思い浮かべることもできないほど幼かった子供は、しかしこの瞬間自分がまさしく捕食される存在でしかないことを本能的に悟っていた。
「あ……」
がたがたと、体が震えた。

喰われるのだ、と……この恐ろしい魔性は自分を丸ごと食うためにここに来たのだと……そしてそれを止められる者はいないのだと子供は思った。

なぜなら、この魔性を止めてくれると言ったひとは、家の外を守ってくれていたはずだったからだ。

『必ず守ってみせるから』

そう力強く宣言してくれた大きな刀を持った男の人は村の入り口を守ってくれていたはずだった——なのに、妖鬼はここまで来てしまった。

自分を助けてくれるひとはいない。

このまん丸な目をした恐ろしい魔性に、自分はぼりぼりとむさぼり喰われてしまうしかないのだ……。

恐くて恐くて——誰か助けて、と思わずにはいられない一方で、聡い子供は悟ってもいた。村の蓄えのほとんどを使って、世界で唯一魔性に対抗できる場所に『助けて欲しい』と手紙を出したのだと聞いた。そこから来たのは大きな刀を背負った大きな男の人と、自分よりは随分大きいけれど、子供と言って差し支えない十二、三の少女だった。

大きな刀を持っていたひとが突破された以上、もう自分を守ってくれるひとはいないのだ……魔性に「美味しそう」と見なされる自分は、もう……。

喰われるしか――。

それでも、子供は受け入れがたい未来に頭を振った。

「いやだ、いやだ、いやだ！」

叫ぶ子供の視界を遮るように庇うように、家の中にいた内のひとりが立ち上がったのはその時だった。

「え」

自分の前で立ち上がったのが見知った村人の誰でもなく、『大きな刀を背負ったひと』と一緒に来た少女だと知った瞬間、子供は混乱した。

どうして、魔性の前に立つのが村の大人たちではないのか。

どうして、こんな……自分よりは年長とはいえ、まだまだ子供に属する少女が立ち上がっているのに、他の誰もが黙っているのか……。

自分は、見捨てられてしまったのではないのか――。

実のところ、目の当たりにした魔性の妖気にあてられ、誰一人動くこともままならなかったという事情だったのだが、あまりにも異質な状況に子供の意識と感覚は麻痺してしまった。

その感覚のまま、子供はそれ以後の光景を脳裏に焼きつけた。

「渡さないわ」

はっきりと、怯えのかけらも窺わせず――否、逆に支配者であるかのような口調で言い切った少女の声が周囲に響き渡った。

「沼の王を気取った小物……力を宿すこの子を喰って、本当の沼の王になるつもりだったのかしら？」

キィの高い少女の声――なのになぜか、告げられる内容はどこまでも重々しいものに子供には感じられた。

ぐっ、ぐっと魔性が喉を鳴らした。

それが嘲りなのか怒りゆえの音なのか、子供にはわからなかった。

「減らず口を……時間稼ぎのつもりか？　だが、残念だったな、浮城から来た破妖剣士は今頃おれの配下にばらばらにされているだろうよ。……それにしても、お前の心臓も美味そうだ」

瞼のないまん丸な目が、貪婪に輝くのを子供は確かに見たと思った。

じゅるり、と垂れかかった涎を啜るさまに、それが正しかったことを知る。

ぞくりとした。喰われる。自分は間違いなくこの魔性に喰われるのだ。

「ひ……」

喉が引きつる――そのままわけもわからず暴れ出しそうになった子供の肩に、少女の指が触れたのはその刹那のことだった。

「少しの間、黙ってて。あなたの無自覚な気は空気をイヤでもかき乱す。今は、邪魔なの」

説明も何もない——ある意味酷い言いぐさだったが、その声には、肩に置かれた細い指には、否やを言わせぬ力が宿っていた。

「……時間ならもう充分にもらったわ。愚かしい小物の魔性……わたしがイズヴァンについてきただけの子供だと思ったの？　何の力もない小娘だと？　ならば教えてあげる。浮城は戦力にならない子供を仕事で外に出すことはないのよ——」

決して、ね。

そう告げた少女の口元に笑みが浮かぶ。

横顔しか子供からは見えなかったが、それは明らかに自らの優位を確信した者の傲慢とさえ呼べるものだった。

「お前の隠し名はもう解けたわ。滑籃……滑る薄膜に守られた籃。さて、お前は籃そのものか、それともさらにその中に守られるだけの価値あるものなのか……」

魔性の目が驚愕に瞠られる——しかし少女は気にする様子もなく淡々と言葉を紡ぎ続ける。

「まあ、どうでもいいことね。お前の命はここで潰える。お前はわたしもその子も喰らうことはできないまま果てるのだから——」

「戯れ言をっ！」

滑籃と呼ばれた魔性が吼えた。
その巨大なぬめる腕が少女に伸ばされた瞬間――。
それは、起こった。
なにがどうとは、言葉にできない。だが、確かにその刹那、少女の放つ何かが何か決定的なことを為したのだと――子供にはわかった。
「う……う、うぅぅ……!?」
魔性が苦悶の声を洩らす。
少女に伸ばされたまま、まるで宙に縫い止められたかのように微動だにしない――否、できない腕は、よく見れば小刻みに震えている。
瞼のない目に浮かぶのは驚愕と――今や決して小さくはない恐怖。
底知れぬ何かを目にしたというように、魔性は少女だけを見つめていた。
「沼で溺れた子供の味を知ったこと自体はお前の罪ではない……けれど、その味が忘れられずになお欲し、その欲を制しきれなかったのはお前の弱さ。膨らむ欲を満たすためにただの子供では飽きたらず力を持つ子を糧にと望んだ……お前の罪はその選択を為したこと。お前は踏みとどまることを選ばず切り捨ててしまった」
淡々と告げる少女の言葉はまさに断罪のそれ。

子供にはその言葉の詳しい意味まではわからなかったが、今ここで絶対的強者が誰であるのかははっきりと感じられた。

少女の言葉は続く——淡々と。

どこまでも淡々と。

「駄目だわ。お前が悔い改めるとは到底思えない……償いの機会を与えても、お前はきっと応えない。だったらわたしにできることは——」

お前を滅ぼすことしかない——。

それは囁きですらない、声にもならぬものだった。

にもかかわらず、子供の耳にははっきりと聞こえたのだ。

胸を満たす恐れの対象は、いつの間にか自分の命を摘み取ろうとする魔性から、自分を守るように立ち上がった少女へとすり替わっていた。

それだけの圧倒的な力が、自分と十も違わぬ少女にはあったのだ！

恐い、恐い、恐い、恐い！

がたがたと震える体を、そばにいる大人の誰かが抱きしめるのを感じた。安心させるように「大丈夫だから」といくら囁かれても、子供の中に生まれた恐怖は全然収まりはしなかった。

当然だ。自分を救おうとしている相手に覚えた恐怖が明けることはないのだから。

少女がもし仮に敗北したとしたならば、自分の命は魔性に摘み取られるだろう。死を間近に感じて恐怖を覚えないはずがない。だが――だが、違うのだ。

それだけではないのだ。

もしも少女が魔性を退けたなら――そうしてこの命が救われたなら。

その先に、子供はどうしても明るいだけの喜びを見いだせない確信を抱いてしまった。

きっと、囚われてしまう――少女の力に。それがもたらす恐怖に。恐らくは生涯ずっと。

なのに、子供は少女の次なる声を待ち望んでもいるのだ。

もっと聞きたい――この澄んだ絶対的支配力に満ちた声を。

さらに知りたい――この少女が目前の魔性に下した裁きの内容を。

何を告げるのか――そしてそれは何をもたらすのか。

息をすることも忘れ、その瞬間を待っていた子供の耳に、感情の色を一切排除した少女の声が届いたのは数瞬の後のこと――。

「散り果てなさい、粉々に……滑籃」

絶対的支配に満ちた言葉が、未だ幼さを残す少女の口から放たれた。

子供は瞬きもせずに、それがもたらした現実を見つめた。

「う、あ……？」

魔性は自らに起こった事象を理解できぬまま、少女の命に従った。
子供にはそう見えた。
「なんだ？　なぜ、こんな……あり得ない！　なぜおれの体が……！　崩れていく？　なぜだ、なんでこんなことが……っ？」
ぱらぱら、ぱらぱらと……まるで砂でできた城が乾いて崩れ落ちるように、滑籃の体が解けて砕けていく。
「嘘だ、嘘だ！　こんなことがあり得るはずが……！」
それが、滑籃の残した最後の声だった。
ぱらぱらと崩れたその体は、塵ひとつ残さずに消え去った。
近くで誰かが安堵の息を洩らすのを子供は感じた。
自分を抱きしめてくれているひとのそれだとわかったけれど、子供にはどうしても同じ思いを抱くことはできなかった。
助かった——それは紛れもない事実ではあったけれど。
それ、以前に。
ふう、と息をつく少女の様子が見て取れて、心臓がどくんと大きく脈打った。
きっと彼女は振り返る。

——振り返らないで。

自分たちの安否を確かめ、さらに安心させるために。

わかっていても願わずにはいられなかった。

——振り返らないで。

見たくないのだ——絶対、決して、見たくないものを……少女が振り返ったら、その瞬間にも目にしてしまう。子供にはそれがわかっていた。

だから祈った。だから願った。

しかし、それは叶えられることなく——。

少女は、振り返った。

「もう、大丈夫よ」

告げられた言葉は、こちらを安心させるような優しい響きに満ちたもの——けれど、刻み込まれてしまった感情は、そんなもので払拭されることはなかった。

——恐い。

子供の脳裏に、刻みつけられた本能的な恐怖……それは。

少女の類い稀な美しい緑の双眸の放つ強烈且つ特異な力の残滓故のことだった。

そのとき、救われたはずの子供には、自分を喰らうために襲ってきた妖鬼よりも、自分を救

うために浮城から差し向けられた少女のほうがよほど恐ろしい存在だと感じられてならなかったのである。

※

夜風が頬を撫でるのに気づき、アーヴィヌスはふっと目を開けた。

周囲はすでに暗くなっている。少しだけ仮眠を取るつもりで執務室の長椅子に横になったのだが、予定より長く眠ってしまったらしい。

このところ激務が続いているせいで、疲れがたまっていたのだろう——起こしてくれるように頼んでいた護り手の砕温が声をかけなかったのは、それを知っているからだ。

しかし、折角の心遣いだが体がよく休めたとは言い難い。

浅い眠りがもたらした夢のせいで、アーヴィヌスは逆に疲れを覚えていた。

なぜ、今頃になってあのような過去の夢を——。

考えるまでもなく、先日断ることを決めた依頼のせいだ。このままでは妖鬼に村の子供は全員喰い殺されてしまうと、必死に言いつのった男の顔が脳裏に過ぎる。

だが、城長としてアーヴィヌスには、どうしてもその依頼を受けることができなかった。

子供が喰い殺されるという痛ましい話に心が動かなかったはずがない。

幼い日に、やはり妖鬼に餌として狙われたことのあるアーヴィヌスならばなおさらだ。きりきりと胸が締め付けられた。幼い自分は当時の浮城から派遣された破妖剣士と少女によって救われた。あの時浮城が断ったり、もしくは対応が遅れていたら今の自分はない。

魔性に対抗する術も力もない無力な人間の子供として両親ともども——あるいは村人ごと殺されていたに違いないのだ。

そんな自分が、同じような被害に遭っている村を見捨てる決断を下すことになるとは、運命は皮肉としか言いようがない。

しかし——。

「……仕方、ないのだ……」

奥歯を噛みしめるようにして、アーヴィヌスは声を絞り出した。

そう、仕方ないことなのだ。

世界中で頻発する魔性被害に、いまの浮城は対応しきれずにいる。全部を引き受けるには絶対的に実働要員の数が足りない。自然、村ぐるみ街ぐるみといった大きな被害が予想される依頼を優先せざるを得ない。だから……被害の小さなものは切り捨てるしかないではないか。

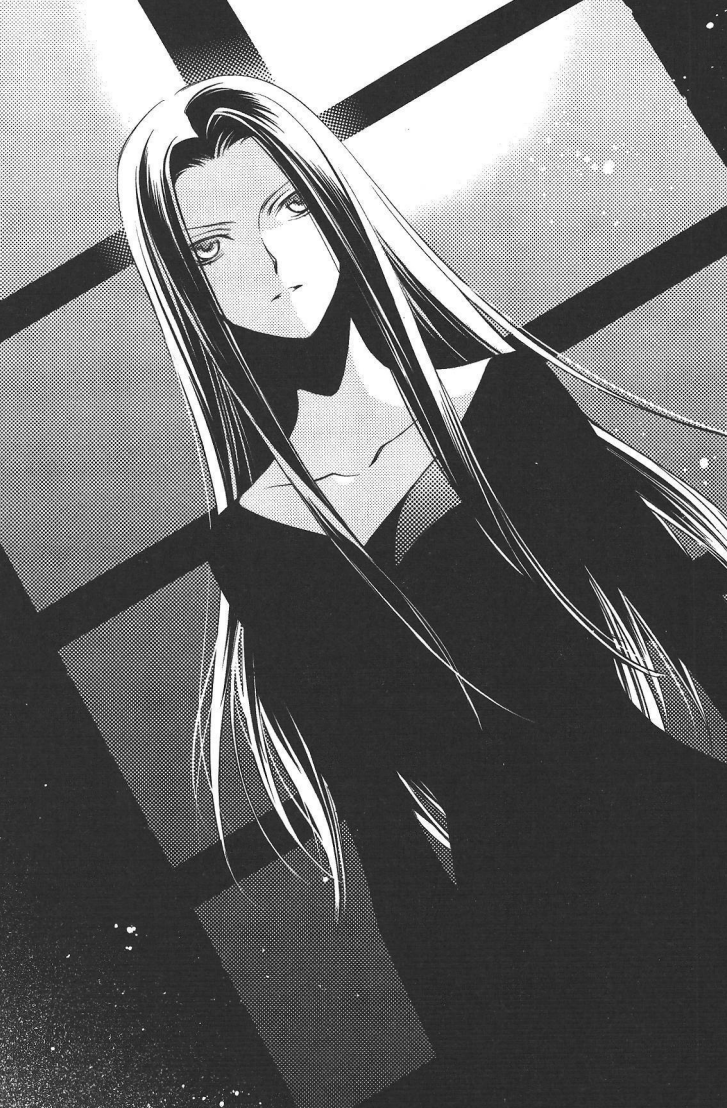
殺されるのを待つばかりの子供たちを思うと、どうにもやり切れない。だが、城長として往

復だけでかなりの日数を要する辺境の地に、貴重な人員を派遣する決断は下せない。
「以前とは……状況が違うのだ……」
声にどうしようもない苦みが宿る。
夜風がまた、頬を撫でる——そこでアーヴィヌスは違和感を覚えた。
執務室の窓を開けたまま、自分は長椅子に横たわっただろうか？
自問の答えは否。堆く積まれた書類が風で乱されるのを厭い、彼は城長になってからというもの窓を開けたことがなかったのだ。
砕温が開けたのか？　しかし彼がなぜ、何のために——？
疑問が脳裏に浮かんだ瞬間、アーヴィヌスの耳に自分の護り手のものでもない、しかし記憶にはある女性の声が飛び込んで来た。
「何がどう違うのかしら？」
涼やかな声だ。
耳に心地よい声だ。
しかし、それがアーヴィヌスにもたらしたのは先ほどの夢で覚えたものと共通した感情——恐怖だった。
馬鹿な。

声なく彼は呟いた。
あり得ない。これは二度と耳にすることのないはずの声だ。
耳にしてはならないはずの声だ。
「嘘だ……」
呆然と、アーヴィヌスは声のしたほうを振り返った。
扉から向かって右の壁面——大きな出窓からは月の光が射し込んでいた。
その出窓の縁……月光を切り取るように、黒く見えるひとつの影。
それは、髪の長い女性の姿をしていた。
「嘘だ」
もう一度、アーヴィヌスは洩らした。
誰だ、何者だと誰何することさえ思い浮かばない。それほどに彼の心は恐怖に縛り上げられていた。
しかし、そんな彼の心中など知らぬように、出窓の縁に腰を掛けていた人影は身軽に床に下りると可笑しそうに問いかけてくる。
「嘘？　なにが嘘だと？」
そのまま、人影が近づいてくる。

一歩ごとにアーヴィヌスの恐怖を高まらせながら！
頼りない月明かりの下、女性の顔が露になる。
烏羽玉の髪、シミ一つない白くきめ細やかな肌。臆することを知らぬ強烈な輝きを放つ双眸は緑柱石、傲慢なまでの笑みを形の良い唇が刻んでいる。
眩暈がした——悪夢に未だ自分が囚われたままなのではないかとアーヴィヌスは疑った。いや、悪夢などという言葉では到底足りない。
これは——。
「死んだはずだ……あなたはとっくに死んだはずだ！」
引きつる喉から迸ったのは無様なまでに怯えた悲鳴だった。
そんなアーヴィヌスに、相手は歩みを止めぬまま、くすりと笑った。
「そう……確かにそうね。だけど、暢気に死んでもいられない状況が持ち上がったものだから……仕方ないでしょう？　娘も息子も夫まで大変なことになっているんですもの」
とても大人しく死んではいられないわ。
とんでもないことを何でもないように告げて、死んだはずの女性はアーヴィヌスの記憶にあるままの若々しい美貌を月下に晒した。
そうして、また一歩近づく。

アーヴィヌスは竦んで動けない。
そんな彼に、その女性は淡々とした口調で話しかけてくる。
「あの子を、見たわ」
あの子というのが誰を指すのか、聞くまでもない。
しかし、アーヴィヌスは深まる混乱に思わず頭を振っていた。
「馬鹿な……護り手たちが厳重に警護していたはずだ……決められた者であっても簡単には辿りつけないように……」
だから、相手が『あの子』を見ることは不可能だ。
そのはずだというのに、女性はおかしなことでも聞いたと言わんばかりに口の端をつり上げた。
「忘れたの、アーヴィヌス坊や？　浮城の護り手の三分の一はわたしが集めたのよ？　そうでない者も含めて、誰も邪魔なんかしなかったわ」
それはそうだろう――。
痺れた脳裏の片隅で、アーヴィヌスは思った。
誰も何も、彼女に逆らえるはずがない。魔性の命を自ら崩壊させることさえ可能な強力にして凶悪無比な武器を彼女はその身に宿しているのだから！



闇の中で極上の緑の宝石が光を放つ——浮城史上最強の魅縛師の魅了眼は、だが人間の目には恐ろしすぎた。

そこに宿る光が怒りをたたえたものであればなおのこと。

ひ、と喉を引きつらせるアーヴィヌスの目前、その女性——チェリクは半ば腰を屈めた格好で問いかけてきた。

「あの子……幾重もの枷をつけられて眠らされていたわ。ねえ、アーヴィヌス坊や、あなた——わたしの娘に何をしたの？」

静かな静かなその声に、アーヴィヌスは全身を搦め捕られる錯覚に襲われた——。

2

全身が痛い。
背中も腰も何度も打ちつけられたせいで、少し動くだけで悲鳴を上げそうになるほどの痛みが走る。
気が遠くなるほどに絞めつけられた喉はずきずきともひりひりとも形容しがたい痛みで熱を持っている。
足にしっかりと力が入らない。
それでも、右手に持つものを杖代わりにしないのは最後にして絶対に譲れない意地ゆえだ。
アーゼンターラの右手に握られているのは、倒れそうになる体を支えるための杖などではない。真紅に輝く刀身を露にした破妖刀だ。
それは魔性の命を啜るもの。魔性の命を奪える唯一の武器だ。それを杖代わりになどできるはずがない。

「あたしの言うことを聞きなさい。そうしたら、あたしがあなたに極上の餌をご馳走してあげる」

威勢よく啖呵を切ったものの、現実としてはそれはこのままでは難しい。

心構えと覚悟だけではどうしようもないことはあるのだ。

しかし、アーゼンターラの心に焦りや絶望はない。それは自分を見つめる深紅と緑の色違いの瞳を持つ美女の表情に揺らぎがないせいかもしれないし、蜜里の気配を先ほどよりずっと近くに感じるせいかもしれない。

あるいは両方か——どちらにしても、とアーゼンターラは考える。

このまま無策で戦える相手ではない……目の前の、このラヴィスを飢餓の街へと変えた青年の姿をした妖貴は。

考えろ。

自分に必死に言い聞かす。

考えろ——この目の前の強大な魔性を倒すために必要なことは何であるのか。そのために自分が為せることが在るのか否か。

自問の問いはすぐに出た。

「蜜里……」

口から滑り落ちた護り手を呼ぶ声は、掠れて弱々しいものだった――声を上げるのも苦しい状況下でのことだから、無理からぬことではあったのだが……当然のことと予想していた、魔性の女性からの失望のため息は上がらなかった。

『覚悟を見せると言ったそばから、なんだそのざまは』

ぐらいのことは言われるかと覚悟していたのだが、どうやら相手はアーゼンターラが思うよりずっと優しい性格の主のようだ。

単にそのままでは戦えないと判断しただけだとしても、先ほど聞いたばかりの、傷だらけになってなお破妖刀を手放さずに戦い続けたという破妖剣士の話を思えば、自分の行動は惰弱に映るに違いないというのに、相手は何も言わない。

……まあ、言われたところでやるけど。

蜜里を呼び、頼みを叶えてもらわなければ何も始まらないのだ。仕方ない。

「悪いけど、痛みだけ取って」

何でもないことのように告げたアーゼンターラに、護り手である漆黒の妖貴の少女が悲鳴にも似た声を上げた。

「ターラ！」

そんな傷だらけの体で――と、非難する響きに気づかぬわけではなかったが、これも仕方のないことだ。

折角、相手の妖貴が引きちぎられた腕の傷を再生できぬままでいるのだ。ここで自分の治療を優先したあげく、彼に自己治癒の時間を与えるのはどうにも拙い。それは自分が与えた傷ではないけれど、妖貴という強大すぎる相手と戦う上では決して逃せない好機なのだ。なにがどうでも活用しなければならない。

「いいから、お願い。それからあれを……持って来てるって、言ってたわよね？」

問いというより、それは確認。

十歳前後の少女にしか見えない妖貴の少女は、アーゼンターラのその言葉に一瞬なにかを言いかけ、しかしそれを音にすることなく唇を噛みしめた。

「まったく、言い出したら聞かないんだから！」

この馬鹿娘！

本気で怒鳴りつけられ、その怒気の激しさに胸は痛んだけれど――それでも、違うことなく自分の望みを叶えてくれる蜜里にアーゼンターラは心からの感謝の笑みを向けた。

すう、と痛みが引いていく。

体は傷ついたままだ。けれどそれは構わない。大事なことは相手の妖貴が回復する前に手を打つことだ。必要なのは、そのために打ちつける『杭』となるもの。

「ありがとう」

短く告げて、アーゼンターラは蜜里が手の中に落としてくれた、長めの箸のようなもの数本をぎゅっと握りしめた。

指にも肌にもこれ以上はないというほどに、馴染む。

この感覚は久しぶりだが、それは当然のことだ。

それらは全て、かつてのアーゼンターラが作り上げたものだ……手製の棒に繊細な螺旋の溝を彫り込んだそれは、いつの間にか『螺旋杖』と呼ばれるようになったもの。

捕縛師として魔性の命を封じるために作り上げたものに比べればかなり小振りだ。しかも相手は妖鬼とは比べものにならない力を誇ると言われる妖貴。小振りの螺旋杖など何本用意したところでその命を封じることなどできはしない。

だが、破妖剣士として——紅蓮姫の前の使い手に到底及ばないことを自覚して……それでもなお彼女を必要としている自分は、持てる力の全てを出し切って前に進むしかないのだ。

「あたしが彫り上げて、あたしが螺旋の溝を刻んだ……これは搦め捕る力に溢れたもの。小さくとも魔性を捕らえる螺旋杖であることに変わりはない！」

叫ぶと同時にアーゼンターラはそれらを妖貴の青年に向けて投じた。
正確には、その四肢を狙って――。
そして、それと同時に左手に持ち替えていた真紅の刀身の破妖刀の柄を。
両手でしっかりと握り、斬り込んだ！
「倒すわ！」
しかし、その切っ先は相手に難なく避けられてしまう。
「覚悟だ何だのとたいそうなことを言ったわりに他愛ない」
引きちぎられた右腕もそのままに、黒髪の魔性が嘲りも露に声を上げる。
「こんな小賢しい小細工で、どうにかできると思われているのなら、それは大した侮辱だ……許し難いね」
どうやら左右色違いの瞳の女性の干渉はないと見切ったのか、アーゼンターラに対する態度は余裕を取り戻していた。
右腕がなくとも、自分を相手にするのに不自由はないとでも思っているのだろう――確かに先ほどまでの情けない姿を思えば、青年の判断は妥当だ。
しかし、今は違う。
違うことを、けれどわざわざ明かすこともない。

「あなたに許してもらう必要性は感じないから構わない！」
叫んでアーゼンターラは再度紅蓮姫を振るう。
暴走こそしていないが、ついつい心臓の位置を狙いそうになるのは破妖刀の貪欲な食欲ゆえか――容易く避けられるのも無理はない。
舌打ちを洩らしながら、袖に隠していた一番小さな螺旋杖を青年の眉間目がけて投げつける！
それは小振りながら、強い『縛』の意を込めた溝が彫られたものだった。
眉間に突き立てられれば、妖貴とはいえ多少は動きを封じられるはず――そんなアーゼンターラの思いを読み取ったのか、あるいは螺旋杖に宿る力の気配を感じ取ったのか、青年が横に飛び退いて杖の直撃を避けた。
少しだけ、その顔色が変わったのをアーゼンターラは見逃さなかった。
青年の漆黒の瞳に、先ほどまでは欠片もなかった警戒の色が浮かぶ。探るような目を向けられて、彼女はわずかに口元を綻ばせた。
「……いやな、小道具を使うね？」
君は破妖剣士ではなかったのか――？
問いかける声は上がらなかったが、何より雄弁に彼の瞳が訴えていた。お前は破妖剣士では

なく捕縛師なのか、と。

「いまは破妖剣士よ」

でも、使えるものは全部使う——だから、捕縛師としての能力を戦いに持ち込むことに何の躊躇も覚えはしない。

「そうか……だが、無駄な足掻きであることに変わりはない！　こんなものまで持ち込んでご苦労なことだが、それでもきみに勝機はない！」

そう言いながら、青年が放った一撃は先ほどまでの嬲るようなものとは明らかに違うものだった。

それは焦りか——いや、それはあまりに自分にとって甘い期待というものだ。恐らく青年は予想外のアーゼンターラの『能力』がもたらすかもしれない万が一を懸念し、早々にその芽を摘む気になっただけだろう。

その証拠に、青年の放った力はアーゼンターラ本人ではなく、彼女が放った数本の螺旋杖にのみ向けられていた。

彼の四肢に、眉間に放った小振りの螺旋杖——五本ともが一瞬にして粉々に砕かれる。

しかしそれこそが、彼女が待っていた瞬間だったのだ！

破壊のために向けられた青年の力——その性質を杖に刻まれた螺旋の溝は刻みこみ、作り手

であるアーゼンターラに伝えて来る。決して封魔具職人に任せられない螺旋杖の製作――その理由がここにある。

螺旋杖の溝に触れた力の情報は、作り手にしか伝わらないのだ。

そして、それは破壊される瞬間に刻まれたものでも変わらない――青年の力に関する情報は、瞬時にアーゼンターラの脳裏に伝わってきた。

それは真っ白な網。

いや、網と違って平面にのみ広がっているものではない。立体的に網状の細い糸状のものが絡み合い繋がりあっている。

既視感を覚える。

これは見たことのあるものだ。

どこで？

……そうだ、故郷の村の外れの森……その奥で。

年経りた大木が立ち並び、昼間でさえ陽の射さぬ薄暗い森の中。寿命を終えた老木が自ら倒れ、腐木と化した姿を幼い日にアーゼンターラは目にした。

それに蹴りを入れたのは、幼い彼女にとってその倒木は進路を阻む障害物でしかなく、迂回する時間もなかったがための八つ当たりだった。

蹴ったところで意味がない。わかっていても蹴らずにはおれなかった。

しかし、倒木は硬い感触を彼女の足に返しては来なかった。妙に柔らかな感触とともに、アーゼンターラが蹴った部分がぼろりと崩れた。

命を終えた存在は地に還るもの——そんなことは知っているつもりだった。だが、乗り越えることさえできないほどに太い幹を晒す倒木が、こんなにも呆気なく崩れるとは……土に還りつつある姿を目の当たりにするとは想像もしていなかったのだ。

人間の何倍も生きてきた大木さえも、命を終えた後はただ大地に還るのだと——はっきりと理解したあの日……ぼろりと崩れた木の中に見えたモノ。

真白の網……いや、網状の……木の組織に喰い込み蝕むように広がっていたあれ、と。

脳が受け取った情報は限りなく似ている。

老木を苗代に繁殖するために張り巡らされた純白の——あれは。

「……菌糸？」

そうだ。

青年から放たれた力の印象は、限りなくあれに……腐木の内部を覆い尽くす純白の菌糸に近かった！

摑んだ！

そう、思った瞬間のこと――。
爆風に晒されたように、アーゼンターラの体は宙を舞っていた。
「ターラ！」
蜜里の悲鳴――そして、それ以上に危機を確信させるなにか。
反射的にそちらを振り向いたアーゼンターラは、自分を見つめる黒髪の青年と目があった。
ぎらぎらと滾る憎悪を隠しもせず、彼は彼女を睨みつけていた。
「……取るに足らぬ塵芥の分際で、何を視た!?　貴様、いったい何を視たっ!?」
ヒステリックな青年の声に、アーゼンターラは自分が違わず相手の本質を――それも恐らくは致命的弱点に繋がる何かを見いだしたのだと確信した。
その瞬間の正直なところを言葉にするなら「様を見ろ」という、あまり品がよろしくないものだった。
してやったという充足感と満足感はあるのだが、ここで終わってしまっては意味がない。
一矢報いた程度で死ぬわけにはいかないのだ。
「ターラ！」
蜜里の悲鳴を遠くに聞いた。
馬鹿だと思った。

なぜ、そんな声を出すぐらいならすぐそばにいないのかと。

今などはっきり言って命の危機だ。弱みを握られたと信じて疑わない様子の青年妖貴は、自分を殺す気満々で、吹き飛ばされている最中で避けることもできない自分を狙っている。

なのに、何を手をこまねいているのか。

これじゃあ、蜜里。あんた悲鳴をあげるしか能のない無能護り手の烙印押されても無理はないと……。

と、そこまで思った時のことだった。

蜜里が、喉も裂けよとばかりに絶叫したのだ！

「ターラ！　許して！　許可して！　わたしがターラのすぐそばにいることを！　でなきゃ、わたしはターラを護れない！」

悲痛な、悲痛な響きを宿した少女の声に、アーゼンターラは自分が記憶をすり替えていた三年の間に、未だ解けていない呪縛を相手にかけていたことを悟った。

近寄るな。

ターラと呼ぶな。

覚えているのはそれぐらいだ――だが、きっと他にもいろいろ蜜里の行動を抑制する枷をつけたに違いない。

思い出せない自分が不甲斐ない。だが、いま必要なのはそんな反省でも慚愧でもない。

不可欠なこと、は。

「蜜里！　生まれたばかりの蜜里を見つけて拾ってそばにいろって言ったのはあたし！　あたしであるあたし！　あたしじゃないころのあたしの言ったことなんて気にすることない――っていうか！　完全抹殺してちょうだい！」

だから、許可なんて求めるんじゃない――！

叫んだ瞬間、妖貴の青年の放った破壊の力がこの身に届くのを視たと思った。

いや、確かに感じた。

凶暴な青年の意志そのものが力となったとしか思えない嵐が、アーゼンターラの全身に襲いかかった。

滅べ、滅べ、滅べ！

呪詛にも似た青年の叫びを伴った力が、我が身を千々に引き裂いていく……。

意識が遠ざかる。

駄目だと必死に我が身を叱咤したが、圧倒的力によって引き裂かれた意識は現実に留まってはいられなかった。

こんなことでは駄目なのに……。

それが、アーゼンターラが紡いだ思考の最後だった。
だから彼女は気づけなかった——妖貴の青年が引き裂いていく彼女の心を補い癒していく力がその身を包んだことに。
そうしてアーゼンターラは夢を見る——。

※

「それはなに？」
幼い黒髪の少女が問いかけてくるのに、アーゼンターラは得意満面に答える。
「おまじない」
森の中——地面に座り込んだ銀髪の少女の右手には細い棒が握られており、落ち葉をかき分けた黒い土の上には渦巻きが描かれていた。
「呪い？」
そのぐるぐるが？
生まれてまだ間もない妖貴の問いかけに、外見上ほんの少しだけ年上に見えるアーゼンターラは優越感もあってにこやかに応じた。

「そう、このぐるぐるが」

言って彼女は棒を手放すと、地面に描いた渦巻きに両手で触れた。

「これがあたしの異能なんだって。村のお婆が言ってた。図柄から受ける印象に繋がる力が勝手に湧き上がって溢れ出すんだって。だから、まん丸を村全部を覆った大きさでイメージしなさいっていつも言われるの。それで村の護りは堅固になるからって」

でも、あたしまん丸は今ひとつ苦手なのよね。

なんだか閉じた感じで息苦しいし。

それは守護の円環——結界を意味する形。

だが、当時のアーゼンターラにはそんなことはわからなかった。村を守護するお婆のそばには何人か異能の持ち主がついていた。

全員自分より年上で、全員お婆の後を継いで村を守りたがっていた。

だから、自分までもがお婆の弟子になる必要はないと思った。まん丸をイメージして村を覆い続けるだけの一生なんて冗談じゃないとも感じていたから。

……だから、まん丸の図柄は嫌いだし、苦手。

でも、ぐるぐる——渦巻きは違う。

「すっごくイメージしやすいの。たとえば外側だけどね」

くるくる回りながら広がる図柄――イメージを重ねれば、その線のままにどこまでも意識は広がっていく。

「何処で落としたかわからない失せモノを探すのには最適よ。渦巻きを頭に浮かべて広げていけばほとんど見つかるもの」

それまでアーゼンターラの説明を聞くだけだった黒髪の少女が問いを放った。

「じゃあ、内側は？」

なにをイメージするの？

渦巻きの内側――どこまでも限りなく渦巻いていくその内側、は。

「……深いところ」

そうとしか、アーゼンターラには答えられない。

どこまでも小さな円に似ながら非なる曲線を描くその先。

地面に描いたぐるぐるの中心が真っ黒くなっても果てることなく続くその先――。

それはもう、本当に『深いところ』としか答えようがなくて。

しかし、そこに新たな方向性を与えてくれたのは幼い妖貴の少女の言葉だった。

「なら、ターラ。平面じゃなく立体的に思い浮かべればいいのに。ぐるぐるの中心は深く、深くどこまでも深く、ぐるぐるの外側は広く広くどこまでも広く高く」

「できないわよ！」

即答したのはそれまで考えたこともない提案に戸惑ったからだ。

恐いという思いもあった。

渦巻きの中心部分を追うのはアーゼンターラにとって常に恐ろしいことだったから――なにか見たことも聞いたこともない何かが飛び出して来そうで、だからずっと忌避（きひ）してきた。

けれど、幼い妖貴はこともなげに言い放つのだ。

「できる」

そうして少女が指ですい、と宙に円に似た線を描いた瞬間――地面に描かれた渦巻きが平面から立体的なものへと変化した。

地面に描かれ動かないはずの線が、空中に浮かぶ螺旋となったのだ。

「……こんな……」

こんなことが――。

言葉をなくすアーゼンターラに、黒髪の少女がそっと手を重ねてきた。

「意と気を合わせて、ターラ。大丈夫、できるから」

いきを合わせて――と聞こえた。

呼吸を整え、少女が重ねた掌（てのひら）に意識を集中しながら、アーゼンターラはそっと目を閉じる

——そうして。

そうして、その先に。

視えた世界はアーゼンターラのそれを大きく変えた。

視る力——そして視たものを読み解く力。

それが彼女が生まれ持った異能の正体だった。

その力の使い方を、図らずも彼女は魔性から教えられたのだ——。

3

「ターラ！」

必死に自分を呼ぶ声には覚えがあった。

蜜里だ。

「ターラ！」

泣きそうな声で名を呼ばれるのは、出会ってからというもの、あまり珍しくはない頻度であったことだが、アーゼンターラはそれがあまり好きではなかった。

大袈裟だ、と思うからだ。

確かに崖から落ちて意識を失った時は、蜜里の泣きそうな声で目覚めた瞬間、非常に申し訳ない気分に陥ったものだけれど……それぐらい、幼い黒髪黒瞳の少女は絶望そのものを瞳に映し出していたのだけれど。

実際のところはといえば、アーゼンターラは崖の途中の出っ張りに引っかかっただけですん

だことを思えば、やはり大袈裟だと思うのだ。

現実的な数値としては、彼女が足を滑らせて落下した距離はその身長の三分の二ほど——よほど運でも悪くない限り打ち身と擦り傷がせいぜいの高さだった。

蜜里の心配性——。

その時はそう思ったものだけれど、今回は大袈裟とは言えない。

妖貴の青年に吹き飛ばされ、再び背中を壁に強打したせいで痛みがぶり返してきた。そもそも怪我を治してもらってはいないのだ。全身打ち身の痣だらけになっているに違いない。

だが——。

「……そんな顔、しないで」

自分を覗きこんでくる蜜里の丸みを帯びた頬にそっと指で触れながら、アーゼンターラは小さく笑った。

可愛い蜜里——いつだって自分のことを心配してくれる小さな友人。

記憶を違えていたとはいえ、どうして三年もの間彼女を拒絶していたのだろう——その理由は薄々わかってはいるけれど、この声と顔を見れば、自分の誤解だと確信できる。

ゆっくりと体を起こす。

妖貴からの攻撃はない。見れば自分たちの周囲には、金色の光が繭のように集っている。

蜜里の魔具の力だろう。
恐らく相手からの攻撃を防いでくれているのだ。
けれど、いつまでもこの安全な繭の中に隠れているわけにはいかない。自分はラヴィスを解放するためにここにいるのだから――アーゼンターラは唇を噛みしめた。
「蜜里」
決意をこめて、護り手の名を呼ぶ。
「なに、ターラ？」
「力を貸して……昔のように」
昔、というほどに遠くはない過去のこと――けれど今はそう言うのが正しく思えた。
蜜里の漆黒の瞳に真摯な光が浮かんだ。
「どうするの？」
「同調してほしいの。そうすれば、あたしはもっとくわしくあいつを視ることができる……そして暴くわ、あいつの力！」
先ほどの青年の激怒した様子から考えて、彼には暴かれては困る何かがある、きっと。
ならば暴かないでどうするのか。倒す一助になるのなら、なにを躊躇うことがあろう。
アーゼンターラは自らに言い聞かせる。

目的のためには手段は選ばない——これはやはり変わらない。ただ、以前と違うのは自分をしっかりと保つこと、だ。

誰かを頼りにしたり力を借りることは、決して恥ずべき行為ではない。

恥ずべきは頼り切ること、丸投げすること、自分を投げ出すこと。

しっかりとした自分というものがなくて、どうして他者に「力を貸せ」などと言えるだろう。

しかし、蜜里は躊躇う素振りを見せた。

「だけど……」

少女の声には抑えきれない不安の響きがあった。

それが彼女自身のためではなく、自分を気遣ってのものなのだと、今のアーゼンターラにはわかった。

四年前——ふたりの妖貴によって村を灼かれた。あの夜の恐怖は到底忘れられるものではない。けれど、蜜里はあのふたりではない。たったひとりのアーゼンターラが信じる異種の友人なのだ。

そんな彼女と心を重ねることを、どうして恐れる必要があるのか。不信も憎悪も向けるべき相手は別にいる。それがわかっている以上、蜜里を疑うことはない。

「頼んでいるのはあたしよ。いいから力を貸しなさい！」
きっぱりと言いきったアーゼンターラの目の前で、小さな妖貴は何度か目を瞬かせ、そうして嬉しそうに頷いた。
「うん、ターラ！」
ぱっと、花のような笑顔で少女が答えたとき、カタ、と床に何か硬いものがぶつかるような音が聞こえた。
カタ、カタカタ、カタ――音源を振り返れば、それはアーゼンターラの手を離れた真紅の破妖刀。
強大な魔性の気配に、使い手を求めるようにその刀身を震わせている。
ここでその柄に触れようものなら、貪欲な破妖刀が誰を餌と見なすかは火を見るよりも明らかだ。
冗談ではない。
アーゼンターラはぴしゃりと紅蓮姫を叱りつけた。
「紅蓮姫！　ご馳走が欲しければあたしがよしと言うまでおとなしくしてなさい！　もし食いはぐれるようなことになっても、あたしは！　絶対！　別のご馳走なんて用意してあげないんだからね！」

彼女の言葉のどこに反応したのか、紅蓮姫の震えがぴたりと止んだ。
「……ターラって、すごいかも」
ぽつりと蜜里が呟いたが、アーゼンターラは聞かなかったことにした。

※

必要なのは一瞬の集中――。
「行くわよ」
すっくと立ち上がったアーゼンターラは、蜜里に声をかけると同時に残っていた螺旋杖の一本を漆黒を纏う青年に投げつけた。
「扱いきれぬ破妖刀を捨てて封魔具に頼る、か……だが、そうと知ればこのようなもの何の脅威にもならないよ」
先ほどの焦った様子が嘘のように、妖貴の青年は余裕たっぷりに、飛来する螺旋杖を見つめた――その眼差しに宿る力が、次の瞬間小振りの杖をただの木の欠片へと変えてしまう。
しかしそんなことはアーゼンターラにも読めていた。
螺旋杖が砕け散るまさにその刹那――背後に浮かんだ蜜里の両腕が彼女の体に回された。ふ

たりとも目は開いたまま、それでもふわりとふたつの意識が重なるのを感じた。
脳裏に浮かぶのは宙に描かれた螺旋。
深く深く、どこまでも奥へ――同時に、広く広くどこまでも広く。
螺旋杖に触れた妖貴の力のありようを突き止めるために、螺旋を描く。
最初に視えたのは、先ほどと同じ菌糸を思わせる白い網状のもの。
青年の体からのびたそれらは、ここではないどこかに繋がっている。
どこに――何に？
あの白い網は――なに？
自問すれば、アーゼンターラの異能は答えを見つけるためにそれに触れる――途端にすう、と力が脱けた。
蜜里の声ならぬ声が警告してきた。
『ターラ、触っては駄目。あれは力を吸い取るものだわ』
そうみたいね、と頷いて彼女はそれからほんの少しだけ距離を取る。
だが、一度触れたおかげで触れずともそれが繋がる場所を辿ることは可能だった。
『いくつかに枝分かれしてる……？』
遠い場所もあれば、すぐ近くに感じるものもある。

一番近いのは――。

探ってみて、気づいた事実にアーゼンターラははっと息を呑んだ。

菌糸に似た白い網状の糸は、このラヴィス全体に繋がっていたのだ！

いや、違う――ラヴィスに、ではない。正確には……。

この街の住人たちに――だ。

それが肉体に繋がっているのか、あるいは精神に繋がっているのか――そこまでは見て取れない。

けれど、そういうことならば得心が行く、とアーゼンターラは思った。

ラヴィスの住民を根絶やしにするつもりはない、と青年は告げた。

実験なのだから、と。飢えのあまり同族に手をかけ、その血肉を口にしたあと、解放された人々の心の在り方に興味があるから――と。

それは、とてつもなく悪趣味で残酷な好奇心ゆえの行動だと、周囲に信じさせるための言い訳でしかなかったのだ。本当に彼が必要としたのは、生きたままのラヴィスの住人たち――生き残った彼らの絶望を、慟哭をこそ、この妖貴は必要としていたのだ。

生きていく糧とするために！

目の前の青年は、人間に寄生しているのだ！

以前、魔性が人間を害する理由を蜜里に問うたことがある——その時返された答えは「面白いから」だった。

糧として必要だから襲うのではないのかと尋ねると、幼い妖貴は「それはない」と言いきった。

『力がごくごく弱い小鬼なんかはね、自然の気を取りこむことができなくて代わりに人間の血肉を食べて糧にすることもあるらしいけどね。妖鬼や……ましてやわたしみたいな妖貴ではあり得ないことよ。人間の血肉なり気なりを取り入れなければ生きていけないだなんて、そんな輩はいい笑いものだわ。いいえ、恥晒しだと言われるでしょうね』

その言葉は恐らくは魔性における共通の認識なのだ。

だから、青年は恥を晒さぬために様々な工作を施した。

自分が人間を糧とするしかない性を持つことをひたすらに隠すために、この街では実験だったのだと周囲を納得させるためだけに住民たちに飢餓を強いた。

漆黒を纏う妖貴のやることとも思えぬ、小賢しく卑劣な隠蔽工作——だからこそ、その片鱗を視抜いたアーゼンターラにあれほどの怒りをぶつけてきたのだ！

「なんてこと……なんて……！」

視えた事象が物語る真実に、思わずアーゼンターラは声を洩らした。

黒髪の青年が、その声にぴくりと反応するのを見た瞬間、彼女は持っていた最後の螺旋杖を振りかざした！

「寄生するための根！　寄生するための糸！　寄生するための網！　全て悉くはこの螺旋に還れ！」

正確に真実を見抜いたアーゼンターラの放つ言葉に、見抜かれた現実は支配される。

ラヴィス中に張り巡らされた……否、世界のあちこちの苗床に伸びた全ての白い根は、彼女が振り上げた螺旋杖の螺旋の溝に吸い込まれていく。

「蜜里！」

そうして、彼女は護り手を呼んだ。

「螺旋に吸い込まれたあいつの力……菌糸擬全部！　灼き尽くして！」

「わかったわ！」

蜜里の反応は速かった。

「貴様ら……なにを……!?」

青年が困惑したような声を上げた瞬間――それは始まり、そうして終わった。

「貴様らあぁぁっ！」

菌糸擬と称されたものを蜜里によって灼き尽くされた漆黒の魔性が怒りに満ちた咆吼を上げ

た。

しかし、それはすでに――。

「遅いわ」

きっぱりと言い切り、アーゼンターラは床に落ちたままの破妖刀に手を伸ばす。

「お待たせ、紅蓮姫。さあ、あの魔性の命をご馳走してあげる」

囁かれたアーゼンターラの甘やかな声に、真紅の破妖刀は歓喜の声を上げた――。

第十七章　見据える先

1

ひゅんっ、と音を立てて矢が空を舞う。
漆黒の羽が軌跡を描きながら狙う的へと飛んでいく――その矢尻が妖鬼の右肩に埋まった瞬間、恐ろしいまでの絶叫が響き渡った。
「貴様……貴様ぁっっ！」
三つ存在する心臓のひとつを潰された妖鬼は、憎悪を以て射手である女性に襲いかかろうとする。
「遅いわ」
すでに二本目の矢を番えた女性があっさりと答える。
砂色の髪の女性は、自らの封魔具――矢尻を魔性の心臓へ突き立てるのに慣れていた。声と同時にふたつめの心臓も潰される。
だが、これで終いではない。

妖鬼の心臓は三つ――三個の命全てを封じなければ仕事を成し遂げたことにはならない。
彼女が三本目の矢を番えたとき、妖鬼の鋭い鉤爪は砂色の髪に縁取られた美しい顔に届こうとしていた。
それが見えぬはずもなかろうに、彼女の表情に変化はない。
怯えも驚愕も――双眸に宿る確固たる意志だけが、相手の妖鬼に向けられている。
「浮城の捕縛師風情がぁぁっっ！」
命数の三分の二を潰された妖鬼の憎悪に満ちた声とともに、その鉤爪が女性の顔に振り下ろされる――！
が。
その爪が彼女の皮膚を傷つけることはなかった。
きん、と甲高い音とともに、妖鬼の鉤爪が粉々に砕かれてしまったせいだ。
「無精なところまで似ていなくてもいいだろうに」
不機嫌な青年の声が上から降ってくるのに、女性は微かに口元を綻ばせた。
しかし、その唇から洩れたのは笑みの響きなどかけらも宿らぬ声――。
「優先順位の問題よ」
短く答えると同時に、三本目の矢が放たれる――至近距離で放たれた矢は、真っ直ぐに妖鬼

の最後の心臓を打ち抜いた。

「貴様、きさま、キサマ……っ」

呪詛するような声だけを残して、妖鬼の肉体が霧散したのは次の刹那のこと——魔性の命を封じた三個の矢尻が、音をたてて転がり落ちた。

捕縛師であるサティンが、今回の仕事を完遂した瞬間だった——。

※

「怪我はないようだな」

気遣うような言葉にもかかわらず、愛想のかけらもない声をかけてきた黒髪黒瞳の青年に、サティンははらりと髪をかきあげながら、軽く肩を竦めて答えた。

「お陰様で。誰かさんがあいつの腕を吹き飛ばしてくれたおかげでね……狙いがずれそうになって焦ったけど、さすがはわたし！　我が腕前ながら惚れ惚れするわね」

自画自賛どころか自画絶賛である。

青年が鼻白むのも無理はないかもしれない。

「よくも言う……あのままだったらその顔は真っ二つに割られてたぞ」

読みが甘い証拠だろうが。

毒というほどではないが、かなりきつい台詞を鼻で笑いながら口にする青年の容姿は、厭味なほどに整っている。

美と力が比例する魔性の中にあって、世界に五十人ほどしか存在しないと言われる上級魔性――妖貴なのだから、それは当然といえば当然なのだが、上から目線でこういう風に言われると憎らしさは無限大に膨れあがる。

ああ、造作が変わるほど殴ってやれたらどんなに気が晴れるかしら！

密かにこぶしを握りしめ、震わせながらサティンは思う。この余計な一言のせいで、素直に礼も言えなくなるのだ。たまには自分だとて礼の言葉くらい言いたいと思うのに……特に今回は、確かに自分の読みが甘く、あのままでは頭部に大怪我を負っていたに違いないのだから。

しかし、この青年――鎖縛の態度がそれを許してくれない。

こいつの友人が少ないのは、きっとこの性格も関係してるわよねえ。

柘榴の妖主の粗悪な模造品扱いしかされて来なかったという来歴は、問題の妖主本人を知る身としては非常に同情を覚えるものがあるのだが、しかしだからといってその言動すべてを許せるほどのものではない。

こんな相手と組むしかない己が状況を今さらながら呪いたくなるが、呪ったところで現実が

変わるわけでもない上、すでに鎖縛を護り手と認識してしまっている以上嘆くのは時間の無駄というものだ。

ここは諦めて順応するしかない。

「恩着せがましいわね。どうせわたしの顔に傷がついたら、誰かさんとか誰かさんとかに無能とか役立たずとか言われるに決まっているから助けてくれただけなんでしょうに。まあ、でもわたしはきちんと礼儀を踏まえた大人ですから？　こういう場合、ちゃあんとお礼ぐらい言いますけど？」

にっこり微笑み、充分に当てこすってから彼女はさらりと礼を言う。

「ありがとう、鎖縛。おかげで助かったわ」

以前はよくつっかえていた名前も、今では自然に口にできる。

それぐらいには馴染んでしまった存在だが、つきあい方はまだまだ模索中なのだ。

一方、誰かさんとか誰かさんの顔を思い浮かべたのだろう——ますます機嫌を損ねた顔になった青年はふん、と顔を背けた。

「たまには皮肉の前置きなしに礼ぐらい言えないのか」

ぼそりと呟かれた一言に、サティンは内心こぶしを振り上げた。

たまにも素直にお礼も言えないのは、あんたのその性格のせいだって言うの！

ねちねちねちねち、こちらの感謝を拒絶しているとしか思えない時がある。未だに自分の護り手になったことを心底納得はしていないのかもしれない。

でも、まあ……。呼べば、応えてはくれるのよね。

それだけでも大きな進歩だと思うべきだろう、とサティンは自分に言い聞かせた。

人間同士でも信頼関係を築くには時間がかかる。

築いたと思っても、思いがけずに崩れてしまうことだって珍しくはない。それを思えば、一朝一夕に鎖縛と絆を作り上げられるはずがないのだ……種族の違いという壁がさらにあるのだから。

妖貴である彼と捕縛師である自分――それでも積み上げてきた時間は無駄ではないのだと思えるから、こうやって一緒にいるのだ。

「まあ、ごく稀にならそういう気分になれるかもしれないから、期待して待っててちょうだいな。それより、関係者たちは全員集めてある？」

今回の依頼主はクァンティという街の有力者たちだった。

妖貴に攫われた彼らの娘たちの救出というのがサティンに与えられた任務だ――当然浮城の捕縛師である以上、元凶たる妖鬼を倒した上でという条件がつく。

愛らしくもささやかな少女達の悩みにつけこんで――たとえば鼻がもう少し高ければとか、

もう少し目が大きければとか、もっと小柄だったらとか、もう少し肉づきが良かったらとか——お洒落したい年頃の娘にとっては無視できない様々な望みを叶えてやると言って、妖鬼は彼女たちを誘い出し、自らの住処に連れ帰った。

だが、上級魔性でもない妖鬼に、人間の外見を変えるだけの力などない。彼女たちは妖鬼のもたらす『願いが叶えられ、幸せになった』夢の中で少しずつ生気を啜り取られていたのだ。

彼女たちを攫った妖鬼の目的は娯楽だ。

若い娘の生気を、花の香りを楽しむように味わっていた。

だから、サティンが妖鬼を倒した時点で、多少の衰弱は見られるものの全員の保護が叶ったのだ。後は夢から覚まし、栄養のあるものを摂取させればほどなく全快するだろう。

だから、この後サティンたちがやることは決まっていた。

——はずなのだが。

「集めてある。それで、いつものように眠らせるとして期限は？　娘たちは少しばかり栄養失調状態だからな、あまり長くは拙いぞ」

鎖縛の言葉に、サティンは「ええ？」と声を上げた。

「栄養補給してあげながら眠ってもらう、とかできないの？」

その程度のことが——？

いやみたらしく問いかけると、面白いほどに顔を顰める鎖縛の姿。
あ、顔が歪んだ。ちょっと、楽しいかも。
趣味の良くない喜びを噛みしめながら、サティンは「どうなの？」と問いを重ねる。
返ってきたのは――。
「何でそんな面倒なことを……やれと言うならやってやるが、それでもあんまり長くは勧められないぞ。一度妖鬼の妖気に触れた娘たちだ、いくらおれが気を抑えても、完全に妖気を消すことはできない。人間の心身に妖気は毒だからな、下手をしたら肉体の一部が変質しかねない……救った以上妖化させるのは気が進まないだろう？」
と、なかなかに親切な言葉だった。
ちゃんとわかりやすい説明だってできるんじゃあないの……いつもこうなら、わたしだって妙な意地を張ることもないってのに……。
そこまで考えたサティンの脳裏に、実に手際よく摑んだ情報を説明してくれる鎖縛と彼に対して素直に振る舞っている自分という光景が浮かんだ。
……あり得ない。というか、鳥肌が立つような気持ち悪さがある。
「サティン？」
最近ようやく名前で呼びかけてくるようになった青年の怪訝そうな声に、彼女ははっと我に

返った。

「な、なんでもないわ。うん、それじゃあ鎖縛、どれぐらいが限度だと思う？　さすがに二日じゃいくら移動手段があれでもきついと思うんだけど……」

「寄り道にかけられる時間は三日というところだ。最長五日は記憶の齟齬なく誤魔化すことは可能だが、あまり仕事が長引くとお前の評価に響きかねない。誰かの不審を買うようなことになれば、最悪またチームを組まされるぞ」

鎖縛のもっともな言葉に、サティンは「うう、やだわ」と渋面になった。

力の強い護り手がいるおかげで、こうして仕事の度に寄り道させてもらっているわけだが、浮城上層部にとって自分が相変わらず要注意人物である以上、下手な行動は慎むべきだろう。

青年の言う通り、以前のようにチームという名の監視役に囲まれるのは絶対にお断りだ。そんなことになっては、満足に寄り道もできやしないに違いないのだから。

「んー、じゃあ三日目標ということで。あっちをちゃっちゃと片づけて来ちゃいましょう。ということで、被害にあった娘さんたちと親御さんたち、申し訳ありませんが三日ほど眠っちゃっててください」

見えない相手にそう告げて、サティンはぺこりと頭を下げた。

そして、護り手である青年の手を取る。

「じゃあ、鎖縛お願い。ここから一番近い『お断り物件』って、アンカーナっていう谷間の村なのよね。見境なしに襲ってくるって話だから、多分頭の回るタイプじゃないと思うんだけど……うーん、矢が刺さらないような筋骨隆々とした妖鬼でないことを祈っとこう」

「……お前はこの時ばかりは素直だな。そのたびにおれは、自分が瞬間移動の道具か何かに間違われてるんじゃないかと思うよ」

ぼそりと零された呟きには、皮肉と言うよりは拗ねた響きが色濃く宿っているようで……初めて耳にするその響きに、サティンは内心驚嘆した。

以前の世を拗ね、斜に構えていた態度とはどこかが違う――だが、明らかに甘さを伴う不満を訴える声と口調。

あら？　あらあらあら？

これはどういうことなのだろうか？　この厭味や皮肉しか知らないとしか思えない青年が――拗ねている？　子供じみた不満を屈折した性格なりに伝えようとしている？

鎖縛なのに？

大事で大好きだったずっと一緒にいた護り手の架因を手にかけたこの青年が？

その後ラエスリールに封魔具に封じられ、柘榴の妖主である闇主に無理矢理たたき起こされ自分の護り手の立場を押しつけられていやいや受け入れたはずのこの男が……？

わたしの言動に――拗ねるぐらいの不満を覚えた？

もしかしたらそれは無意識のものかもしれないが、それでもサティンにとっては掛け替えのない前進に感じられた。

素直でない肉食獣とつきあうのは……不本意ながら得意とするところだ。

経験値だけはたっぷりと積んでいる。

だから、ここはあえて知らん顔。相手が傷だらけの子猫の場合と傷だらけなのは同じでも勝手に成長して性格だけに捻りが入った豹とでは扱いが違うのは当たり前のことだ。

前者には惜しみない愛情と言葉を。

後者には相手同様捻りを入れた親愛と言葉を。

「そんなわけ、ないじゃない。鎖縛はそれだけじゃなく便利な裏技をあれこれいっぱい持ってる貴重な人材なんだから」

にっこり笑ってそう告げると、鎖縛はますます顔を顰めた。

「おれは便利屋か」

明らかに気を悪くした響きの宿る声に、サティンはこれ以上は誤解の種になりかねないと判断した。

つつくと楽しい相手だが、本気で傷つけるつもりはないのだ。

だから――。

「馬鹿ね」

呆れたように洩らした後、素直な本音を口にした。

「背中を任せられるって言ってるのよ」

2

畢羅にとって己が嗜好は耐え難いまでの羞恥をもたらすものだった。

目前の少女がなにを見、どう考えているかは知らないが、畢羅は別に人間の放つ感情や気を糧としているわけではない。

あくまでそれは人間で言うところの嗜好品に過ぎない。

彼は人間の絶望や虚無の放つ気がたまらなく好きなのだ。味わうたびに恍惚と酔うほどに、さらに多くを求めてしまう。

それだけであれば、畢羅も別段気にはしなかった。

似たような嗜好の主は魔性にあっては珍しくはない。より多くの人間の恐怖を味わうために国を内乱状態に陥れた魔性すらおり、それは周囲から看過されていた。

問題なのは、それを求める頻度と欲求の強さだ。

常用性のある薬物でもあるまいに、気づいたときには畢羅はそれなしではいられなくなって

いた。

ひたすらに、人間の絶望を、虚無を味わいたくて仕方ない。嗜好などというレベルではない——これはすでに、依存だ。

そうと悟った瞬間の恐怖は筆舌に尽くしがたい。

魔性の力とはそもそもが精神的な強さによるところが大きい。強大な魔性はその心もまた強いのだ——たとえ弱い面を持っていたとしても、それすらも力に変えることができる。

しかし、畢羅の依存は到底強さには結びつかない。

欲しくてたまらない心を抑えきれない——人間の絶望をどれほど味わっても満足できないという点では、糧でない分よりタチが悪い。

常に複数の人間たちの意識に根を張り、その感情を啜らずにはいられない。

他の魔性には到底知られたくない事実だ。

それを——。

浮城から派遣されてきたたかが人間の小娘に看破された——正確なところまではわからないが、それでも見逃せるものではない。

こんなことが知れようものなら、畢羅は同じ妖貴はおろか、格下の妖鬼にすら嘲笑われることになる。

自らの断ち切れない執着にずっと苦しんできた挙句、そんなことになっては最早身の置き所がない。

断じて目の前の小娘を生かして帰すわけにはいかない。

迅速に抹殺すべき標的だと畢羅は胸に刻んだ——これ以上下手なことを口走られる前に、どうあってもその命を摘み取らねばならない、と。

ちらり、と畢羅は黒髪の女性に目を向けた。

小娘の言葉からなにかを読み取っただろうか？

しかし深紅の右目を持つ美しい女性の表情にこれといった変化は見受けられない。真実を読み解いたなら、隠しきれぬ嫌悪を覚えてもおかしくはない内容だ——これは気づいていないのか。ならば封じる口はひとつですむが……。

何にせよ、目の前の娘だけは一刻も早く殺さなければならない。

畢羅は気を研ぎ澄ませ、殺意を以て銀髪の少女に襲いかかった！

※

『次元の低い戦いだ……』

内側から聞こえて来た不機嫌な声に、黒髪に深紅と緑の色違いの瞳を持つ女性――緋陵姫は小さく口元を綻ばせた。

声ならぬ声で答える。

『そう言うな。あの娘たちなりに考えて戦っているのだから……ある意味、猪突猛進しがちなあれよりはましな戦い方と言えなくもないぞ』

あれ――そう、自分たちがよく知る破妖剣士より格段に見ていて苦しくならない戦い方だ。少なくとも見ているだけで心臓が凍りつきそうになる痛々しさや失う恐怖を味わわされることはないのだから……もっとも、たとえ同じような戦いを繰り広げたとしても、自分たちの心は痛みはしないのだが。

『それにしても、醜悪だ。雛の君はまさかあの程度のモノを試金石に用いようと……？　だとしたら気の長い話だ。あんな欲に囚われている輩などいくら倒したところで、実りがあるとは思えない……』

身の内の青年――乱華の声には抑えきれぬ侮蔑の念が宿っている。

確かに、たかだか嗜好品に依存状態になるなど、纏う漆黒を貶めるような脆弱な精神力だ。それを姑息に隠そうとする姿は醜悪ですらある。

そんな存在を倒したところでなんになるというのか――乱華の言い分は理に適ってはいる

が、しかしいささか厳しすぎると緋陵姫は思った。

『……お前は、あれの戦いしか見てはおらぬからな、点が辛くなるのだよ。ご覧、あの娘はあれよりは上手に戦っている。懐いている子供を信頼し、その力を借りることに躊躇いもしない。少なくとも自分ひとりで戦おうとはせず、他者の力を借りることをよしとする点で、人間としては正しい戦い方を選んでいると言えると思うが？』

『……たかがあの程度の敵に……』

そこまでしなければ対等にも戦えぬことこそを、乱華は憤っているのだろう。

それはわかる。

しかし共感できるかといえば否だ。

『だから、お前は目が肥えすぎているのだと言っている。誰もあれのような戦い方は真似できない。護り手が全く協力的でないことを除いても、あれは特別……いや、唯一だ。そっくり同じ真似ができる人間などいるはずがない』

それでも——と、不満そうに唸る乱華に、緋陵姫は視線で戦いを繰り広げる銀髪の少女を指し示した。

『見てみるがいい。上手に護り手の子供と連携している』

アーゼンターラを背後で援護している黒髪の少女が、何か叫びながら捕縛師しか使えないは

ずの封魔具――螺旋杖をかざしている。
溝に刻まれた螺旋が光を放ち、それが空間に広がっていく。
光の螺旋が妖貴――畢羅の四肢に絡みつき、その動きを封じようとする。
その光は――黄金。
『捕縛師本人であるかのように封魔具を使いこなせるほどに深く同調している……互いの信頼関係がなくば無理なことだ。少なくともあれとあの男の間では考えられないことだな』
『当たり前です。あんな男を信じられるはずがない』
吐き捨てるように乱華が答える。
それは彼自身の感想と期待に過ぎないものだけれど――彼の心中を知る緋陵姫は、敢えて否定はしなかった。
『あの娘は、あれのようには戦えない。代わりに自分にできる戦い方を模索し、確かに見つけかけている。少しは認めてやってやれ……あの娘が頑張ってくれる限り、雛の君の視線が我らの宝に向けられることがないことだけは事実なのだから』
それは、紅蓮姫の新たな使い手――アーゼンターラにとっては決して幸福なことではないのだが。
それでも歯車は回り始めた。

最早行き着く先まで行くしかない。

そのために――。

『さて、前言を撤回し、少しは力を貸してやるべきかな？』

螺旋杖から放たれた金の光が畢羅を拘束したのと同じように、彼から放たれた力もまたアーゼンターラの右手の自由を奪っていた。

護り手である妖貴の少女は青年の動きを抑えるのに必死で、それ以上のことはできそうにない。

このままでは持久戦になる――が、そうなれば勝負は明らかだ。

魔性と人間とで根比べなど成立しない。

しかし、緋陵姫の呟きに乱華は反対した。

『いけません。姉上は確かにこれ以上手出ししないと口になされた。前言を翻すのは現在の状況では控えるべきです』

気遣うように制止する弟の言葉に、緋陵姫は小さく息を呑んだ。

『……なにを、知っている？　お前には今のわたしはどう見えているのだ？』

どくり、とひとつしかない心臓が脈打つ。

恐れと不安が胸を覆う――同じ肉体に宿る相手に対して、この反応は失態としか言えない。

しかし、乱華は淋しそうに笑う気配を伝えてきた。

『なにも知りませんし、見えもしません。姉上が、それを望んでいらっしゃる限り、わたしには知ろうとすることさえかないません。ですが、姉上の気配がひどく不安定なのは感じられます。言霊の返しを受ける危険を冒すのは得策ではありません』

言を弄するのは人間も魔性も同じだ。

人間は大した力を言の葉に宿すことができぬからこそ、容易く言を翻す真似ができる。対して力ある魔性は翻した言の返しなどものともしない自身があるからこそ、それを可能とする。

だが、今の緋陵姫にそれは危険だと乱華は言う。

知らない、見えないと言いながら、彼はどれぐらいの真実を感じ取っているのか――こんなことになるのなら、雛の君からの提案に乗るのではなかったか。

そうは思ったが、選択はすでに為された。時を戻すことはできない――ただひとり、時を自在に支配する柘榴の妖主を除いては。

ふう、と緋陵姫は小さく息をつく。

さて、何と答えるべきか――その後に続くだろう、自らのこの状態に関する乱華の質問攻めまで考えると頭が痛くなった。

だが、幸いなことに目前の事態が突然変化した。

『ターラぁっ！』

幼い妖貴の悲鳴が空間を満たす。

畢羅が光の束縛から左腕を捨てるという選択肢を取ったのだ！

引きちぎられた左腕は、しかし緋陵姫による完全なる力量の消失とは違い、すぐさま再生され新たな自由に動く彼の左腕が現れる！

その左手――四肢のほとんどを束縛されてもなお、アーゼンターラの心臓を貫くに足る長さを誇る長い長い爪が、指先には出現している。

「終わりだ、浮城の半端者！」

畢羅の勝ち誇った叫びと同時に、その長すぎる爪が銀髪の少女の心臓を貫く――。

まさに、その刹那。

莫大な黄金の光が、その空間を満たしたのである――！

※

悔しい！

歯噛みしたいほどに悔しい。

なぜ、届かない！

力は暴いた。蜜里との同調もかつてないほどに高まっている。

蜜里が何をしようとしているのか、自分には息をするのと同じぐらい簡単にわかるし、それは蜜里にしても同じことだ。

蜜里が自分の螺旋杖を用いて力を放つ。

彼女の力が螺旋杖に刻まれた螺旋に重なり、力を帯びて、かの魔性の四肢を捕らえる！

「紅蓮姫！」

今だ――今しかない。

叫ぶと同時に紅蓮姫に教えられた心臓に突き立てた！

右足の甲だ。

紅蓮姫の歓喜に満ちた声が聞こえたような気がした。

極上！　美味しい！

その声に宿る歓喜は、うっすらと記憶に残る「ラキス！」という第一声はともかく、それ以後の呼びかけに宿るそれと同等か……あるいはそれ以上に感じられた。

恋人との再会の喜びと、食欲を満たした歓喜の念――それらがほとんど同じ強さというのはどうだろう……？

いや、彼女を置き去りにして早死んでしまった前世の自分にそのことを責める権利はないことはわかっているのだが……何となく引っかかってしまう。

おまけに、だ――。

「だーっっ！　この暴走破妖刀っ！　妖貴の心臓一つ分の命啜ったらっっ！　一応ここは満足して落ち着く場面でしょうがっ！　なに、さらにつっ走ってんのよっ!?」

そうなのだ。

一度はアーゼンターラに従うかに見えた紅蓮姫は、妖貴の青年のひとつ目の心臓を貫いた直後、暴走と言ってもおかしくない勢いで暴れ出したのだ！

「紅蓮姫！」

叱りつけても怒鳴りつけても、紅蓮姫は止まらない。

ようやくありつけたご馳走に、我を忘れてしまっているのだ。

そりゃあねっ！　妖貴はあたしは初めてよ！　でもでもっ！　最上級の妖鬼ならこの一年で何人もご馳走してあげたはずでしょう!?　なのに、なに、なんなの、この暴走ぶり！

そんなにも妖鬼と妖貴の命の味は違うのか――？

疑問が脳裏を過ぎったのは一瞬のこと。

それどころではないのだ！

「紅蓮姫！　だからあたしの言うことを聞きなさいと！」
言ってるでしょう？
叫んでも、真紅の破妖刀は止まらない。
冗談ではない！　ここで主導権を渡しては元も子もない！
「言うこと聞けって、言ってるでしょうっ！」
全身の力をこめて、一度紅蓮姫を地に突き立てる！
「何だ、やはりまだ使いこなせてはいないのか」
黒髪の妖貴が、挑発するように囁いてきた――囁く？
はっとして飛び退こうとしたが、遅かった。
四肢を蜜里の放った光の糸に束縛された妖貴の青年は、自由になる首を動かして――アーゼンターラの右肩に噛みついてきたのだ！
凄まじい力――これまで味わったことのない鋭い痛みが右肩を襲う。
骨ごと砕かれる！
冗談ではない！　そんなことになったら、紅蓮姫を満足に握ることもできない。両手を用いてもこのとんでもない暴走ぶりを抑えることなどできない！
「冗談じゃないわ！」

叫びながら、渾身の力で妖貴の横っ面を肘で殴りつけた！
ぐ、とくぐもった声を洩らして青年の顎が肩から外れるのと同時に紅蓮姫の柄を握って後ろに飛び退った。
本当に、本当に冗談ではない。
「あたしは、こんなところで終わるわけにはいかないのよ！」
叫びながら紅蓮姫の刀身をべしん、と叩いた。
「勿論よ！」
蜜里が応じる。
だが、その声は苦しそうだ。
長くは持たない。
それは直感であり、同時に確信でもあった。
早く。
もう、一刻でも早く——片をつけなければ、蜜里が持たない。
それは同調している自分にしても同じ事だ。
「ケリ、つけなきゃね」
自分に言い聞かすように呟いたその瞬間——。

アーゼンターラは気を抜いたつもりはなかった。妖貴の青年から意識を逸らしたつもりもなかった。

しかし――。

「同感だ」

にやり、と青年の形の良い唇が笑みを刻んだ。

まずい――思った時にはすでに遅かった。

アーゼンターラの右手――紅蓮姫を握る腕が不可視の力に搦め捕られたのだ！

感じる――真白の菌糸に似た網状のモノ。

ソレが、彼女の右腕を包みこんでいた。

「お前らの力、根こそぎもらうとしようか――」

にたり、と青年が笑った。

右腕から力という力が奪い取られる。

「冗談じゃ……」

ない、という言葉は強すぎる脱力感ゆえに声に出すことはできなかった。

だが、アーゼンターラはそれに屈しない。

ここで膝を折るわけにはいかないのだ――逃げて、逃げて。

ただ話に聞く紅蓮姫の力に焦がれて。
手の内に転がり込んできたその力を、自身では使いこなせないと早々に見切りをつけて、過去の自分の記憶に委ねて。
それすら通用しないとなれば、自分ではやはり無理だったのだと、先の紅蓮姫の使い手であるラエスリールには……あの生まれながらの破妖剣士の中の破妖剣士には敵うはずがなかったのだといいように言い訳して。
自ら、血を吐く覚悟で何かをしたわけでもないくせに、勝手にそう完結して――。
ここで、この程度のことで降参するようでは、そんな卑怯だった自分と何一つ変わってはいないではないか。
だから、膝は折らない。
それだけは、しない。
ぎり、と唇を噛みしめて、アーゼンターラは妖貴を睨みつけた。
妖貴もまた、蜜里の放った光の糸に四肢の自由を奪われてほとんど身動きができずにいる。
しかし、明らかに分が悪い。
蜜里はいっぱいいっぱいだし、相手は自分から力を奪い取っている。
どう考えても、持久戦は自滅行為だ。

しかし、では、どうしたらいいのか。それだけがわからない。
挑発するか――しかし、明らかに相手が有利なこの状況で、どんな言葉を口にすれば我を忘れさせることができるというのか。
それでも、それしか途はないのだ。
どうすれば、どうすれば、どうすれば――？
そこに――。
いたのがアーゼンターラと蜜里と青年だけであったなら、あるいは時間の経過とともに勝利は青年の手に転がり落ちていたのかも知れない。
青年の菌糸にも似た力の網に捕らわれて、アーゼンターラが力尽きることで早々に決着はついていたかもしれない。
だが、幸か不幸か、その場にいたのは三人だけではなかった。
右目に深紅を、左目に極上の緑柱石を持つ女性が、傍観者として存在していた。
一瞬――ほんの一瞬だけ。
妖貴の青年の目が、彼女に向けられたのをアーゼンターラは見た。
そうして、彼は――本当なら必要のない動きを見せてくれたのだ！
蜜里の放った光の糸に捕らわれた左腕を引きちぎり、そうして新たに再生させた上で、長い

長い鋭い爪で、彼女の心臓を狙い、突き刺そうとした。
避けられない！
「ターラ！」
蜜里の悲鳴が響く。
死ねない――死なない――死ぬわけにはいかない、こんな所で！
強く、強く、アーゼンターラはそう思った。
思った刹那――。
奇跡が起こった。
一瞬にして空間を覆った金色の光が、青年の動きを止めるのと同時に、アーゼンターラの右腕の束縛を解いたのだ！
そればかりか、抜き取られた力以上の力がアーゼンターラに流れ込んでくる。
それは優しく力強い光――蜜里のそれと似ていて違う、より強く優しい……力。
「うわあぁぁっっ！」
耐え難い何かに出会ったかのように、妖貴がぎょっとしたように身を引くのが見えた。
今だ。
今しかない。

アーゼンターラは自由になった右手を意識した。
紅蓮姫の柄を握る右手――奪われたはずの力が戻っている。それでも最前の策として左手を添える。
両手で、しっかりと真紅の破妖刀の柄を握りしめ。
足を、踏み出す。
「うわあぁぁっっ！」
紅蓮姫が狙いを誤ることはない。
最初に鳩尾（みぞおち）――次いで左大腿部（だいたいぶ）。
最後に右目。
流れるように、獲物の心臓を突き刺しながらその命を啜り取っていく。
全てが終わった瞬間、アーゼンターラは呆然（ぼうぜん）とその場に立ち尽くした。
成し遂げたのだという達成感は、なぜか感じられなかった――。

3

妖貴の体が砂のように崩れていくのを見つめながら、アーゼンターラは呆然とその場に座り込んだ。

やった、の……？

自分は果たして本当に妖貴を倒すことができたのだろうか？　それともこれは魔性ならではの罠で、気を抜いた瞬間に攻撃されることになるのか。

わからない。

だが、たとえそうだとしても、もう指一本動かせない。これで駄目なら、もう本当に打つ手がない。

「ターラ！」

自分を呼ぶ蜜里の声が、どこか遠くに感じられる。

目の前にいると、視覚は確かに捉えているのに現実感が乏しい。まるで夢を見ているかのよ

うだ――それともこれは夢なのか。

「ターラ！」

蜜里が再度自分を呼ぶ。

ぼんやりとその顔を見つめていたアーゼンターラの視界で何かが動いた。

だが、精も根も尽き果てた状態の彼女は、のろのろとそちらに顔を向けるのがやっとだった。

かつり、と響く靴音もどこか遠い。

靴音が、近づいてくる。

視界にその足下が入った時、アーゼンターラはようやくこの場にもうひとり魔性が居合わせていたことを思い出した。

ラエスリールに似すぎた美しい女性――黒髪に深紅と緑の色違いの瞳を持つ女性のことをすっかり忘れていた。それはアーゼンターラが戦いに集中していただけのせいではない。妖貴の青年との戦いの間、彼女は綺麗に気配を殺していたのだ。

傍観者に徹するためか、あるいは自分たちの気を逸らさぬためか――後者はあまりに自分に都合の良すぎる考えかもしれない。

「あ……」

そのひとの顔が視界に入って来る。
刹那、彼女との約束が脳裏に甦った。
無様だと、情けないとさんざん非難され貶されて——しかし痛過ぎる言葉ばかり口にした彼女は、アーゼンターラが立ち上がった時に柔らかな笑みを浮かべ、ひとつの約束を与えてくれた。
『お前があの低俗な魔性を見事倒してみせたなら、その時わたしは我が名を明かし、お前の弟からの伝言を伝えるとここに誓おう』
見事——かどうかは疑問だが、自分はあの妖貴を倒した。
ならば彼女は魔性にとっては誇りである自らの名を明かしてくれるのだろうか。そして、弟リメラトーンからの伝言の内容を教えてくれるだろうか……。
尋ねようにも声をあげるのも億劫で、アーゼンターラは床に座り込んだまま、その女性を見上げることしかできなかった。
「ターラ……」
蜜里が気遣うように声をかけてきながら、さりげなく女性と自分との間に体を割り込ませようとする。
強大な力を誇る妖貴とはいえ、蜜里はまだ生まれて数年しか経っていない子供だ。

そんな子供に、ここまで気遣わせて――いったい自分は何をしているのか。
そう思った瞬間、アーゼンターラは蜜里の肩に手をおいた。
「いいから」
「でも、ターラ」
「大丈夫、このひとは……トーンからの伝言を持って来てくれただけだから」
そうでしょう――？
眼差しだけで問いかけると、黒髪の女性の気配がふわりと和らいだ。
「緋陵姫だ」
告げられた――それは恐らく彼女の名前。
「呼んでいい」
口にする許しを与えられたのだと気づいた時、アーゼンターラは驚きに目を瞠った。
「え……」
魔性にとって、名とは特別なものだと聞いた。
誇り高い魔性にとって、力なき者に名を呼ばれるのはなにより矜持を傷つけられる行為なのだと……決して許せぬことなのだと、教えてくれたのはスラヴィエーラの護り手だった。
だから、見るからに強い魔性である彼女が、たとえ名を明かしてくれたとしても、それを口

にする許可をくれるなどとはアーゼンターラは想像もしていなかった。
呆然とするなというほうが無理だ。
しかし、そんな彼女の心中を知ってか知らずか、緋陵姫と名乗った女性は淡々とした口調で告げた。
「……生きろ、だそうだ」
何を言われたのか、すぐには理解できなかった。
きょとんとした顔になったアーゼンターラに、緋陵姫は変わらぬ口調で言を継いだ。
「……村の皆と自分に償いきるまで死ぬことは許さない。何があっても生きて償え――これがお前の弟からの伝言だ。殺しても足りないが、勝手に死なれるのはそれ以上に許せない様子だったぞ」
伝えられた内容は決して優しくはなかったが、緋陵姫の瞳に浮かぶ光はやさしく、不思議とアーゼンターラの胸に響いた。
トーン、と弟の愛称を思わず呟く。
生きろ、と――それが何より第一に彼が伝えたかったことなのだと、理由も何もなく信じられる。
償い云々はきっと言い訳だ。

許さないというのは本音。殺すぐらいでは足りないというのもきっと本当だろう。
けれど、彼が何よりも自分に求めていることは――。
「トーン……」
もう一度呟いた途端、ほろりと涙がこぼれた。
嬉しいのとは違う。悲しいわけでもない。ましてや緊張が解けたせいなどでは決してない。
ではなぜなのかと問われれば答えらしきものは見つからない。それでも。
ほろりほろりと零れる涙とともに、胸の中から何かが溢れた。

※

世界のすみずみまでも、邪羅は意識を張り巡らせ続けていた。
あの日――ラエスリールの肉体が脱け殻となってしまった時から。
普通に考えれば、心臓の鼓動が止んだ肉体だけが残されていれば、それは当事者の死を意味する。それ以外のことは考えられない。
魔性にあってはもっと単純だ。
死者は肉体を残さない。

命を失った魔性は、その肉体を塵に変え、ひとかけらのよすがさえこの世に残しはしないのだ。

だから——半人半妖でありながら魔性として生まれてきたラエスリールの肉体が消えもせずにただ冷たく横たわっているのを目にした瞬間にも、彼は彼女の生存を確信した。

数年前にも似たようなことがあったが、その時とは状況が違う。

あの時は体に突き立った紅蓮姫がラエスリールの命を必死に繋ぎ止めていた。正確にいえば、魔性の命に関してはどこまでも貪欲なあの破妖刀が、彼女の命を食べるまいと懸命に堪えていたのだ。

だが、今回は違う。

命の波動が肉体から感じられない。

肉体が残っている以上、命が絶えたわけではない。しかしその行方がどうにも摑めないのだ——飛び去ったと思われる彼女の魂とともに。

まるで誰かに隠されてしまったかのようだ。

そう考えた時、真っ先に邪羅の脳裏に浮かんだのは深紅を纏う男の整いすぎた秀麗な顔だった。

ラエスリールに対する独占欲を隠そうともしていなかった魔性の王が、ついに彼女を自分の

手の中に取り込んだのか、と一瞬思った。
しかし、すぐに否定した。
奪われたのはラエスリールの意識と命。
柘榴の妖主なら、そんな中途半端なことはきっとしないと気づいたからだ。
兄ちゃんなら、体だけ残してくなんて真似、絶対しない……まあ、紅蓮姫は放り出していくかもしれないけど、奪うなら丸ごと全部に決まってる。
心だけでも——あるいは体だけでも……という考えはあの男にはない。欲した以上は全てを手にする。そのためならば、どんな努力も惜しまないに違いない。
だから、今回の元凶はあの男ではない。
たとえ姿が見えず、どれほど疑わしく思えても、絶対に違うと確信できた。
だが、では——誰が？
そして、ラエスリールの命と意識はどこへ行ったのか——。
邪羅はこの一年、必死にその行方を捜していたのだ。
だから、ちらりと感じたその気配に、何も考えることなく飛び出していた。
それが、アーゼンターラたちが向かったラヴィスのある方向だとすら気づかぬままに——よく知った気配と酷似したそれに向かって。

「姉ちゃんっっ！」

視界を過ぎる艶やかな黒髪――長ければもっと見事に違いないそれは、肩のあたりで綺麗に切り揃えられている。

反射的に叫んだ後で、その後ろ姿が実体を伴うものだと気づいたが、そんなことは今はどうでもよかった。

「姉ちゃん！」

追いついて、捕まえて――連れ帰らなくては。

その一心で空を移動する背中を追った。

相手に自分の声は届かないのか、移動する速度は落ちない。あるいは知らぬ顔を決めてまたしても姿をくらますつもりなのか――ラエスリールの律儀な性格からは考えられないが、嘘が苦手な彼女のことだ、偽りを口にするよりは無言で隠れようとするのはあり得ることだ。

逃がすかよ！

死んでいないことはわかっていた。生きていることも知っていた。

それでも気配ひとつ感じ取れぬまま、過ごした一年――心の平安はどこにもなかった。

こんな思いを味わわされて、黙って見逃してやれるはずがない。

「逃がすもんかよ！」



上品とは言い難い決意を口にし、邪羅は間近に迫った黒髪の主の肩に手をのばした。
「姉ちゃん！」
「触るな」
返ってきたのは、冷ややかな拒絶の声。
肩に触れた手はすげなく叩き払われた。
そうして、不機嫌な気配を全身から放ちながら振り返るそのひとの姿を目にして――ようやく邪羅は自分の勘違いを知った。
艶やかな黒髪、右の深紅に左の緑柱石。
それは――最早いるはずのないラエスリールの守護者だったのだ……。

※

「馬鹿な……」
あまりにも思いがけない事実に直面し、邪羅は正直混乱していた。
目の前にある現実が信じられない。
その名を知っている。その存在の意味を知っている。左目の色彩が以前とは違っているが、

彼女が何者であるのか間違うはずがない。
緋陵姫――ラエスリールの命のひとつを宿した、彼女の左目から生み出された守護者にして魂の姉妹。
乱華とともにラエスリールの安全だけを考え、数年前彼女が浮城にいられなくなるような騒ぎを起こした。自分たちの手元で彼女を護り慈しむために。
しかし彼女がここにいる意味がわからない。あり得ないのだ。なぜなら――。
「あんたは死んだはずだ……」
呆然と、邪羅は呟いた。
そう、ラエスリールの守護者緋陵姫は死んだ――翡翠の妖主との戦いの中で。紅蓮姫ではない破妖刀からラエスリールと乱華を護るために。
魔性に転生はない。
死んだら冥の海に落ち、永遠にそこをたゆたうだけだ。
だから、彼女がここにいるはずがない！
「あんたの魂は冥の海に落ちたはずだ！」
だのに、なぜ自分は理由を問うているのだろう――混乱したまま邪羅は考える。
あり得ない事態――ならば何かからくりがあるはずだ。最も考えやすいのは、緋陵姫を模し

た人形あたりか。酔狂な人形師――不本意なことに血が繋がっている――あたりなら、考えられないことはない。

しかし、違うと心のどこかが訴えるのだ。

人形などではない、と。これは紛れもなく死んだはずのラエスリールの守護者なのだと！

「ここにいるはずがないんだ！　なのに、どうして……」

冥の海に落ちた魂が復活を遂げるなど聞いたこともない。

だが、現実に緋陵姫はここにいる。ならば、それを可能にしたのは誰なのか――いや、そんなことは今はどうでもいいことだ。

問題なのは、緋陵姫の存在意義だ。

ラエスリールの守護者――魂の姉妹。彼女を唯一至上の存在として愛し護ることこそが緋陵姫の望みのはずだ。

まあ、唯一というにはあの馬鹿弟にでろでろに甘かったけどな。

ちらりとそう思ったが、脇道に逸れている場合ではないと気を引き締める。

考えろ――緋陵姫がここにいるということの意味。そして彼女が浮城の氷室で眠るラエスリールの肉体に手出ししてこなかったという事実。

それらの指し示す答えは――。

「……姉ちゃんは、どこだ？」
ぴくり、と緋陵姫の眉宇が震えた。
しかし緋陵姫から引き出せた反応はそれだけだった。感情を綺麗に押し隠したまま、ラエスリールに酷似した女性が邪羅を見据える。
「なんのことだ」
「しらばっくれるな！　あんたが生きてて姉ちゃんから離れるとは思えない。だけどあんたの気配をこの一年浮城のそばで感じたことはない。だったら……姉ちゃんの命と魂のそばにいたとしか考えられない。答えろよ！　姉ちゃんの命と魂、どこに隠したんだよ!?」
「こじつけだ」
「こじつけでもなんでも、こっちは確信してるんだ！　いいから答えろ！」
銀色がかった藤色の双眸に怒気を滲ませ、邪羅は緋陵姫に詰め寄った。
空中で、ふたりの魔性が睨み合う――火花が散るような緊張がその場を満たした。
しかし――。
第三者の出現によって、その空気は四散した。
「飛び出して行ったきり、なかなか戻って来ないと思ったら、ひよこ坊主相手になに道草食ってるんだ」

切り取られた空間から、するりと現れたのは深紅の闇の化身――。

この一年、どんなに捜しても気配ひとつ摑めなかった行方不明者其の二――が、悪びれた様子もなくしゃあしゃあと声をかけてくる。

意外すぎる人物の闖入とぬけぬけとした物言いに、邪羅の中で何かがぷつり、と音を立てて切れた。

「兄ちゃん！　この馬鹿男っ！　あんた一体こんなとこで何やってるんだよっっ！」

怒気に溢れた絶叫に、周りの空間が軋みを上げた――。

第十八章　前夜

一

「リーク！」

白砂原の外れ――浮城の結界を外れるなり、怒りを解きはなった同行者の気配に、宋流と空也は動揺せずにはいられなかった。

空が歪む――空間さえもがその怒気に安定を欠こうとしている。

「リーク！」

名を呼び、その感情の乱れをなだめようにも、ふたりにできることはない。

ただ、彼女に――そう、彼女、だ――感情を抑えてくれと、落ち着いてくれと懇願することしかできない。

王蜜の妖主の側近にして、長い年月を生きてきた妖貴ふたりが、たったひとりの女に振り回されているのだ。

誰かに知られれば嘲笑されること請け合いの事実だ。

魔性の中でも頂点に位置するものに仕えることを許された特別な存在であるはずのふたりだというのに、感情の嵐をむき出しに歩くたったひとりの女性を止めることもできずにいた。

しかも、相手は人間に過ぎぬというのに！

だが、同時に二人は納得もしていた。

人間に過ぎぬ身で、容易く自分たちふたりを従え、空間さえも自らの感情に同調させる人間を越えた能力――その持ち主でなければ、自分たちの主と対等に渡り合うことはできなかっただろうと……いや、人間としての異形の部類に入る彼女であればこそ、主の心を射止めたのであろうと。

しかし、現実に問題はある。

「リーク！　怒り心頭に発しているのはわかりますが、どうか気配を抑えてください！　あなたはこの周辺の磁場を破壊し尽くすつもりですか!?」

一個人――それもたかだか人間の感情が荒ぶっただけで、これほどに空間が軋み、悲鳴を上げるなどということは、長年王蜜の妖主に仕え続けてきた側近ふたりにしても初めて目にする光景だった。

それまでずんずんとふたりの声も聞こえぬ様子で歩き続けていた女性――黒髪に極上の緑柱石の双眸――しかもそれは魅了眼だ！――チェリクが足を止めたのは唐突だった。

「鍵をかけた相手に直にお願いするしかなさそうね……」

未だ怒りが鎮まらぬ様子ではあるが、その気配は少しは落ち着いていた。

明るい緑の双眸が、強い意志を映してきらきらと輝いているのを宋流と空也のふたりは言葉もなく見つめた。

決意と覚悟を決めた眼差し——そこに力が宿ったとき、この女性の意志は自分たち妖貴すらも従える。

ふたりの脳裏に彼女と初めて会った日のことが甦った。

それは一年ほど前のこと——主たる王蜜の妖主の真意を汲み取ろうと必死に考えていたころのことだ。

ふたりの前に、突然彼女は現れた。

但しその時、彼女は肉体を伴ってはいなかった。

透ける体は彼女が意識体であることを示しており、意志の力だけで実体化できない事実が、彼女が人間の魂もしくは幽体と呼ぶべきものだと明かしていた。

本来人間は死ねば転生の輪廻に戻ると言われているが、そうとは限らないことを彼らは知っていた。強い未練を残す魂はこの世に恋々とし、意識だけを世界に彷徨わせるのだ。

そうしたものは珍しくもない。

だから、それだけであったなら、ふたりは突然現れた女性の幽霊など気にもかけなかっただろう。いずれその意識は濁り、人間であったことさえも忘れてただの淀みになる——そんなモノにふたりとも興味はなかったのだから。

しかし、この女性は現れるなりとんでもない言葉を口にしたのだ。

『あなたたち、——の配下でしょう？』

……あろうことか、幽体である彼女は、ふたりにとって至上の主である存在の真名を平然と呼んだのだ！

輝かしき王蜜の妖主——その名を口にすることが許されるのは片手の指にも足らぬはず。同じく世界の要と定められた四人の妖主たちにしか、かの主がそれを許すはずがない。だというのに、たかが人間の女が……たとえすでに肉体をなくした存在であろうとも——否、より不安定な存在へと変化した者が、決して口にしてよいものではなかった。

『女ぁっ！』

先に激昂したのは空也だった。

その力を破壊のそれに変え、人間の幽体ごとき一瞬で灰燼に帰す攻撃を放った。

しかし、それはふわりと受け流された。

女が避けたわけではなかった。防ぎ耐えたわけでも。

空也の攻撃は女に触れる寸前に、結び目を解かれた編み物のように解かれ無力化したのである。

『何の手妻だ!?』

さらに激した空也が新たな攻撃を繰り出そうとしたのを止めたのは宋流だった。

『やめろ』

短く告げると、宋流は漆黒の眼差しを女の幽体に向けた。

そうして、彼が口にした言葉は——。

『……もしかして、奥方ですか？』

という、空也を驚愕の淵にたたき落とすに充分な威力に満ちたものだった。

『まあ。そんな風に呼んでもらったのは初めてだわ。奥方……奥方。なんだかこそばゆいけれど悪くない響きよね』

女の幽霊は、心なし嬉しそうだった。

そこでようやく空也も悟ったのだ——目前の女性が、三十年近く前に自らの主が伴侶にと望んだ唯一の存在であることを。

だが、同時に混乱した。

『馬鹿な……そんな。死んだと……我が君の意も読めぬ愚かな輩の差し向けた雑魚によって、

他愛もなく殺されたと……』

聞いたぞ――洩れた声は掠れていた。

彼の目から見て、現れた女性はその程度のことで命を落とすようなか弱い存在には思えなかったからだ。

くすり、と女が笑った。

『そう、殺されちゃったの。だからこの有様なのだけれど……まあ、今のこの状況を考えれば魅了眼をなくしたまま生き延びていたよりはましだったかもしれないわね。ふたりの子供を産んだ時点で、わたしの力はなくなってたから……』

だから娘を逃がすのが精一杯だった――。

続いた声には押し隠した悲嘆と無念が宿っていた。

それが理由か、と空也は思った。

人間の魂が黄泉路を辿れない――否、辿ることを拒む理由の多くは未練だという。この女性も残した子供の行く末が不安でそれゆえにこの世に残ったのか、と。

思ったわけだが、これは即座に本人によって否定された。

『心配だったのは、なにも子供たちに限ったことではないわ』

しかもとんでもなく不敬な言葉があとに続いた。

『果たしてというか、案の定というか……妙なしがらみに雁字搦めに捕らわれてくれて……あのひとも大概不器用よね』

空也――あとで聞いたところによると宋流もこの台詞には呆然としたらしい――が唖然としている前で、その心中も知らぬげに、彼女があっさりと最大級の爆弾を落としてくれたのはその直後のことだった。

『それで、ものは相談なのだけれど、あの人が作って隠してしまったわたしの肉体なのだけれど……あなたたち、ちょっと盗んできてはくれないかしら？』

あまりにも衝撃的な事態に直面すると、人間は記憶を失うこともあるという――よもやまさか魔性でも上位に位置する自分に同じことが起きるとは想像したこともなかった空也である。

その後彼女から何事かを説明されて、気がつけば宋流が頷いていて、あとはあれよあれよという間に話と事態は進んでしまったのだ。

人間が神を崇めるように――いや、心酔の度合いから考えればそれ以上かもしれない――身も心も捧げた王蜜の妖主の居城の厳重な警備の網をかいくぐり、死ぬような思いを味わいながら気づけば彼女の宿るべき肉体を持ち出していた。

それは、妖貴たる自分から見ても充分に鑑賞に堪える美を称えた容姿の肉体だった。漆黒の髪は艶やかで、ややきつい印象を放ちながらもその顔立ちは端麗の一語に尽きる。

だが、その真価は女性の意識が宿った瞬間に明らかになった。
美しい容姿など、意志を持って動き始めた彼女の前では意味を持たない。
極上の緑柱石の双眸に確固たる決意をたたえて身を起こした彼女を目にした瞬間、空也と宋流のふたりは同時に膝を折っていた。
いや、とうに彼女の幽体に出会った瞬間意識は屈していたのかもしれない。そうとはっきり自覚するのに時間がかかったというだけのことで……だが、肉体を取り戻した彼女――チェリクを前にすれば、主に等しく仕える喜びを感じずにはいられない。
恐らくその歓喜の幾ばくかは彼女が放ったであろう魅了眼の力に因るものであろうとはわかってはいるが。
わかっては、いても。
王蜜の妖主の真の望みに繋がることだと告げられては、空也も宋流も彼女に仕える喜びを退ける気にはなれなかった。
その彼女――チェリクは今、じっと浮城が浮かぶ方向を見つめたまま、何かを摑もうとしていた。
恐らく先に彼女が告げた『鍵を掛けた相手』に係わることなのだろう。
そうであれば、空也に口出しはできない。

彼には今現在の状況を読み解く力はないのだから。
恐らく、この世界中でほんの一握りの者にしか、それを目にすることは許されていない——その資格を与えられた女性を、だからひたすらに見つめ、護る。
それだけが、今の彼にできることだった。

※

時は少し遡る——。
虚空に浮かぶ真球の空間——。
第六の妖主が居城——未だ名を持たぬ城の一室で、集った三人の妖主のひとり、白焔の妖主白煉がぽつりとつぶやいた。
「しかし、解せんな」
と——。
室内にいるのは白煉の他にはふたりの妖主だ。
柘榴の妖主と紫紺の妖主——不在の妖主は王蜜と翡翠。
しかし翡翠の妖主は数年前に柘榴の妖主が加護を与えた破妖剣士によって消失した。だから

翡翠の不在は気にならない。

気になるのは――。

「聞けば、王蜜の君は真っ先に雛の君に膝を折られたという話……なのに、あの方がこの城を訪れた痕跡が一切見つからぬ。あの生真面目な方が、膝を折ったという事実だけを残して姿を現さぬというのは、なんとも腑に落ちぬ」

かり、と右手の爪を噛みながら、白煉がつぶやくのに対し、同席したふたりの対応は笑えるほどにばらばらだった。

「白煉、指を痛めるから、爪を噛むのは止したほうがいい」

やんわりと彼女の繊手を取り、懇願交じりに言い聞かせる紫紺の妖主の声はどこまでも甘い――もっとも、即座に振り払われてしまったが。

もうひとりの同席者の反応は意味深長だった。

「理由が……あるんだろうよ」

白煉の疑問に答えたのは柘榴の妖主――その口元には深く怪しげな笑みがたゆたっていた。

「理由……？」

眉宇をひそめて問いを重ねた白煉に、かつて千禍の名に相応しく世界に禍の種をまき散らしていた男はうっそりと笑った。

「そう……おれたちの前には姿を現せない理由が、な」

油断のならない笑みだ。

「なにかしらの異変を彼の君が抱え込まれた、と……？」

こんな時の男に尋ねたところで素直に答えが得られるわけがないことは重々承知していたが、それでも問わずにはおれぬ何かを白煉は感じた。

「さて」

はたして男は首を傾げてはぐらかした。

答える気がないのなら、最初から思わせぶりなことを口にするなと言いたいが、この男相手ではそれも空しい。

「あいつが本気で隠そうとしていることを、一体誰が暴けるというんだ？　おれたちと違って派手な騒ぎは起こさないやつだが、あいつはおれたちのなかで最初に生まれた——最古の者だ。持てる力は計り知れない……そして、やつは最古の者だからこそ、今回の件に関しては真っ先に雛の君のもとへ馳せ参じなければならない義務を負っていたはずだ。だのに、恭順の意こそ最初に示したものの、ちらりとも姿を現そうとしない」

のっぴきならない事情でも抱えてるとでも考えなきゃ、つじつまが合わないんだよ。

そうは言いながら、男の瞳に焦燥にも似た疑問は浮かんでいない。

すでにその答えを得ているのか、口でいうほどに興味を覚えてはいないのか——どちらとも判断がつかない。

この男はいつもそうだ。一見わかりやすそうな言動を取るくせに、時々真意がどうにも読み取れない。先日口にしたように、深い考えがないせいの時もあるし、決して明かさぬ決意を抱いているための時もある。

本気で何かを隠そうとしたとき、暴けないのはこの男も同じだ。王蜜の妖主に次ぐ長い時間を生き抜いてきた男の抱えこむ謎もまた計り知れない。

そんなことを考えていた白煉は、男が立ち上がったのに気づくのが遅れた。

「出かけるのか？」

珍しいな——紫紺の妖主藍絲（らんし）の問いに、男は答えの代わりになるのかどうかもわからぬ言葉を返してよこした。

「どこかのおっちょこちょいがなにやら虎（とら）の尾（お）を踏んづけかけてるようなんでな、大怪我（けが）する前に止めてくる」

何とも男らしくない親切な言葉に、白煉が呆（あき）れて息をついた。

「見物の間違いではないのか？」

「いや、白煉。この男がただ見て楽しんで満足するはずがない。間違いなく火に油を注ぐつも

りだろう」

藍絲のもっともな言い分に、それもそうかとふむ、と頷く。

しかしわからない。

「お前が遊ぶような駒が外にあったか？」

白煉の素朴な疑問に、男が苦笑まじりに肩を竦めた。

「駒は駒でも転ばぬ先の杖というやつでね。貴重な保険材料だ。壊されないうちに余所に放り出して来る」

本当に貴重と思っているのか――？

思わず疑問を抱いた白煉は間違ってはいないはずだ。

しかし男はそれ以上説明するつもりはないらしい。右手をひらひらと振って見せると、立ち止まらずに部屋を出て行った。

「まったく……」

とぼけた男だ。

軽く頭を振りながら、白煉は小さく息をついた。

他人の思惑がどうであれ、自分にも考えなければならないことがあるのだと思い出したのだ。幸い、まだ猶予はある。

しかしいつか、その時は訪れる。
その時自分はどうするのか――。
答えはまだ見つからない。

2

怒りで目が眩みそうだ。

深紅の髪、やはり深紅の双眸――ただし左目だけは明らかな義眼だ――黒衣を纏っていても、全身から深紅の輝きを放つ男の姿を見るのは実に一年ぶりだった。

ラエスリールが仮死状態で見つかったとき、すでにこの男の姿はガンディア王宮にはなかった。それ以前も虚空城の後始末のために出かけることが多かったので、そのときも不思議には思わなかった。

こんなときになぜ留守にしていたんだ、と苛立ちは覚えたが、どうせすぐに戻ってくると高をくくっていた。そうしたら存分に責め立ててやろうと考えていたのだ。

ところが、男――闇主はそれきり行方をくらませた。ラエスリールの肉体が浮城に引き取られるときもそれ以降も、彼の気配ひとつ感じられなかった。

ちくしょう、何考えてやがんだ！

何度こぶしを壁に叩きつけたか知れない。

男にとってラエスリールは唯一の存在であると思っていた。とびきり鈍い黒髪の破妖剣士がどの程度認識しているかは不明だが、彼が彼女を女として見ていることはわかっていた。いずれはその身も心もと、固く誓っていることも知っていた。

幸いラエスリールはまだ無事だが――鎖骨あたりに虫さされを見つけたときにはすわ手遅れかと血の気の引く思いがしたが――早晩男は望みを叶えるだろうと確信していた。

だからわからないのだ。

それほどに執着しておきながら、なぜ彼女から目を離したのか。そして、彼女が無事とは言い難い状態に陥ったのにもかかわらずなぜ何ら動きを見せようとしないのか。

疑問というより、それは純粋な苛立ちであり怒りだった。ラエスリールを姉のように慕う邪羅にとって、闇主の態度は不誠実にしか見えなかった。

その男が、よりにもよってラエスリールの守護者である緋陵姫を迎えに来たのだと言う。

イヤな予感が胸に広がる――。

「兄ちゃん……まさか、兄ちゃんも一枚噛んでるんじゃないだろうな。だから、姉ちゃんがあんなことになっても駆けつけて来なかったんじゃ……」

仮にも愛する――気恥ずかしいが、他に適当な表現が思いつかない――愛する女性に、あん

な仕打ちができるだろうか。

邪羅の常識的には否だが、目の前の男については断じかねる。面白そうだという理由ではさすがにしないだろうが、充分な理由があれば死なない程度のことならやってのけそうだ。

そう……これからの動きに、彼女の存在が邪魔になるという理由でもあれば。

湧き起こった疑念は馬鹿正直に藤色の双眸に浮かんだのだろう、闇主がふ、と鼻で笑った——明らかにこちらを馬鹿にしている。

「あんたな！」

「妄想に耽るのもいい加減にしておけよ。こいつの気配をあいつと間違ったってだけでも相当だと思うのに、そんな馬鹿げたことを言い出すようじゃ、若い身空で頭に羽が生えたと判断してやるぞ。まあ、もともとふわふわ軽そうな頭だが」

「余計なお世話だ！　じゃあ、なんだってあんたがそいつと一緒にいるんだよ!?　あんたもそいつも、姉ちゃんの居場所知ってるんじゃないのか!?　それでふたり結託して……姉ちゃんを隠してるんじゃないのかよ!?」

信じたくない——だが、疑念は消えない。

もしもそうなら、男が平然と姿を消したままでいられた立派な理由になる。なってしまう。

男はすぐには答えない。それが何よりの答えに思え、邪羅はぎり、と唇を噛みしめた。もし

もそうなら——許せない。

しかし、それは邪羅の早合点だった。

闇主はあからさまにおどけた仕種で肩を竦めてみせたのだ。

「お前、もしかしてずいぶんおれを買いかぶってくれてないか？　おれは誰かさんのように心が手に入らないならせめて……なんて理由で人形を愛でる趣味はないがな、だからと言って心はともにあるってだけで満足するような清らかな心根の持ち合わせはないぞ？　何のために来る日も来る日もあれの鈍感さに泣かされながらせっせと口説き続けたと思ってるんだ。手に入れるなら身も心もまるごとに決まってるだろうが。あんまりふざけたことを言ってくれるなよ」

堂々と胸を張り言いきられた内容は、しかし公言するのはどうかという代物だ。

しかし邪羅はそれどころではなかった。

男の台詞の一部に、頭が凍りついたのだ。

清らかな心根、清らかな心根、キヨラカナココロネ……目の前の男が口にするにはこの世で最も相応しくない言葉のひとつに違いない。

いや、否定してるんだから別におかしくはないか。だけど、でもっ！　兄ちゃんの口から聞くと、どうしてこんなに寒々しい気分になるんだ？

いや、単なる気のせいではない。体温が数度下がったような悪寒を確かに覚える。邪羅は思わず我が身を掻き抱いた。

「兄ちゃん……せめてもう少し言葉選べよ。厚顔無恥な内容はともかく、清らかなんて単語、兄ちゃんが言うと違和感ありすぎて鳥肌立つから……」

話は完全に脱線しているが、邪羅はそれでも言わずにはおれなかった。

それでも——まあ、ほっとしたのは確かだった。

疑惑が完全に解けたわけではない。だが、男が言った通り、身も心もまるごとを欲しいと言うのなら、ラエスリールのあの状態は闇主が引き起こしたものではない。なにやら企んでいるのは確かだろうが……。

と、そこまで考えて、邪羅は男が自分の質問にほとんど答えていないことに気づいた。

危ねえ、危ねえ。うっかり誤魔化されるとこだったぜ！

こんな機会はそうはない。是非ともここで事情を聞き出すべきだろう。

「って、だからそれは横に置いといてっ！　説明しろよ、兄ちゃん！　どうしてあんたが緋陵姫と一緒にいるんだよ、そいつらとつるんで、一体なにやってるんだよ……もしかして、第六の君とやらが関係してるのか？　だとしたら、うちの父ちゃんと母ちゃんも——」

矢継ぎ早の質問は、突然至近距離に現れた闇主の右手で堰き止められた。

「なんでもかんでもひとに聞くのは感心しないな。ちっとは自分で考えろ。まあ、せっかくだからひとつだけいいことを教えといてやろうか」

顔が触れあうような距離で、男がにやりと口元を歪めた。

なんともタチの悪い笑みだ。邪羅は反射的に身を引いた。

そんな彼に面白い玩具でも見るような目を向けて、男は告げた。

「目を凝らし、耳を澄まして注意しているんだな。近いうちに面白いことが起こるかもしれないぞ」

意味ありげにそう告げられ、困惑する間もなかった。

男の指が容赦ない力で邪羅の額を弾いたかと思うと、彼は強制的に空間を移動させられていた！

「兄ちゃん！」

叫んだ時はすでに遅し——わざわざ白砂原に跳ばしてくれたのは、果たして善意かそれとも皮肉か。

「兄ちゃんの馬鹿野郎！　結局何一つ答えなかったじゃないか！　馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿っ！　柘榴の妖主のけちんぼーっっ！」

邪羅に柘榴の妖主の配下による怒りの制裁が下されたかどうかは永遠の謎である。

※

背後にひやりとする気配を感じ取りながら、闇主は殊更ゆっくりと振り返った。
緋陵姫が、全身を怒りに染めて睨みつけていた。
否、その気配は緋陵姫のものではない。彼女の中にともにある乱華のそれだ。
「面白いこと――そうおっしゃいましたね」
紡がれる声は氷よりなお冷たい。
押し殺した怒りに、しかし声が震えないあたりは白坊主よりは上だな、と邪羅が聞けば激怒すること間違いなしな感想を抱いた。
「それが？」
なにが言いたいのかわかってはいるが、わざわざ汲み取ってやる義理はない。
この相手にはそれなりに思うところがあるのだ。実力に彼我の差があろうがそんなことは関係ない。気にくわない小僧に親切にしてやるほど、寛大な心の持ち合わせもないのだ。
「……何をなさるおつもりですか？」
返答次第ではただではおかない――そう言わんばかりの口調であり気配だったが、闇主が臆

するはずもない。

彼にとって恐怖とは、唯一無二と定めた存在を永遠に失うことだけだ。それ以外に恐ろしいことなどない。ちょっと面白かったり面白くなかったり面倒だったりするだけだ。

だが、勘違いさせたままで勝手に爆発されても困る。いや、自分が困るわけではないがあとで知られると面倒なことになる相手がいるのだ。ここは取りあえず誤解を解くべきだと彼は判断した。

「何もしないさ……おれは、な。言っておくが放りっぱなしの配下に何かをやらせるわけでもないぞ。この件に関しては、おれは介入する権利がないんでね」

それは正真正銘の本音だったが、相手が信用したかどうかは不明だ。

果たして、緋陵姫に宿る乱華が皮肉げな笑みを口元に刷いた。

「権利？　そんなものを気にする方とは知りませんでした。ひとの迷惑も何も顧みずやりたい放題なのが貴男の流儀だと思っておりました」

痛烈な皮肉の言葉が美しい唇から繰り出される。

しかし闇主がそれで何らかの痛痒を覚えるはずもない――図星を指されて怒りを覚えるのはそのことに後ろめたさや劣等感を抱いているからだ。やりたいことをやりたいようにやること

に何ら罪悪感を覚えない男にとって、非難や糾弾は意味を持たなかった。
飄々と答える。
「大人にはいろいろとあるのさ」
告げた瞬間、緋陵姫――乱華の眼差しがよりきつさを増した。
白々しいとでも言いたいのかもしれない。その生真面目さはここにはいない姉と共通したものだ。だが、本人でない以上微笑ましさなど覚えはしない。
「そんなことより、お前には言っておくことがある。城の外で表に出てくるのはよせ。力を放つなど論外だ」
言外に、先ほどラヴィスで力を振るったのはお前だろうと突きつけると、乱華はばつが悪そうに目を逸らした。
言いたいことはあるかもしれないが、聞いてやるつもりはなかった。
「……緋陵姫の負担を増したいのか」
ずばりと急所を突くと、乱華は目に見えて動揺を示した。
「貴男に指図される筋合いはありません！」
顔色を変えて反撃してくるさまは、まさに図星を指された者のそれだ。
「子供だな。自分を優先して他人の言葉に耳を貸さない」

素っ気なく言いきり、闇主は哀れむような目を向けた——但し、本当に向けるべき相手は別にいたのだが。

「その様子じゃ、なぜ金の野郎が姿を見せないかもわかってないんだろうな」

ぽつり、と洩らした言葉に、しかし乱華の反応は稀薄だった。

「……どういう意味です？」

本気でわかっていないらしい——それもこれも周囲が甘やかしたせいだ。

それが悪いとは一概には言えない。強大な力を誇る魔性ほど干渉を嫌い自らの意志を通すことに躊躇いを覚えない。絶対の自信を持たなければ、そんな風にはなれない。

魔性にあって、周囲を気遣う必要性を覚えるということは、強者ではない証に過ぎない。

だが——。

おれの目の届くところでお前に何かあったら後々いろいろと面倒なんだよ。

どこまでも自分本位な理由ながら、闇主は実にらしくない忠告を気にくわない小僧にしてやるつもりになっていた——それが傍目にどう映るかまでは考慮に入れていない。

「ま、見たくないものを無理矢理見ることもないか。それも個人の自由ってもんだ」

煽るように告げると、乱華はますます眦をつり上げた。

他でもないこの自分に説教めいたことを言われるのがどうにも我慢ならないらしい。それは

それで楽しいかもしれない、と闇主は性格の悪いことを考えた。

絶対的強者のひとりである彼は、時も場合も関係なく他人の嫌がることをするのが大好きだった。

「どういう意味です！」

乱華が詰め寄ってくるのを笑いながら、彼はようやく本題を口にした。

「一言で言えば、くれぐれも無茶はするなってことだよ」

珍しく虐める意図もなく告げた言葉は、しかし乱華には伝わらなかったらしい。

訝しげな顔でこちらを見つめてくる顔を見て、闇主は仕方ないと息をついた。

これでわからないのなら、懇切丁寧に説明してやるべきだろう——そう決断したときの彼の顔が実に意地悪く楽しげだったことは言うまでもない。

「他人の体に居候してるくせに無茶して相手に負担をかけるなってことだ。お前の姉貴ときたらふたりともお前に大甘だから許されて当たり前だと思っているかもしれないがな、世の中にはそれではすまないおっかない相手もいるんだよ。雛の君を怒らせたくなかったら自重するんだな。彼女はラスや緋陵姫と違って手厳しいぞ。お前を不要と見なしたが最後、戻る肉体の——」

「柘榴の君——」

不意に、目の前の人物の纏う気配が変わった。
厭味ではなくきちんと――一応の――敬意をこめて呼んでくるのは乱華ではあり得ない。
緋陵姫だ。
恐らく意識を無理矢理切り替えたのだ。
「言った矢先に……本当に大甘だな」
言ってやろうと思っていた台詞を断ち切られた格好になった闇主は不機嫌を隠しもしなかった。
緋陵姫が困ったように笑う。
「わかってはいますが、あまり乱華を追い詰めないで戴きたい。彼は貴男の口撃を受け流せるほど打たれ強くはないのですから」
「甘いな。甘すぎる」
「わたしにあれこれ文句をつけるぐらいなら、さっさとあれを説得してくだされればよろしかったのです。わたしはあれの影……あれの基本思考がわたしのそれを決めるのですから」
ラエスリールを変えられなかった貴男が悪い――。
実に胸に痛い言葉を吐いてくれた女に、闇主はふんと鼻を鳴らすことで答えた。
早い話が負け惜しみだ。

「なら、しっかり手綱を握るんだな。いくら安定したとは言っても冥の海から戻ったその肉体に生者の妖気は毒にしかならん。あいつのことを本当に大事に思うなら、あいつに力を使わせるな。特別に気に入っている玩具をあいつの考えなしのせいで失うことにでもなってみろ、巨鳥の雛は何をするかわからんぞ」

巨鳥の雛――それがなにを、誰を指すのか。

緋陵姫は正確に読み取ったようだった。

「……気に入りの玩具、ですか」

「ああ、多分とびきりの、な」

言ったところで伝わりはしないだろう――わかってはいても、そうとしか彼には言えなかった。

気に入るということは玩具を見つけることと同義だった。その喪失が耐え難い恐怖をもたらす存在であろうとも、玩具という言葉しか……当てはめる他の言葉を自分は知らない。

生まれて間もないあの女にしてもそれは同じだろう。だから言葉の表面上の意味しか理解していない他の言葉を用いることはできない。

もしかしたら――。

藍絲なら……白煉を騙してでも手に入れようとし、失敗してもなお思いを抱き続けている紫



紺の妖主なら、あるいは世界最古の存在としての務めに雁字搦めに縛られながら、それでも人間の女と束の間とは言え平和な家庭を築くという、創造主の命に逆らう選択をした王蜜の妖主なら、自分や巨鳥の雛が『気に入りの玩具』としか表現できないそれに、別の言葉を選べるのだろうか。

もしそうなら、いずれは自分たちもその言葉を見つけることができるのだろうか。

そんな感傷的な思いが闇主の胸を過ったが、すぐにその思惟は断ち切られた。

「お言葉、肝に銘じましょう」

真摯な声で、緋陵姫がそう答えたのだ――。

3

金色の柔らかな光に包まれて、ラエスリールは心地よい眠りのなかにいた。
時折見る夢はかつての自分を見るようで、胸を締めつけられる心地を味わわされて切なかったが、そこにいる少女は必死に惨く残酷な現実に抗っていて、だから少しでも力になりたいと思わずにはいられなかった。
あくまで夢の中での出来事だ。それで何ができたということもないのだが。
だが、夢は概ねに於いて安らかで心地よいものだった。
今日この時、初めて見たこの夢を除いては。
いつもは陽の光に満ちている大地は、今日は灰色に染まっていた。
見上げる空に太陽はない。
曇っているのか。最初は単純にそう思った。
だが、違った。

そうではなかった。

『見よ』

背後から聞き覚えのない声が聞こえ、視界の隅に伸ばされた指が見えた。

何かを考えるより先に、その指の指し示すほうに視線を向けて——そうして目にした光景にラエスリールは言葉を失った。

太陽の姿のない薄暗い空の端——切れ味の悪い刃物で切り裂いたかのような……引き攣れた亀裂が走っていた。

ラエスリールは言葉を失った。

あれはなんだ、太陽はどこに消えた!?

背後から、また声が聞こえた。

『あれを見よ』

今度指し示されたのは空ではなかった。

大地だ。

天に届くほどに高く聳える塔が見えた。

その数四つ。

すい、と背後から伸ばされた指先がひとつの方向を示した。

つられて目を向けたラエスリールは、そこに崩れた塔を見た。
無残に打ち砕かれた塔――空に走る亀裂はそのちょうど上に位置していた。
『わかるか』
背後からの声が問いかけてくる。
質問の意味すら摑めず、ラエスリールはただ頭を振った。
すると声はこう続けた。
『あれはお前があけたもの』
ラエスリールは愕然とした。
あの巨大な空に走る亀裂を生み出したのは――自分？
半ば恐慌状態に陥った彼女に声はさらにたたみかける。
『そして、あれはあそこから生じた』
背後から伸びた指がすい、と動いた。
それが示したモノは。
黒い小さな……蠢く生き物。
闇色の鳥だった――未だ幼くその身はか弱く儚い。
だが――。

『いずれあれは巨大に育つ。そうして広げる両翼は空の亀裂を広げ空そのものを引き裂くだろう』

男の声は淡々としていた。

だが、ラエスリールの耳にはそれは確実に訪れる未来を告げる予言に聞こえた。

声はなおも続いた。

『闇の両翼に空は引き裂かされるだろう。在るべき空を喪って天は落ちて来るだろう。その時お前は何を選ぶ？』

問われても、答えることはできなかった。

できるのは、問いかける相手に逆に問いかけることだけ――。

『あなたは誰だ!?　わたしに何を求めてる!?』

問い返しながら、ラエスリールは背後にいるはずの人物を求めて振り返った。

しかし、そこに人影はなかった。

四本の柱と崩れ落ちた一本の柱――そして空に走る不吉な亀裂。

禍々しいまでに滅びの気配を漂わせる世界の中、ラエスリールはただひとり立ち尽くしていた――。

※

イリヤンはガンダルース大陸の南東に位置する小さな国だ。
その東の外れ――山間の小さな村を後ろに、山道を徒歩で移動する青年の姿があった。
柔らかなブロンズの髪と柔和な笑顔が印象的な青年は、村から充分離れたところで、「さて」と声を上げた。
「衣於留、いらっしゃいますか？」
声もまた優しい。
しかし、声をかけた方向がおかしい。
彼は空を見上げ、何もない空間に向かって語りかけたのだ。誰かがこの場を見ていたら、不思議に思って首を傾げたに違いない。
だが、青年――セスランにとって、その行為は不思議でも奇妙なことでもなかった。なぜなら彼にはそこに呼びかける相手がいることをちゃんと知っていたからだ。
果たして――。
空中からくすくすと笑う女性の声が響き渡った。
「ちゃんと、いらっしゃいますとも」

茶目っ気たっぷりな答えと同時に、宙からひとりの女性が現れた。
こんな芸当ができるのだ、当然人間ではない。
漆黒の髪と瞳を持つ魔性――妖貴だ。
「お疲れさま、セスラン。どう、捕縛はうまくいったかしら？」
問いかけておきながら、彼女はすぐに言を翻した。
「ま、愚問というやつね」
そこにはセスランの捕縛術に対する絶大な信頼がある――というわけではない。
彼女の台詞は、彼の肩に担がれた荷物によるものだ。妖鬼捕縛のため、現場に赴くときにはなかったそれが、いつなぜ増えたのかを考えれば答えは自ずと出るというものだ。
「ああ、これですか。お礼はいらないといくら言っても聞いてもらえなくて……だから村に顔を出すのは気が進まなかったんですよねえ」
「そりゃあ、村中の子供が妖鬼に喰い殺されるのを座して待つしかないと思っていた村の住人としては、あなたは神さまみたいなものですもの。お礼ぐらいしなくては気が済まないでしょうよ。それが気に入らないのなら、いつものように封じるだけ封じて何も言わずに戻って来ればよかったのよ」
事実、セスランはこれまで浮城から断られた――いわゆる『お断り物件』に向かった際、ほ

とんどの場合妖鬼捕縛の完遂を村や町に報告することなく立ち去っている。上層部が断った仕事を現場の人間が勝手に片づけるなど、本来言語道断なのだから。

しかし、最近は事情が異なる。

浮城が手出しすべきでない――という判断で断られるのではなく、単に手が足りないから断っているというのが実情なのだ。なので、瞬間移動もお手の物という上級魔性の協力が得られる――ついでに依頼地の関係者の記憶改竄も頼んでいる――セスランとサティンのふたりは、一年ほど前から単独任務なのをいいことに、依頼地から近い『お断り物件』を片づけて回っているのだ。

当然のことながら、浮城には内緒である。ばれた場合、慣例に則った厳罰が待っている。

「まあ、それも考えないこともなかったんですがね。今回の場合、妖鬼が消えたことを知らせておかないと、村の子供たちはいつまで経っても外で遊ぶこともできないでしょう？　それは可哀相ですからね」

そして知らせた結果――大量のお礼を押しつけられるようにもらってしまったというわけだ。

「まあ、だからこの荷物に関しては、またあなたを頼ろうかと思っているんですがね。せっかくのいただきものですから、粗末に扱うわけにもいきませんし、わたしを本来の依頼地に戻す

ついでに浮城にいるリーヴシェランあたりに送ってもらおうか、と……」

そうやって証拠隠滅を図るのも初めてのことではない。

衣於留が楽しげに肩を揺らした。

「あなたの人が良いのは知っていたけれど、ここまでとは思わなかったわ。少なくともわたしを封じてくれた頃のあなたなら、お礼なんて笑顔で受け取っておきながら平気で川にでも捨てそうだったもの」

かつて自分に横恋慕する男によって夫と息子を殺された妖貴は、憎悪に身を任せるのにも疲れ果てた頃、セスランによって封じられた。

彼独自の捕縛術――彼の体内に封じるというものだ――では静かに眠ることができないからという理由で、セスランは殉死した仲間の封魔具を用いて彼女にしばしの安息を与えたのだ。

その時間が憎むべき仇敵によって破られ眠りからたたき起こされた衣於留は、仇を取れたことに一応の満足を覚えたのか、以来ずっとセスランのそばにいる。

彼女の殺された息子――人間の夫との間に生まれた子供はセスランと同じ半人半妖だった――を重ねているのは確かだろうが、時々辛辣な言葉で急所を突いて来るあたり、正確なところ彼女がセスランをどう思ってそばにいるのかは謎のままだ。

「……まあ、否定はしませんがね。人間は日々成長するものなんですよ、衣於留。わたしだっ

て半分は人間なのですから、少しぐらい変わったところで不思議はありませんでしょう？」

「周りの影響とはかくも大きいということかしらね。だとしても、あなたを直接変えたひとには興味があるわね。あの小さな姫君もなかなかとんでもない人脈を抱えているようだけど、あなたの性格に影響を与えるには絶対的に経験が足りないし、何より性格が真っ直ぐすぎるわ。そうなると、やはり鎖縛を護り手に持って平然としていられる強者のお嬢さんあたりかしら？」

女性らしい旺盛な好奇心の赴くままに追及してくる衣於留に、しかしセスランは答えない。

それは彼自身、自らの身に起こった変化の原因を把握できていなかったからかもしれない。

それでも——全ての変化のきっかけとなったのは、カラヴィスの公女でもサティンでもないことだけは把握していた。

きっかけにして核。

それは少女の姿を取った巨大な熱量だった。サティンもリーヴシェランも……そして自分もその存在に係わり合うなかで否応なく変化を受け入れさせられたのだ。

ラエスリール——。

数奇な運命の下に生まれ落ちた人間の魂を有する魔性——否、魔性の肉体を持って生まれたどこまでも人間らしい人間の娘。

今は氷室で眠る彼女のことを正確に衣於留に伝えることは到底できない。あの魂をあの生き様を実際に目にした者でなければ彼女の炎は想像さえできない。

そのことを残念に思いながら、セスランは衣於留との無駄話を切り上げようと口を開きかけ……そうして力なく肩を落とした。

衣於留は気にしていないようだが、自分は浮城から命を受けた捕縛師としての任務を完遂してすぐにこの地にやってきたのだ。そうして強大とはいえないが雑魚とも呼びかねる妖鬼を封じたばかりなのだ。

はっきり言って疲れている。

エリアントに戻ったら、少なくとも半日はぐっすり眠りたいと思うぐらいには疲労が溜まっているのだ。

なのに――。

これはどんな運命の悪戯だろう――あるいははっきりと悪意と呼ぶべきか。

「衣於留……」

呼びかける声は、自分でも情けないことに泣きそうなものだった。

「なぁに、坊や」

おどけた口調で応じる妖貴の声にも隠しきれない緊張が宿っていた。

「坊やはやめてください。わたし、今日は厄日なのでしょうか……？」
半ば本気で泣き言を口にしたセスランに、衣於留は全身を緊張に染めたまま――。
「そうかもしれないわね」
と、無情に答えた。
巨大な妖気の塊が、自分たちを目指して近づきつつあった……。

※

かつり、かつり――。
黒曜石を敷き詰めた床に、深紅の青年の靴音が響く。
その気になれば靴音など立てずに歩く術を持つくせに、柘榴の妖主は常に音をたてて城内を移動する。
しかし、その認識は間違っていたようだ、と芝牙尖は思った。
気づけば自分は回避した――事実、彼はこれまで深紅の魔王と鉢合わせることを避けており、それはこれまで成功していた。
何のつもりかは知らないが、これみよがしに響く靴音はかの妖主の存在感を城内の皆に刻み

つけてきた。靴音こそが彼の存在が近くにある唯一の証明だと——そう錯覚してしまうほどに。魔性の王が単なる意地やあてつけでそんな行動に走るはずがないというのに、かつて耳にしたかの妖主にまつわる酔狂すぎる噂と城内での言動が、そうと思い込ませたのだ。

これが柘榴の妖主にとっての気まぐれか、何か意図あっての行動であるのかさえ判断できぬ状況に追いやられ、芝牙尖は内心歯噛みした。

気まぐれかと思えば信じられないほどに周到で狡猾な一面を見せる深紅の魔王——靴音さえ消さぬ無精な態度に知らず慣らされていた。

最早彼の姿は視界の内だ——それは相手にとっても同じことで、つまり避けることは叶わないということだ。

これが相手の気まぐれであれば、目を引かず通り過ぎればことはすむ。

だが、そうはならないだろうと半ば以上芝牙尖は確信していた。

この至高の存在のひとりは、普段は無駄としか思えぬ行為に力を傾けるという意味不明な性癖を持つくせに、ここぞというときを決して逃しはしないのだ。

そのことを芝牙尖は知っている。

雛の君に冥の海から掬い上げられたこの身は、彼の海で大切な記憶の大部分を喪ったままの半端な存在に過ぎないが、時間の経過とともに自らに不可欠な情報は取り戻しつつあった。そ

れと同時に、雛の君だけに忠誠を誓うことができなくなったのは皮肉としか言いようがないのだが。

全身を縛る緊張を決して相手に気取られぬよう、気配を殺して芝牙尖は柘榴の妖主である青年とすれ違った。

目を伏せたぐらいでは不十分なことは承知の上だが、それでもしないよりはましだとの判断は——結局のところ水泡に帰した。

深紅の魔王は——それまで一度として雛の君の配下に声をかけたことのなかった彼は、やけに気軽な声を芝牙尖にかけてきたのだ。

「外の気配がする……珍しいな、お前がこの城の外に出るとは」

喉が引きつりそうになるのを必死に堪えて芝牙尖は何でもないことのように応じた。

「そうとも限りませんよ。数年前までは手足の足りぬ我が君のため、あれこれ奔走しておりましたから」

返ってきた答えは「ああ、確かにそうだったな」というもの。

焦る余り対応を見誤ったか——芝牙尖は背筋に冷たいものが伝うのを感じたが、しかし深紅の青年はそれ以上の追及はしてこなかった。

ここで安堵してはいけない。油断した隙を突くのが何より得意な相手なのだ。緊張を解くの

は禁物だ。

そう、自らに言い聞かせていたというのに——芝牙尖はすれ違う瞬間に投げかけられた男の声に縛りつけられた。

「——」

低い、耳をくすぐりもっと聞きたいと思わせる魅惑的な低い声で——。

紡がれた響きは——。

かつて何よりかけがえのない自らの核であったもの。

冥の海に落ちるより前——真実の意味で生きていた頃の自らの意味、意義、力……それら全てを凝縮したもの。

真名。

それを、男は口にしたのだ。

今となっては戻れない自分を。

それでいて決して振り切ることのできない過去の自分を、本質を。

男は、力在る者の傲慢さで暴いたのだ。

殺してやりたい——！

現在の主である『雛の君』の意に添わぬだろうことは承知の上で、強く強く芝牙尖は思った

……この深紅の魔王を塵も残さず滅ぼしてしまいたい、と――。

4

白と黒の市松模様が描かれた遊戯盤を前に、未だ雛であることを抜け出せぬ少女は頬杖をついていた。

その黒髪は豊かに波打ち、長い漆黒の睫の奥で煌めく瞳も底知れぬ闇色をたたえている。

翡翠の妖主消失と同時に生を受けた世界で六人目の妖主は、年若い少女にしか見えぬ外観をしていた。

それは彼女が未だ『雛』であるせいかもしれない。

同輩である妖主たちのなかで最も未成熟な容姿を持つ彼女は、先ほどから盤上にある駒の中、ただひとつだけを見つめていた。

ちっぽけな最弱の駒——しかし使いようによっては強大な切り札にもなり得るものだ。

遊戯盤の傍らには、すでに排除された五要のひとつが置かれている。

盤上の隅に動きを封じられた駒。

残る五要の駒は四つ――ばらばらの位置にあるこれらをいかに活用するかは彼女の手腕に委ねられている。

五要はすでに欠けている。今さらもう一つ欠けたところで自分にとっての支障はない。

問題は、目をかけ育てている最中の弱々しい駒だ。

少しはましになったようだが、望む結果を期待するにはまだまだ不安が残る。

だが、これ以上待つのは自分が堪えられない。生を受けてから、随分と長いこと制約だらけの日々を過ごしてきた。

自由に動ける時が来たら、これをしようあれもしようと想像で心を慰める日々にはとうに飽きている。

弾き出されたモノも含め、五要の力はすでに手中だ。

自分は最早動けず微睡むしかない状態にはない。

だが――。

「お前――」

こつんと軽く駒を小突きながら、雛たる少女は切なげに呟いた。

「早く育ってくれないと……」

その先が唇に上るより先に、かつん、と硬質な音が彼女の耳に届いた。

闇色の瞳がふわりと和む。

彼女がこの部屋に立ち入ることを許した相手はひとりきりで、感じる気配は正にそのひとのものだったからだ。

靴音のしたほうに目をやり、少女は心底嬉しそうに笑った。

「いま、戻ったの？」

問いかける声は甘い——慕う相手と隠しもしない少女の声に、入ってきた人物のほうが困ったように微笑んだ。

「はい。無断で城を出ましたこと、雛の君には……」

詫びの言葉を口にしようとする相手を制して、少女は告げる。

「構わないわ。逆に申し訳ないほどよ、要らぬ手間をかけさせてしまったようで」

少女は相手がこの城を出てどこに行っていたのか知っていた。

そしてその行為が何をもたらしたのかも。

「あなたが行ってくれたおかげで、ぎりぎりとはいえあの娘は生き延びることができたわ。感謝するのはわたしのほうよ。外界の気に触れて、不調を覚えるようなことはなかったかしら？」

気遣いも露な少女の声に、相手——緋陵姫は短く「いえ」と応えた。

「わたしはあの娘の弟の伝言を運んだだけですから」
淡々とした口調から、事の真偽は計れない。
望めば少女は緋陵姫の心を暴いてでも真実を摑み取ることができる。
だが。
少女自身が、それをしたくはないのだ。
生まれて初めて、ただ綺麗だからという理由で冥の海から掬い上げたのは緋陵姫だけだ。利用できる、有能だから——それらの理由で掬い上げた命はいくつもある。生まれて間もなく他に力を持たなかった彼女にとって、その行為だけが我が身を護る盾を得る術だった。
しかし緋陵姫は違う——彼女だけは。
だから力で支配するような真似はしたくないのだ。
そして、だからこそ——彼女の真意をそれ以上探ることもできない。
緋陵姫が本当に無茶をしなかったか否か、確かめる術を少女は放棄していた。
「そう……ならばいいのだけれど」
今ひとつ得心できぬままの少女のもとへ、靴音が近づいてくる。
「また、その配置で悩んでおられるのですか？」
柔らかな笑みを含んだ問いかけに、少女は「いいえ」とはっきり答えた。

「悩んでいるのは配置ではないわ。……時、よ。やり直しは……したくない。わたしはこれ以上待ちたくはないの。さっさとこの世界を片づけてしまいたい。けれど鍵となる娘があのありさまでは躊躇うなというほうが無理よ」

一息に言いきって、少女は闇色にぬめる双眸を緋陵姫に向けた。

「あなたの目から見て、どう感じたかしら？　あの娘をこれからどう育てれば、わたしの願いに応えてくれるかしら？　出来の悪い漆黒は何とか倒せたようだけれど、あとどれほどの経験を積めば至高の色彩を倒せるまでに育ってくれると思う？」

言葉を選び曖昧に表現しているが、その意味するところは剣呑の一言に尽きる。

少女は――五要すら打ち倒す力を駒たる娘に期待しているのだ。

緋陵姫は微かに目を伏せ、そんな少女に答えを返す。

「至高の方々の力は図り知れません……どれほど力を積もうとも、運を味方につけでもしない限り、彼の方々を倒すことなど何者にもできはしないかと――」

それは少女にとっては聞き飽きた言葉だった。

そんなことはわかっている。だからこそ、どうしたらいいのかと問いかけているのだ――しかし緋陵姫は踏み込んだ答えを提示しようとはしない……してくれない。

自分がどれほどそれを望んでいるのか、彼女にわからないはずがないというのに、決して答

えてはくれないのだ。
はあ、とため息が少女の唇から洩れた。
緋陵姫にもわからないのか、それともわかっておりながら答えることを拒んでいるのか。
彼女が大切すぎて確かめることさえできない自分に勝ち目はない。
「いいわ、もう……」
下がりなさい——そう口にしようとした、まさにその刹那。
緋陵姫の気配が、劇的に変化した。
彼女の内側に宿るもうひとつの意識が表面に出てきたのだ。
乱華——。
彼の存在を緋陵姫ほどには快く思っていない少女は、突然の乱入に眉宇を顰めずにはいられなかった。
しかし、そんなことは重々承知の上なのだろう——表出した青年は、苛立つ彼女を宥めるような声音を紡いだ。
「雛の君があの娘の爆発的な成長を望まれるのなら、手はなくもありませんよ」
少女はすぐには答えなかった。
緋陵姫と違い、乱華には幾ばくかの警戒心が働くのだ。その芽を摘みとるべく用意した器に

はまんまと逃げられ、今の彼は完全なる支配下にはない。
素直に耳を傾けるのは危険だ。
しかし、少女の中には焦りがあった。これ以上待ちたくはないという強い望みがあった。
「手、とは……？」
……だから、誘いと知りつつも乗ってしまった。
青年の意識が外に出た緋陵姫の口元に得たりとばかりの笑みが浮かんだ。
相手の掌の上で道化を演じてやるつもりなど皆目ないが、それでもこんな笑みを緋陵姫の顔に浮かべられれば不快指数は上がる一方だ。
しかし、そんな彼女の心境さえどうでもいいのだろう。
乱華は流れるような口調で策を提案した。
「人間は目の前に餌をぶら下げられれば俄然やる気を起こすものですよ」
それぐらいのことは少女も知っていた。
人間は欲に弱い生き物だ。
愚かしくも自らが抱いた欲を制御できずに容易く滅びの途を辿ることもあれば、逆に信じられぬほどの力を発揮したりもする。
だが、そんなもので引き出される力などたかが知れている。

自分が求めているのはそんな安易なものではない。
だから、少女は鼻で笑って青年の提案を一蹴しようとした。
だが、それすらも見抜いていたのだろう——絶妙なタイミングで、彼はたたみかけてきたのだ。
「自分の我が儘のせいで生死を彷徨う大怪我を負い、しかも魔性の手の内に捕らわれた弟のことを、果たしてあの娘は二度見捨てることができるでしょうか？」
答えの見えぬ苛立ちが、一瞬にして晴れた。
乱華が口にした『餌』の意味が、その瞬間いやというほどに——全身に染み渡ったのだ。
「なるほど」
艶やかな唇をぺろりと舌で舐めながら、少女は答えた。
半ば眼を伏せ、より成功率の高い計画を脳裏で練り上げながら、少女の舌は再びその唇を舐めた。
「なるほど、ね」
乱華の提案に乗るのはある意味業腹ではあったが、確かにそれは妙案だった。
残る問題はただひとつ——。

さて、どの君を贄に捧げようか――。

それだけだった。

※

セスランは呆れていた。

イリヤンの辺境の村――から少し離れた場所で、突然受けた強大な魔性の気配にそばにいた衣於留ともどもこれ以上はないというほどに緊張したというのに。

だのに、だ！

現れたいかにも強そうな妖貴は拍子抜けするほど丁重に、彼に同行を願ったのだ。

しかし、だからといって素直に頷けるほどセスランも無邪気ではなかった――妖貴によっては雑魚でしかないとはいえ、数多の妖鬼を自らの身に封じて飼っている彼のことを、魔性が好意的に捉えることはまず考えられないことなのだから。

それでも彼が結局同行することにしたのは、妖貴の言葉が無視しがたかったからである。

『眠り姫を目覚めさせたいのであれば』

ともに来たほうがいい。

妖貴はそう口にしたのだ。

眠り姫とは随分ロマンティックな表現だが、該当する人物をセスランは確かに知っており、できることならもちろん目覚めさせたいと思っていた。

ただ、その『眠り姫』にしたところで多くの魔性からは嫌われ……いや、寧ろ憎まれている気配が濃厚な分、『目覚めさせたいのであれば』という台詞に警戒しなかったわけではないのだが。

しかし――。

怪しすぎると渋る衣於留を宥めて件の妖貴に同行したセスランは、待っていた黒髪の美女の姿に一瞬開いた口がふさがらなかった。

「この期に及んで生き返るぐらいなら、なんでもっと早くに戻ってらっしゃらなかったんですか、あなたというひとは！」

彼にしては珍しく、本気で怒鳴りつけたその先で、美女――チェリクはふてくされたように肩を竦めた。

「死者は静かに眠らせておくべきだとか、優しい気遣いはあなたにはないの、セスラン」

拗ねて唇を尖らせる仕種は大人の女性の可愛らしさに溢れている。

が。

「優しい気遣いは相応しいひとにだけ振る舞うことにしてますから」

セスランは容赦なく一刀両断した。

「ひどいわ」

悲しげに瞼を伏せられても彼女をよく知る捕縛師は絆されたりはしない。

「なにを言ってるんですか。どんな空の下であろうと、少なく見積もってもうちの祖母ぐらいは長生きすると信じていたあなたが間抜けに若死になんてしたせいで、あなたの娘がどんな目にあったと思ってるんですか。大体、妖鬼に殺されるだなんて、何の冗談です。浮城でも例を見ない実戦派魅縛師だったくせに。第一線に立って、死にたがってもいない妖鬼をばっさばっさと滅ぼした姿を、何度見たと思ってるんです」

そんなあなたが複数とはいえたかが妖鬼に殺されたと聞いたときには呆れてものが言えませんでしたよ。

立て板に水の勢いで、セスランはチェリクを非難した。

「仕方ないでしょう？　魅了眼持ちの子供をふたりも産んだら涸れもするわ。あのひとの子供だったからかもしれないけれど、少なくとも息子を産んだあとは魅了眼のみの字も残ってなかったのよ。無力な人間が妖鬼相手にどうこうできるわけがないじゃない」

というチェリクの反論も、

「魅了眼に頼りきって他の異能を磨こうとしなかったあなたの自業自得です」

とあっさり一蹴する。

「大体、甦るのに何の問題もないそんな肉体まで旦那さまが用意してくださってるのに、何をぐずぐずしてたんですか。まあ……そのおかげでラスが助かったことがあるのは事実ですが」

とそこまで言ったときのことだった。

「それよ」

セスランの言葉をチェリクが遮った。

「はい？」

まだまだ文句が言い足りないセスランが不満そうに声を上げると、黒髪の元魅縛師はこの機を逃さじと身を乗り出してきた。

「そのことでお願いしたくてあなたを呼んだのよ。あの子をね、とりあえずこの体で目覚めさせようかと思って」

突拍子もない言葉だったが、セスランは驚かなかった。

親子とはいえ——しかも現在のチェリクの肉体は王蜜の妖主によって作られたものだ——別人の肉体に魂を宿らせるなど本来であれば考えられない無茶である。しかしそんな無茶を過去

ラエスリール――チェリクの娘はやってのけていた。紅蓮姫に心臓を刺し貫かれた衝撃で肉体から飛び出した魂が、この女性の空っぽだった肉体に一時的にとはいえ宿ったのだ。

だから、チェリクの言葉は実現不可能なことではない。

ない、が……。

「……なぜ、そんな回りくどい方法を取る必要があるんです？　ラスを目覚めさせるのなら、本来の肉体に戻したほうが明らかに――」

「それが簡単にいかないから妥協案を取ったのよ」

セスランの疑問にチェリクはあっさりと答えた。

「あの子の体を見てきたのだけれどね――複雑な罠が幾つも仕掛けられているのよ。あの子の魂を単純にあの子の体に戻そうとしたら、最悪肉体のほうが崩壊しかねない。だからと言って、あの子の魂と命をこのまま放っておいたら、こちらも最悪の場合あの子が自分自身のことを忘れてしまいかねないの。そうなったら、魂があの子の肉体に戻るという保証はなくなる……それはさすがに拙いでしょう？　だから、時間制限があるにしても、こまめにわたしの体で目覚めさせたほうがいいんじゃないかと、ね。ほら、よく言うでしょう、急がば回れって」

打ち明けられる内容はとんでもないことばかりだった。

厳重な結界に護られているラエスリールの肉体をどうやって見てきたのかとか――まあ、こ

れは今でも大半の護り手がチェリクへの熱烈な信奉心を捨てずにいることを考えれば、「会わせて？」あるいは「通して？」の一言で終わることだが――仕掛けられた罠の詳細をどんな手段で見抜いたのかだとか……突っ込みたいところは多々あったが、今一番大切なことは何かを考えれば、彼女の提案はもっともだった。

但し、気になるのは――。

「……時間制限とは？」

チェリクが嬉しそうに微笑んだ。

気づいてくれて嬉しいわ――とでも言いたげな顔には、同時に「だからもちろん協力してもらえるわよね？」という問いと言うより確認の意志が宿っていた。

「あの子は今、仮初めの器に宿されていて、それは不定期に力の発現を求められるの。数多の仕掛けのせいでそちらの拘束力が一番強くなっているから、ずっとわたしの中で目覚めてもいられないのよね。まあ、こうなった以上、わたしもなまけるつもりはないけれど、さすがに目覚めたあの子にわたし自身が事情を説明するのは無理だと思うの」

だから、自分は呼ばれたのか――セスランはようやく得心が行った。

ラエスリールの信頼篤く、チェリクとの交友もあった自分の言葉であれば、死んだはずの母が甦り、それどころか自分を復活させるために尽力している――などというとんでもなく胡散

臭い話であろうと、「嘘だ」の一言で一刀両断されることはないだろう。

しかし――。

「随分手間暇かけた罠のようですが……あなたの御夫君はいったい何を考えてらっしゃるんです？」

「それはわたしが聞きたいわ」

嘆くようにため息まじりに答えるチェリクの様子に、本当に彼女も何もかもを見抜けているわけではないのだと知った。

それがありがたいようにもありがたくないようにも感じられるのは、偏に彼女の現役時代の凄まじさを知るがゆえのこと。

「でもこれは、彼だけが張った罠じゃない……だからこそ、余計に複雑になっているのだけれど……」

ため息交じりに呟いたチェリクの緑の双眸に、ちらりと悪戯っぽい光が走った。

「ねえ、セスラン。ここはひとつ取り引きと行かない？」

煌めく瞳に負けるかもしれないという不安や危惧の光はかけらもない。

勝利を確信したかつての浮城最強の女性の提案に、セスランはやれやれと肩を竦めた。

抵抗は無駄だ。こうなった彼女の要求が通らなかった例はないのだから。

「……わたしに、説明以上の何をさせるつもりですか」
「それは求めないわ。わたしはわたしであれるときとあの子が目覚めている間のあなたへの協力を申し出ているだけよ」
意味ありげに綻ぶ口元を見れば、チェリクが現在の浮城の状況と、その目をかいくぐってセスランたちがやっていることを見抜いているのは知れた。
「あなたと……ラスの協力ですか」
それは――かなりの戦力になる。
加えて王蜜の配下にあるらしい妖貴ふたりがついているなら、場所の移動は容易いはずだ。
「しかし……」
あなたはともかく、紅蓮姫を持たない今のラスでは即戦力とは言い難い――。
そう言いかけたセスランの目の前に、これ見よがしに差し出されたのは小さな金鈴をいくつも連ねた耳飾りと手纏だった。
ラエスリールが捕縛師として用いる封魔鈴――。
「――要らない？」
にっこり笑って問いかけてきたチェリクに、セスランは完全に白旗を揚げた。
「降参です」

はっきりと答え、ブロンズの髪の青年は自らの髪をくしゃくしゃにかき乱した。
「協力する代わりに、あなたにもラスにも存分に手伝っていただきましょう。実際問題として、人手はいくらあっても足りない状況ですからね」
そうしてふたりは眼差しだけで同盟を結んだ。
チェリクが見抜いた通り、魔性による被害は到底、セスランたちの頑張りだけでどうこうできるレベルではなくなっていたのだ――。

※

「そろそろか……」
ガンダルース大陸中央――白砂原。
人間の目では捉えることもできぬほどの上空に佇みながら、深紅の青年が小さく息をついた。
その双眸はさらなる上空の一点を見つめている。
そこには何もない……少なくとも世界中のほとんどの者の目には何も映らない。しかし彼には確かに何かが見えているのだろう、見つめる視線に揺らぎはない。

「随分広がってきたな」
特に感慨もない声で呟いたあと、青年は誰にともなく愚痴めいた言葉を落とす。
「まったく……他人を当てにするしかない状況というのは存外きつ いな。このおれが身動き一つ自由にならないとは。まあ、そうでもなけりゃ、金の野郎の思惑なんざ蹴飛ばして無理矢理にでも引きずり戻してたけどな」
ぼやく青年の瞳に、自嘲の色がじわりと滲む。
そうして彼は宙に向かって囁きかけた。
「いい加減、戻って来い。あんまりのんびりしていると、取り返しのつかないことが起こるぞ。おれにはどうでもいいことだが……お前には、もう違うだろう?」
だから——早く。
促す声は吐息に溶けた。

第十九章　砂時計——最初の一粒

I

闇の中、自分を呼ぶ声が聞こえたような気がして、ラエスリールは顔を上げた。
あの奇妙な夢を見て以来、彼女は俯くことが多くなっていた。
空を見上げるのが恐いのだ――あの引き攣れた亀裂を目にするのが。
『あれはお前があけたもの』
淡々と告げられた言葉が脳裏に甦る。
あのように巨大で不吉なモノを、自分が作り出したのだとは信じられないが、なぜかその言葉をラエスリールは疑うことができずにいた。
だからこそ、顔を上げるのが恐い。再び目にするあの亀裂が、より大きなものへと育っていたらと思うと恐ろしくてならないのだ。
『……その時お前はなにを選ぶ』
問われた意味は未だわからぬまま――ただ、その時は確実に来るのだと理解できるから……

今は時間が欲しかった。
あの空の亀裂の意味するものを。そして起こり得る不吉な未来を。
何より――その時、自分になにができるのか、を。
考えるだけの時間が。
しかし、そんな中、呼ぶ声が聞こえたのだ――恐れも忘れ、思わず顔をあげてしまうほどに懐かしく優しい響きに満ちた声が。
『ラス』
涙が出るかと思った。
それはとうに喪ったひとのものだった。
『ラス』
母さま――気づけばそう呟いていた。
『ラス……気づいてくれて良かったわ。迎えに来たのよ』
迎えという言葉にラエスリールはぎょっとする。
『か、母さま……それは……』
どこからの迎えかと考えればその反応はもっともである――が。
返ってきたのは母の憤然たる声だった。

『失礼なことを考えないで。わたしはまだ、あなたを黄泉路に誘うほど淋しがってはいないわよ。可愛い娘には、是非長生きしてほしいと思っているのですからね』

『はあ……』

どうやら自分の勘違いだったらしいことは納得したラエスリールだが、しかしそうなると母がどこへ連れて行くつもりなのかが気になった。

すぐそばで、ふう、と息をつく気配がする——姿は見えないが、母がそこにいるのだと思うとそれだけで安心できた。

『まったく、得心が行かなければ梃子でも動かないその頑固さは誰に似たのかしら。仕方ないから教えてあげるわ。セスランがね、困っているのよ』

馴染みの青年の名前に、ラエスリールは即座に反応した。

『セスランさまが!?』

『そう……人手が足りないのですって。あなたが眠っている間にも魔性による被害は増える一方でね、猫の手も借りたい状況らしいの。だから、わたしとあなたで手伝ってあげようかと思って、そのために迎えに来たのよ』

『手伝い、ですか』

セスランが困っているというのなら、手伝いぐらい喜んでやる。

それだけの恩を受けている。

しかし、追われるように浮城を離れた自分が係わることで、彼に迷惑はかからないだろうか——それを考えるとどうしていいのか判断に困る。

呆れたような声が耳に飛び込んでくる。

『そのあたりのことはセスランに直接訊けばいいわ。ぐずぐず迷って蹲っていても、事態は何一つ変わらないわ。立って歩いてこそ道は開けるものだと、あなたはとうに知っているのではなかったの？』

叱りつける響きの宿るその声は、それでも優しかった。

そうだった。いつだって自分はそうやって生きてきた。生きることを選び続けてきた。

その結果があの空の亀裂だというのなら、自分は先に進んで——そうしてその先を見届ける義務がある。その時何を選ぶのかは、その時決めればいいのだ。恐らく自分にそう難しいことが求められるとも思えないのだから。

『わかりました。行きます』

決意を胸に答えたラエスリールに、隣から嬉しそうに笑う気配が伝わってきた。

『それでこそわたしの娘よ』

母の声と同時に、闇の中から白い手が差し出された。

知っている手――知っている指だった。
ラエスリールは迷わずその手を取った――。

※

虚空に浮かぶ未だ名を持たぬ妖主の城――。
その中心に位置する広間の床に、紫紺の妖主藍絲が跪いている。
彼の前には漆黒の玉座があり、そこに座るのは城の主たる黒髪の少女だった。
さらにその隣には、銀髪の少年が立っている。
ただし、その瞳は虚ろで少女の声が聞こえているかどうかも怪しい。意識を封じてまで、立ち会わせる意味があるのか――藍絲は脳裏に浮かんだ疑問をすぐに切り捨てる。
意味の有無など考えるだけ無駄だ。
この場にあって、指し示される事実はひとつしかないのだから。
四年前に姉の代わりに捕らわれた少年――これまで一度命を受けた以外は、雛たる少女に放り置かれていたはず。
その少年をここに呼び、さらに自分を呼んだということは――ついに雛たる少女は勝負をか

ける気になったというわけだ。

「どうかしら、第四の君。やってくださるかしら？」

語調はどうあれ、それは絶対の命だ。

いや、もちろん断ることは不可能ではない。但しその場合、次に彼女が選ぶのが最愛の存在である女性になる確率が高い。

それは自分が許せないのだから、ここは頷くしかないだろう、と藍絲は思った。

「我が忠誠はあなたのもの――お命じくだされればよろしいのですよ」

柔らかな口調で答えれば、雛たる少女が嬉しそうに笑った。

「まあ、わたしより遙かに経験を重ねられた御方に偉そうに指図などできませんわ。それに、頼む内容が内容ですもの。未熟な子供を鍛え上げるためだけに、お手を煩わせるのは気が引けますけれど、どうにもあの子供には早く力をつけてもらわないといけないので」

それはそうだろう――すでに生まれた破壊の鍵は、異質に過ぎて取り込む事ができない。

少女は急いで第二の鍵を作り上げなければならないのだ……取り込むことが可能なそれを。

そのために必要な条件が何であるのか――藍絲はすでに悟っており、自分が悟っていることを少女も知っている。

何という茶番か。

それは彼女という存在が生まれ落ちた瞬間に決まっていたことだ。いや、きっかけとなった存在が、この世界に生まれるはずのない者でなかったら、少女が二度手間を取る必要はなかった。

だが、あの異端の娘でなければ、五要の一を崩すことはなかっただろうとも思えるから、全ては必然だったのだろう。

「我が君のために、全力を尽くしましょう――」

跪いたままそう告げると、少女はこくりと頷いた。

「よろしくお願いいたしますね、第四の君」

最後の舞台を整えるための、茶番劇が幕を開ける――。

※

「ラス」

聞こえる声は、先ほどまでそばにいた母のものではなかった。

それでもよく知るその声に、ラエスリールは瞼を震わせた。

「聞こえますか、ラス？」

問いかけてくる柔らかな低音――頷く代わりに彼女は瞼を持ち上げた。
最初に目に入ったのは艶やかな赤金の髪。真冬の朝日を思わせるその髪が、ラエスリールはずっと好きだった。凍てつく冬にも陽は昇る――世界が完全に凍てつくことはないのだと声もなく告げられているようで。
その輝きは今も優しく心を照らす。
「セスランさま……」
名を呼ぶと、心配そうに顔を覗きこんでいた青年がふわりと微笑んだ。
「ああ、本当にラスですね。瞳に浮かぶ光がまるで違う」
何がどう違うのか――尋ねたいような尋ねたくないような。
それにしても、ここはどこなのだろう？　覚えている最後の記憶は、ガンディアの王宮でのことだ。
暴走した紅蓮姫を無理矢理鎮めて戻った部屋で、待っていたのは――。
「父さま、が……」
無言で伸ばされた指が、喉に喰い込む感触が甦る。
死ぬのかと思った――激しくはないが静かな決意が窺える指の動きに、凍りついたように動けなかった。

そうして意識は闇に沈んだ……。

では、父さまはわたしを殺しはしなかったのだ。殺そうと手を伸ばされたわけではなかったのだ……彼があの場に現れた理由も意味もわからないが、それだけは救いに思えた。

父に死を望まれているわけではない——そのことが嬉しい。心がふわりと軽くなった。

しかし、それはそうとあれから何がどうなったのか。セスランがいるということは、ここは浮城なのだろうか？　いや、追われた自分を浮城が再び受け入れるとは考えられない——だとしたら。

考えなければならないことが山積みで、ラエスリールは半ば混乱していた。それでもひとつだけ決定的な違和感に気づくと息を呑んだ。

体内に——。

「紅蓮姫の気配、が……ない？」

「当たり前です、それはお方様のお体なのですから」

不意に割り込んできた声に、反射的に振り向いたラエスリールは驚きに目を瞠った。

見覚えのある妖貴が、いた。

父の配下だと名乗った青年がふたり——確か、宋流と空也と名乗ったはずだ。

彼女にとって、ふたりに襲われ命を狙われたのはつい先日のことだった。考えるより先に体

は動き、セスランを背に庇う格好になった。
激しい動きに、しゃらんと澄んだ音が聞こえる。目を落とせば、左の手首に封魔鈴を連ねた手纏があった。紅蓮姫に選ばれる前、捕縛師として生涯使い続けると信じて疑わなかった封魔の金鈴。
左手を持ち上げ、今度は意図的に鈴を揺らした。
しゃらん、しゃらん、しゃらん、しゃらん。
澄んだ鈴音が楽のように連なっていく。
瞳に熱が集まるのがわかる。右目だけではない。二つの瞳ともに熱を帯びて輝きを放ち始める。
見据える先でふたりの妖貴がさっと顔色を変えた。
「お待ちを、姫君！」
「事情が変わったんです！　話ぐらい聞いてください！」
「そうですよ、ラス。彼らは協力者です。話も聞かずに封じたりしたら、チェリクさまに怒られますよ」
そっと大きな手が彼女の両目を覆い、背後からセスランののんびりした声が聞こえてきてようやく彼女は妖貴の言葉に嘘がないことを知った。

つらつらと記憶を辿り、ラエスリールは浮かんだ疑問を口にした。

「御方さまとは……母さまのこと、か？」

戦意が消えると同時に、セスランの手が外される——そして問いに対する答えは二人の魔性ではなく背後の捕縛師からもたらされた。

「そうらしいですね。どうやら復活した魅了眼を惜しげもなく使いまくってらっしゃるようで……各地で下僕……いえ、協力者を増やしてくださってます。彼らはその中でも最強の即戦力ですからね、くれぐれも寝ぼけて封じないようにしてください」

何しろあなたは妖貴だって封じる力の持ち主なんですから、そのあたりのことはきちんと弁えてくださいね。

言葉だけ聞けば褒められている内容なのだが、危険物扱いされているような気がするのはどうしてだろうか。

何にしても、このままでは何が何だかわからない。

母はセスランに訊けと言ったが、果たして自分の頭が追いつくだろうか——そんなことを考えていると、肩をぽん、と叩かれた。

「ゆっくり説明してあげますから、まずは場所を移動しましょう。もうすぐ日が暮れてしまいますし、近くに街があるのにわざわざ野宿することもないでしょう」

自分を気遣うセスランに、「はい」と答えて彼女は立ち上がった。
セスランさまは変わらない、とラエスリールは思った。
変わらずに優しく暖かい。
泣きたいような笑いたいような、不思議な感情が胸にこみ上げてくるが、ラエスリールは唇を噛んでそれを抑えた。嬉しくて泣くなど、いくら相手がセスランでも恥ずかしいではないか。
溢れそうになる涙がこぼれ落ちないように、空を見上げたラエスリールは――その刹那、ぎくりと身を震わせた。
空に――遙か東の空に。
夢の中で見た以上に大きな亀裂が走っていた。
男の声が甦る。
『闇の両翼に空は引き裂かされるだろう。在るべき空を喪って天は落ちて来るだろう』
背筋に冷たいものが伝うのを、彼女は感じた。

2

薄靄が立ちこめる川辺にアーゼンターラはいた。
夢であることがわかる。浮城の周辺に川など流れていないのだから。
ただ、不思議な夢だと思った。日の光は靄に遮られて微かにしか届いていないというのに、彼女の足下にははっきりと黒い影ができているのだ。
夢では不条理なことも珍しくはないけれど、この夢は何かが、どこかがそれとは違うような気がした。
それを確信したのは自分を呼ぶ弟の声を耳が拾ったときだった。
「ターラ」
これまで聞いたことのない弟のそれに、アーゼンターラは目を瞬かせた。
再会して以来何度も叩きつけられた憎悪に溢れた声でも、ガンディア王宮で夢に出てきた優しくこちらを気遣うような声でもない。

それは悲しげとでも表するしかない響きに満ちていたのだ。
慌ててその姿を求めると、リメラトーンは少し離れた水際から彼女を見ていた。
その姿がどうにも儚げで、アーゼンターラは駆け寄らずにはいられなかった。
「トーン!?　どうしたの、何かあったの!?」
あの芝牙尖という妖貴にひどいことでもされたのだろうか？
ああ、とアーゼンターラは思う。もっと強くならなくては、と。
ラヴィスの妖貴を倒せたことで喜んでいる場合ではないのだ。リメラトーンを捕らえたあの妖貴は、もっともっと強いのだから。
あの男を倒さなければ、弟を取り戻すことはできないのだから。
「トーン!?」
駆け寄ったアーゼンターラに、リメラトーンは力なく頭を振った。
自分と同じ菫色の瞳には、哀しみと絶望と――諦めきった色が浮かんでいた。
そして、ぽつりと洩らした。
「いいんだ……もう、いいんだ、ターラ。ターラはこれ以上頑張らなくていいんだよ」
それは許しの言葉ではない――内容がどうであれ、諦念に満ちた声を聞けば違うといやでもわかってしまう。

アーゼンターラはじわり、とイヤな予感が心臓を侵食するのを感じた。

「トーン！　いったいどうしたというの!?　償い終えるまで死ぬのは許さないと言ったのはあなたじゃない。あなたはあたしが償いを終えるまでずっと見ていてくれるのでしょう!?　なのに、なぜそんな今にも消えてしまいそうな顔をしているの！　鏡を見てごらんなさい、影が薄いなんてものじゃないわよ」

それは意図して選んだ言葉ではなかった。

だが意外にもリメラトーンはその言葉に拘った――拘らずにいられぬ事態に、彼は陥っていたのだ。

「うん。もう、ほとんど消えてるんだ……影」

そう言って、彼は自分の足下を指し示した。

そこにあるべき影が――ない。アーゼンターラの足下にははっきりとあるそれが、彼のそばにはない。

アーゼンターラは呆然とした。

「な、なに……なんで……」

「ぼくはもう用済みなんだって。要らないからって、紫紺の妖主に玩具として下げ渡されたんだって……」

乾いた声には悔しささえ滲んではいない。

「……だから、もういいよ、ターラ。さすがに妖主相手に戦って生き残れるはずはないし、ぼくのせいでターラがなぶり殺しにされるのは見たくない。そこまで望んでるわけじゃない。だから、いいんだ。どちらにせよ、この影の状態じゃ、すぐにぼくはぼくじゃなくなるだろうしね……」

翳りのある笑みをたたえて、リメラトーンは淡々と語った。

アーゼンターラはぶるぶると震えながら頭を振った。

「馬鹿なこと言わないで！　何でそんなに簡単に諦めるの!?　大火傷を負ったって、梁の下敷きになったって、生きることを諦めなかったんでしょう!?　またあたしのせいだって思っていいから！　全部あたしのせいだって――どんなに憎んでもいいから、トーン！　どうか諦めないで……お願い」

必死にリメラトーンの体を抱きしめ、縋るようにアーゼンターラは言いつのった。

耳元で、年子の弟がため息をつくのを感じた。

「無理だよ、ターラ。いくらなんでも妖主じゃ相手が悪すぎる。それに……本当はターラのせいなんかじゃないってことぐらい、とうに気づいてたんだ。ただ苦しくて、辛くて、ターラを恨まなければ自分を支えることができなかった。こんな卑怯な弟のために、これ以上ターラが

苦しむことはない。どうしようもない不運に見舞われたんだと思って、そうして……時々ぼくのことを思い出してくれるなら、もうそれでいい……」

だってターラはもう、ぼくしかいないわけじゃないでしょう？

はっとして顔を上げたアーゼンターラの目に、これまで見たことがないほどに優しい目をしたリメラトーンの顔が映った。

「トーン！」

「憎んだし恨んだよ。でもそんなのは全部ぼくの弱さだ。大事なことは、それ以上にぼくはターラが好きだってことだった……思い出したのはこんな目にあわされてからだけど、思い出さないよりはましだろう？」

だって最後に本当の気持ちを伝えることができた——。

満足そうに微笑んだリメラトーンの輪郭が宙に融けるように薄くなっていく。

「駄目、行かないで、トーン！」

アーゼンターラの叫びに、しかし弟は応えなかった。

「愛してるよ、ターラ。できれば浮城なんて出て、普通に幸せに生きてくれると嬉しい」

その言葉を最後に、リメラトーンの姿は完全にその場から消えた。

ひとり残されたアーゼンターラは、固く固くこぶしを握りしめた。

諦めるものですか。
岩より強固な決意を胸に刻みながら――。

※

翌朝、朝食もそこそこにリーヴシェランの部屋を訪ねたアーゼンターラは邪羅を呼び出してくれるよう頼んだ。
私室で優雅に食後のお茶を味わっていた金髪の美少女は、アーゼンターラの頼みに唇を尖らせる。
「わたしはあいつの呼び出し係じゃないのよ」
つん、と顎を反らすリーヴシェランの態度に、さては機嫌を損ねてしまったかと内心冷や汗を掻いたアーゼンターラだが、意外なひとが援護に回ってくれた。
「リーヴィ、拗ねるにしても照れるにしても、時と場合を考えなさい」
魅縛師の少女を溺愛していることで知られる虹色の髪の美女が、静かながら凛とした声でリーヴシェランを窘めたのだ。
甘やかすばかりが愛情ではないが、それにしてもこんな風に毅然とした態度を取れるのだと

は思っていなかったのでアーゼンターラは驚いた。

「彩糸、だって……」

「だってじゃありません。アーゼンターラさんの顔をご覧なさい、目が赤く眠ってらっしゃらないのは明らかですよ。きっと、夜が明けるのをまんじりともせずに待ってらしたんです。そんな方の真摯な願いに駄々をこねるだなんて、子供のすることです」

勝ち気で知られる少女だが、護り手の美女にはとことん弱いのか、気まずそうにこめかみのあたりを指で掻いたあと、アーゼンターラに素直な謝罪を寄越した。

「悪かったわ。でも、できればあいつの呼び出し以外の用件も作ってちょうだい。……まあ、最近はなかなか姿を見せないあいつが一番悪いんだけどね」

言いながら、なぜか琴に手を伸ばす。

なぜに琴――覚えた疑問はすぐに解けた。

「邪羅、来てちょうだい」

たった一言。

リーヴシェランが告げた瞬間に、空気がゆらり、と僅かに歪んだ。

空間の隙間から、現れたのは乳白色の髪の人間離れした美貌の青年――リーヴシェランは琴を振り上げると、青年の頭目がけて思い切り振り下ろした！

「なにすんだ、この暴力女！　んなもんでひとの頭を狙うなと何度言ったらわかるんだ!?」

すんでのところで攻撃をかわした青年――邪羅の文句内容がもの悲しく思えるのはどうしてだろう。

意外に攻撃的な性格を披露した少女は謝るどころか鼻を鳴らした。

「この間――呼んだのに来なかったのは誰？　四六時中くっつかれてたら鬱陶しいからって、ちゃんと呼ぶと妥協したわたしが呼んだのに、あの時あなたは来なかったじゃない。本来なら針を千本呑ませるところを琴の一撃ですませてあげようというのよ、わたしの優しさに感謝して欲しいくらいだわ」

その言葉に、思い当たることがあったのだろう、邪羅は困ったように鼻を掻いた。

「悪かったって……その、ちょうど取り込み中で……でも、それが済んでから大急ぎで来たんだぜ？　特に危険が迫ってるってわけでもなさそうだったし……なあ、機嫌直せよ」

つん、とそっぽを向いた少女に平謝りする上級魔性――のはずだ――というのは、何というか見ていて微笑ましくておかしくないと思うのだが……なぜだろうか、妙に気恥ずかしい。

……この二人って――。

思いが顔に出たのだろう、視線を感じると彩糸が自分を見つめていた。その優雅で長い指が、すいと自らの口元に当てられるのを見て、アーゼンターラは力なく笑うしかなかった。

「さあさあ、リーヴィも若君もじゃれ合うのはそのあたりでやめておいてくださいね。全く、アーゼンターラさんが若君に用があることはわかっていたでしょうに、リーヴィ、悪戯を仕掛けるのも……」

彩糸の口調に何かを感じ取ったのだろう——リーヴィは慌てた様子で口を開いた。

「ごめんなさい、彩糸！　時と場合よね、ごめんなさい、本当にわたしが悪かったわ！　反省してます、だから許して！」

両手を合わせて大袈裟なまでに頭を下げる少女の明るい緑の瞳には、僅かながら恐れのようなものが見える。

そして彩糸が再び口を開くより早く、リーヴシェランは邪羅に向かって話しかけた。

「アーゼンターラがあなたに訊きたいことがあるんですって。そのことで昨夜は一睡もできなかったみたいで……」

「えっと、おれ？　あー、悪い。芝牙尖のことだろ？　調べてはいるんだけど、なかなか噂にも出てこないやつで、まだ正体とかはっきり摑めてないんだわ」

以前頼んだことを、どうやら気にかけてくれていたらしい——もしかしたら忘れられているのではないかと思ったこともあるアーゼンターラは罪悪感を覚えた。

「いえ、そうじゃなくて……もちろん弟に関係があることなんだけど、実は昨日夢にトーンが

出て来たの。それで、用済みになって紫紺の妖主に下げ渡されたって――。それでその時、トーンに影がなかったの。あなたなら紫紺の妖主のこと詳しく知ってるんじゃないかと思って、それでどういう状況なのか尋ねたいと――」

思ったの――アーゼンターラは最後まで言いきることができなかった。

なぜなら、乳白色の髪を持つ美貌の青年が、その美貌を思い切り裏切るような形相で宙に向かって絶叫したからだ。

「あの馬鹿親父ーっっ！　意味深にお袋ともども姿消しといて、やってるのはお人形さん造りだとぉ!?　ふざけるのも大概にしろーっっ！」

※

「影盗られたってんなら、影糸術だな。親父の悪趣味な得意技のひとつで、完成すると影盗られた本人の魂は人形に封じられちまう。二度と人間には戻れない……その前に体力が尽きて死んじまうけどな」

邪羅が仏頂面で説明する内容に、室内は先ほどまでの賑やかさが嘘のように静まりかえっていた。

「術を解くには術者を倒すしかなかったのよね？」

確認を取るように尋ねるリーヴシェランも深刻な顔になっていた。

彩糸の姿はない——お茶を淹れて来ましょう、と告げて奥に消えたきり戻って来ないのだ。

少女の言葉に、アーゼンターラは顔が強ばるのを感じた。

倒す——紫紺の妖主を？　それはとてつもないことだ。できなければトーンを喪うとわかっていても、単純に決意することは難しい。妖貴の強さを痛感したばかりのアーゼンターラにとって、さらにその頂点に位置する魔性の王の強さなど想像の限界を超えているのだ。

「いや、親父の場合、そのあたりは上手く抜け道用意してると思う。以前姉ちゃんと紅蓮姫相手に醜態晒して懲りてるはずだから。命一個だけ術に繋げるとか、そういう線じゃないかと思うぜ。まあ、一個とは言ってもこれがそうだって看板下げてるわけじゃないから突き止めるのは骨かもしれないけど……」

まあ、根性と紅蓮姫の旺盛な食欲次第じゃ不可能じゃないと思うぜ。

にやりと笑って告げられた言葉に、思わずほっと息をついた。自分はラエスリールではないから、紅蓮姫と組んでも同じように妖主相手に戦えるとは思わない。それでも、紅蓮姫の存在ゆえに相手が無用の警戒心を抱いてくれるなら、つけいる隙はあるかもしれない。

妖主の命全てを奪うのは、さすがに無理だと思う。けれど、邪羅の言ったように一個だけな

ら――紅蓮姫の力も借りて、全力を尽くせばあるいは可能かもしれない。
それでリメラトーンの命が助かるのなら、妖主にだって戦いを挑もう――但し、リメラトーンが助かったら即座に逃げ出せるよう、万全の準備が必須事項だけれど。
もしかしたら、そちらのほうが難しいかもしれないが、幸い邪羅が協力してくれる。彼は相当父親である紫紺の妖主に怒っているらしく、絶叫したあと真っ先に全面協力を申し出てくれたのだ。
ありがたいことだ、とアーゼンターラは素直に思った。ラエスリールに及ばないことを今の自分が悔しがる権利はないのだから。まだまだ自分は力を尽くし切ってはいない。何もかもこれからだ。だから他人の協力はありがたく受け入れる。
「しかし、問題は親父の居場所だよなー。やっぱ、兄ちゃん見つけたとき、無理矢理にでも居場所を聞き出しとくべきだったか……多分、一緒にいるだろうし」
乗り込むにしても場所がわからなければ始まらない。
「あら、それは結構簡単じゃないかと思うわよ？」
優雅に紅茶を口にしながら、リーヴシェランが意外なことを言い出した。
「うん？」
「どうして？」

邪羅とアーゼンターラが尋ねるのに、金髪の美少女は軽く答えた。

「だって、アーゼンターラが紅蓮姫に新しく選ばれたことは魔性の間でも広まっているんでしょう？　紫紺の妖主ともあろう者が、一度不覚を取った相手の動向に無関心だとは思えないわ。アーゼンターラのことぐらい、とうに調べているんじゃないかしら。そしてアーゼンターラとそっくりだという弟さんが手元に転がり込んで来たら、嬉々として何か企むんじゃない？　それとも過ぎたことは気にならない性格のひとなのかしら？」

最後の問いは邪羅に向けられたものだった。

青年の口元がへの字に歪む。

「過去を引きずらない性格なら、いつまでも母ちゃんに想いは残してないよな。それに……まあ、うん。確かに嬉々としてあれこれ企んで罠張りそうだ」

「それなら、座して待つというのも一つの手じゃないかしら？　恐らく手遅れになる前に、招待状ぐらい送ってくると思うわよ。その場合、目的達したあと逃げ出すのがものすごく大変かもしれないけど」

リーヴシェランの言葉は正鵠を射ていたのだろう――邪羅がしきりに感心しながら、「お前会ってもいないのに、よく親父のことがわかるよな」と褒めているのか貶しているのかわからない言葉をかけていた。

けれど――。

アーゼンターラはこの案に頷くことはできなかった。

「駄目よ」

ゆっくりと頭を振って、彼女は告げた。

「招かれるとしたら、きっとぎりぎりのタイミングになるでしょう？　あたしは間に合わせる自信がない。他のことならともかく、かかっているのがトーンの命である以上、賭けには出られないわ」

きっぱりと言いきったアーゼンターラに、リーヴシェランは「そうよね」と頷いた。

「大事なひとの命がかかっているのに、悠長に待つだけなんて堪えられるはずがないんだわ。ごめんなさい、アーゼンターラ。わたし、事態の深刻さをわかっているつもりで、全然わかってなかったわ。いえ、すっかり忘れてた」

言われてアーゼンターラも思い出した。

カラヴィスの公女リーヴシェランは、数年前その兄を魔性に狙われ喪いかけたのだということを。

彼女たちに対して、長いこと一線を画してしかつきあおうとしなかった自分のことに、こんなに親身になってくれるのは恐らくその経験があるからだ。

「いえ、いいえ！　あたしこそ……ずっと誤解して避けていたのに、都合の良いときだけ頼るような真似をして……」

横槍が入ったのはその時だった。

「美少女ふたり、親交を深めるのはいいんだけどさー。まあ、親父の居場所はおれがなんとしても見つけてやるけど、でもさー。ものすごく大きな問題がひとつあるの、もしかしてお前ら気づいてない？」

邪羅が指摘することに、少女ふたりはきょとんと顔を見合わせた。

青年が言う問題というのがどうにもわからなかったのだ。

説明を受けて初めて気づいた――浮城における、あまりにも基本的な問題に。

「浮城は依頼を受けて初めて人員を派遣するんだろ？　確かよほど切羽詰まった状況でもない限り、依頼以外で魔性と戦うことは禁じられてるってのは、昔姉ちゃんから聞いた話なんだけどさ。アーゼンターラ、あんたうちの親父の居場所がわかったとして、その問題はどう解決するつもりだ？」

思いもかけない方向から持ち上がった問題に、しかしアーゼンターラは即座に解を出した。

「あたしが浮城にあたしを派遣するように依頼するわ」

きっぱりはっきりと言いきった彼女に、「格好良いわ！」とリーヴシェランは拍手つきで賛

成してくれた。
だが、邪羅は複雑そうに笑っただけだった。
そんな彼の態度の理由を、アーゼンターラはすぐに知ることになる。
彼女自身による彼女を派遣する内容の依頼は、城長(しろおさ)アーヴィヌスによって受理されなかったのである……。

3

「納得できません！」

噛みつかんばかりの勢いで、アーゼンターラはアーヴィヌスに詰め寄っていた。

城長の執務室でのことである。

アーゼンターラ自らが出した依頼――リメラトーン救出のために自分の派遣を望む内容である――が受理されなかったことに対する抗議のため、彼女は城長に直談判に来たのだ。

背後にはスラヴィエーラ、オルグァン、マイダードの面子が揃っている。アーゼンターラが湯気を立てんばかりの形相で執務室に向かうのを見かけ、心配してついて来てくれたのだ。

よほど凄い顔をしていたのだろう――しかし、そんなことに構う余裕は今のアーゼンターラにはない。

「外部からの依頼がない場合でも、内部……浮城の人間自ら人員派遣の依頼をすることは認められているはずです！　しかも身内や知人が係わっている場合、個人が志願して認められなか

った例はありません！　なのに、どうしてあたしの出した依頼書が受理されないんですか!?」

正式に依頼書を提出するにあたり、アーゼンターラは過去の事例を余すところなく調べ上げていた。

これなら確実に受理されるはずだと信じて出した依頼書は、しかしアーヴィヌスの権限で不受理とされてしまったのだ。

これを怒らずにいられようか。

「納得できる理由の提示を要求します」

憤然と詰め寄るアーゼンターラは、だがどんな理由を挙げられたところで納得する気など皆無だ。

それでも一応理由を尋ねたのは、アーヴィヌスの考えぐらいは聞いておこうと思ったからだ……おおかた「危険すぎる」というのが最大の理由だろうが。

こんなことなら、馬鹿正直に相手が妖主らしい――それでも推定に留めておいたのだが――だなんて書くんじゃなかったかしら。

そうは思うが、書かなかった場合確実に派遣は組んでいるチームとしてのものになるだろうことを考えれば、曖昧に誤魔化すのは憚られたのだ。チームは一心同体とはよく言われるが、さすがに妖主が相手とわかっている場所に一緒に来て欲しいとは言えないではないか。

夢の中のリメラトーンの躊躇いが、少しは理解できたが、自分自身のことはまた別問題である。

「何も妖主と正面対決するわけではないんです。弟さえ救出できたら、あとはさっさと尻尾を巻いて逃げるつもりだと書いたはずです！　あたしだってそこまで命知らずじゃありません」

「妖主の手元にある人間を奪還しようという人間のどこが命知らずでないというのだ！」

何と言われようとも退こうとしないアーゼンターラに苛立ちを抑えきれなかったのか、アーヴィヌスがついに怒鳴りつけてきた。

「納得できる理由だと？　考えるまでもないだろうが！　いくら身内のためとは言え、確実に死ぬとわかっている場所に向かおうとしている者を行かせられるはずがないだろう!?　大体、依頼を受けた場合、チーム派遣が今の浮城の鉄則だ。アーゼンターラ、君はチームの皆に一緒に死地に向かってくれと頼むつもりなのか？」

痛いところを突いてくれる――だが、それは想定内だ。

「だからっっ！　依頼書にはしっかり破妖剣士一名の派遣を希望と書きました！　読んでらっしゃらないんですか!?」

「なおさら許せるわけがなかろう！　いくら紅蓮姫の使い手だからといって、ひとりで妖主相手に何ができると思ってる!?　君はあの化け物の娘とは違うんだぞっ！」

アーヴィヌスのあまりの言葉に、アーゼンターラは目の前が真っ白になる錯覚を覚えた。
化け物の娘――？
それはいったい誰を指しての言葉だというのか。
「……城長。今、非常に聞き苦しく不適切な言葉を聞いたような気がしたのですが――」
ゆらり、とアーゼンターラの全身から怒りの波動が陽炎の如く立ち上る。
こんなことを平然と口にする男が、仮にも浮城の長を務めているのかと思うと、以前感じていた浮城自体への不信感もあながち的外れではなかったのだと思い知る。
しかし、アーゼンターラが口撃に出るより早く、背後から声が飛び込んで来た。
「あのー、白熱した口論の最中失礼ですが……」
緊張感に乏しい間延びした声はマイダードのものだった。
「城長にひとつだけ申し上げたいことがありまして。勝手にひとのことを盾にするのは是非やめていただきたいんですがね」
「そうそう」
同調の声を上げたのはスラヴィエーラだ。
「城長が仰りたいことはもちろんわかりますし、わたしらだってターラの言い分は無茶だとは思いますけど？　ほんと、勝手にわたしらを盾にターラを諦めさせようなんて卑怯な真似は是

非ともやめてくださいな。後々わたしらのせいで弟を救えなかった……なんてターラに恨まれるのは御免被ります」

その言葉に、アーゼンターラは反射的に口を開いていた。

「そんな八つ当たりめいた誤魔化し、しないわよ！　きちんとアーヴィヌスさまのせいだって骨の髄まで刻み込むわ！」

「骨の髄まで……」

ぼそりと洩らしたオルグァンの声には、どこか面白がっているような響きが含まれていた。

「まあまあ。それはターラの自由だけどね、傍から見てるとわかるんだよね。二人とも頭に血が上りすぎだって。こんな状況でいくら話してても無駄に白熱化するだけで、実りなんて期待できないよ。ここは少し時間を置いたほうがいいと思うね」

背後からぽんぽんと肩を叩かれる。

落ち着け、と言われているのはわかるが、そう簡単に怒りを鎮められるものではない。

「だって、スラヴィ！」

「スラヴィに賛成。と言うか、アーヴィヌスさま、自分の半分も生きてない相手に何むきになってるんですか。身内の安否がかかってる相手に、駄目だ無茶だの一辺倒が通用するわけがないでしょうが。次までにちゃんとターラが納得できるだけの理由とやら、考えといてください

ね」

マイダードが勝手に話を切り上げようとするのに気づいたが、口元をスラヴィエーラに塞がれてしまって止められない。

もごもごと言葉にならない音をたてているアーゼンターラを、引きずるようにスラヴィエーラが扉に向かって歩き出す——外見からは想像できない強い力に、アーゼンターラは半ば荷物扱いだった。

そんなスラヴィエーラが一度だけ足を止めたのは、未だ顔の赤いアーヴィヌスに言葉をかけるためだった。

「アーヴィヌスさま。あなたよりターラの性格に詳しいチームの一員として、ひとつ忠告させていただきますが……この娘に上から抑えこむ言動は禁物ですよ。ごり押ししすぎると、思いあまって何しでかすかわかりませんから。せっかく取り戻した紅蓮姫を、再び外に出すような羽目に陥りたくなかったら、誠実で真摯な対応を心がけることですね」

この台詞に、ぷ、と噴きだしたのはマイダードだ。

「二人続けて紅蓮姫の使い手が浮城を脱走——なーんてことになったら、紅蓮姫は浮城が嫌いらしいって噂が飛び交いそうですねー」

それとは別の言い分を口に出したのはオルグァンだった。

「それと、先ほどの失言については城長には深く反省していただきたい。仮にも一度住人として受け入れた人物を化け物呼ばわりとはあまりに酷い。知れば件の問題人物たちばかりでなく、大半の者が不快感を抱くだろうことは覚えておかれたほうがいい」

三者三様の慇懃無礼な口上に、アーヴィヌスは再び怒りに顔を染めた。

「お前たちっ！」

君たち――でないあたり、怒りの程が知れるというものだが、それはアーゼンターラだとて同じだった。

放してちょうだい、スラヴィ！　あたしはまだこの石頭の××親父に言ってやりたいことがあるのよ！　あなたたちだけ言いたいこと言ってすっきりするだなんて酷いじゃない！　狡いわよ！

等々、等々――。

しかし口が塞がれたままの彼女の言葉が意味のある響きを持つことはなかった。

それどころか――。

執務室から連れ出されたアーゼンターラは、チームの他の三人から「一人で突っ走るんじゃない！」と、こんこんと説教されることとなったのである……。

※

かたり、と扉が開くのを、白煉は微かな警戒心とともに見守っていた。
もっとも、真実警戒したわけではない。害意を抱く者であれば殺すはずの己の気配を、その侵入者は隠しもしていなかったからである。
不本意ながら、よく知った気配だった。
だからといって、私室に挨拶もなく忍び込む行為を許すつもりはなかったが。
しかし、彼女は先ほど耳にした情報のせいで少しばかり慈悲深い気分になっていた。火だるまにするのは勘弁してやろうか——と思う程度には。
だが、その俄慈悲は、扉の向こうから現れた紫紺の髪の男の第一声で吹き飛んだ。
「なんだ、いたのか……火球が飛んでこなかったからてっきり留守かと思ったよ」
失礼極まりない藍絲の言葉に、白煉はこめかみがぴくりと震えるのを感じた。
「望むなら、妾最高の焔を今からでも存分に見舞ってやるが？」
半ば以上本気で告げると、藍絲は苦笑交じりに「やめてくれ」と答えた。
「貴女の焔を味わうために訪れたわけではないのだ。最後の別れにぐらい、少しばかりしめやかな空気を望んでも罰は当たらないだろう？」

神妙な顔をしてそんなことを言う男の顔を、白煉はまじまじと凝視した。
本気で意外に思ったのだ。
「何の冗談じゃ？」
それでも過去に騙された経験は未だに矜持をじくじくと痛ませる——どうしたところで素直に相対することなどできなかった。
男はそんな白煉の態度に少しばかり落胆した様子を見せ、ふうと息をついた。
「……ここを去ることになったのでね。別れの挨拶ぐらいは受けてくれるだろう？」
いつも余裕の態度を崩さず、白煉を怒らせるような言動しか取らない男が、らしくもない気弱な口調で問いかけてくる。
どうしたのかと思う程度には白煉は男ののらりくらりと摑み所のない言動の奥に隠された絶大な自らへの信頼の程を知っていた。
今の彼には、それが感じられない。
不思議でならなかった。
「去るとは、雛の君からの要請のことだろう？　最初の鍵となった娘とは比べものにならぬ第二の鍵候補の娘。あれを鍛えるために出掛けるだけの話ではないか。いくら同じく紅蓮姫に選ばれたとはいえ、あんな経験も覚悟もない小娘にどうこうされるお前でもあるまい」

別段、気弱になっているらしい男を励ますつもりはなかった。
白煉は正直に思うところを口にしただけだった。
だから、その彼女の言葉に、男が心底嬉しそうな笑みを浮かべたのに軽い驚きを覚えただけだ。
「嬉しいな、その程度にはわたしはあなたの信頼を得ているわけだ」
すい、と男が部屋に踏み込む。
「誰が入室を許した!?」
男の無礼に怒りを爆発させるより早く、藍絲は白煉を抱き込んでいた。
「つれない貴女。だが、戦いに赴く男に慈悲の口づけぐらいは許してくれなければ」
白煉の返事も待たず、重ねられる藍絲の唇――。
情熱とともに男の舌が唇の隙間を割って入り込んでくるのを、白煉は拒まなかった。
長い、長い口づけが続いた。
終止符の代わりとなったのは、鈍く響いた、がり、という音だった。
藍絲が白煉から身を離す――その口の端から流れるのは真紅。
白煉が彼の舌を噛んだのだ。
血を拭おうともせず、困ったように微笑む男を、白煉はぎりりと睨みつけた。

「どこまでも、貴女はつれない」

藍絲の声は、しかしどこか嬉しそうだった。

そのまま数歩後ずさると、彼は深々と腰を折った。

それは主にではなく、最愛の存在に向ける最高の礼——。

「けれど、わたしにとって貴女は永遠の最愛のひとだ……ご機嫌よう。貴女の幸福をいつもわたしは祈っているよ」

その言葉を最後に、藍絲は振り返ることなく部屋を出て行った。

白煉は一言も放たぬまま、しばらくして唇に指を這わせた。

そうして出て来たのは「痴れ者が」の一言。

自分だけで完結し、好き勝手に振る舞うその在り方こそが、自分の不信を払えぬ最大の元因なのだと、いつになったらあの男は気づくのだろうか。

「馬鹿者」

もしかしたら永遠に気づかないかもしれない。

「阿呆」

けれど、一番の愚か者は——きっと自分だ、と白煉は思った。

譬え騙され、自らを人間だと信じていたところで、魔性の王たる自分が望まぬ子など孕むは

ずがないのだ。
つまり、その事実が意味するところは――。
だが、自分は決してそれを藍絲に伝えることはないだろう。だからこそ、自分は度し難い愚か者で、あの男は信じられない阿呆なのだ。

※

翌日――世界最大の版図を誇るマグァーラ帝国第三の都市カーヴィアで異変が生じた。
街の住人全員が意識不明の状態に陥ったのだ。
しかもその全てから影が奪われていた。
小国ひとつほどの人口を誇るカーヴィアの住人全員を襲った災禍。
これが尋常な魔性に可能なはずがない。
マグァーラ皇帝シスアーナ一世は、即刻浮城へ使者を送った。
この帝国を揺るがす魔性に因る災禍を解決するために――最強の破妖刀紅蓮姫の使い手の派遣を要請したのである。



破妖の剣 ザ・ダイジェスト

紅蓮姫は恋をする

小島 榊

原作／前田珠子


今はもう
おまえだけだね
僕のそばに
いてくれるのは
何故(なぜ)か愛着を
覚える刀
おまえだけは
決して
手放さない
――ありがとう
え…っ
ばっ
……
気のせいかな?
……炎


君は…誰？
私は
×××
あなたに恋する
ただの娘
恋…!?
で…でも僕は
君に会うのは
初めてだよ？
朱金の――瞳
雪のように白い肌
鮮やかすぎるほどの


あなたが気づいていないだけ
私はずっとあなたを見つめていたわ
あなたを初めて見た時から
ずっと
待って
君は……
夢……
誰だったんだろう…あの子
とても綺麗な朱金の瞳


一瞬で　恋に落ちた
何だ…？
嫌な空気
全身を
突き刺すような
これは――
また夢の中で
逢えるだろうか
今度逢ったら
名前を聞くんだ
それから――


妖鬼……！
……！
……っ
大好きだった母さんを殺した
憎い
憎い
自殺行為なのはわかってる
でももしかしたら
紅蓮姫
この刀なら
僕がおまえを使うのは
これが最初で最後になるかもしれないけど…


!?
——いいえ
あなたは死なない
あなたは私が守るわ
ああ そうか
君は——
——やめろ
何だ?
おまえも喰われに来たのか?


あお
きさまアァ
ああ
何という力
何という歓喜
引きずられる…！


紅蓮姫!!
シリィはとても怒っていたの…
妖鬼を倒すための武器を作り出せない自分に
小鬼すら倒すことのできない村の若者たちに
破妖刀はこの世で唯一妖鬼を倒すことのできる刀
たがそれをひと振り鍛え上げるために
人間は少なからぬ代償を支払わねばならない
シリィのうちにある怒り——生きる支えになっていた感情を
すべて注ぎ込んで作られたのが私
彼はそのせいで死んでしまった


あなたを
独りぼっちに
してしまったのは
私なの
ラキス
あなたは
私を憎む？
父さん——
母さんを
失って以来
見せることのなかった
安らかな死に顔
…だとしたら
父さんは
本望だったんだ
念願だった
破妖刀——君を
生み出すことが
できたのだから
きっと
幸せだったのだろう
そして　僕は
それを
成し遂げて
くれた
父さんに
感謝してる


何よりも
美しく輝く
朱金の宝石
ラキス…
こうして
君と出逢えて
君に
恋することが
できたのだから
たとえ何度
生まれ変わったと
しても
ラキス
僕は
君を見つけ
君に
恋するだろう

浮城へ行こう
紅蓮姫

僕が
破妖剣士に
なれば

僕らはずっと
一緒にいられる

ええ――ラキス
そして私たち

永遠に
恋しあうの

その後――

ラキスは
破妖剣士として
四十数年を生きた

彼の傍らには
朱金の瞳を持つ
女神が付き添い

生涯彼を
護り続けたという

もう今は
伝説と
なってしまった

古い古い
恋の物語――

あとがき

めっきり秋も深まりました今日この頃、皆様如何(いかが)お過ごしでしょうか。

今日は、前田珠子(まえだたまこ)です。

破妖の剣(はよう つるぎ)『鬱金(うこん)の暁闇(ぎょうあん)』第五巻をお届けします。

第四巻で完全不在だった本命ヒロインが、今回仮復活を果たします。本格的に復活するにはまだ条件がクリアされていないので、仮がつくわけですが（どのあたりが仮なのかは、どうぞ読んで確かめてください）、下手(へた)したら本格復活するより強いんじゃなかろうかと思ってしまうほどに最強状態での復活です。

どんな具合に最強なのかは、第六巻で是非(ぜひ)描きたいと思ってます。

前回謎のままだった黒髪の美女の正体も明かされました。

思い出は美化されるのか、あえてそういう面から皆目(みな)を逸(そ)らしていただけなのか、現実の彼女はこういうひとでした（笑）。作中アーヴィヌスが呼んでいた「化け物」は、実はラスでは

なくこのひとだった、と。そんな相手に夜中に会いに来られたら、それは恐ろしかったことでしょう。

そんな彼女と対等どころかやりこめることのできるセスランはやはり強者です。きっとラスの思い出話を噴き出すのを堪えながら聞いてあげていたのでしょう。ふたりの掛け合いは実に楽しく書けました。

ダブルヒロインの片割れであるアーゼンターラも今回、ようやく逃げることをやめ、自分の足で自分らしく歩き出すことができました。吹っ切った彼女はこれから前向きに……でもスラヴィエーラたち年長組を振り回してくれる予定です。

しかし今回も魔性サイド（人外魔境の美女含む）のエピソードが多いです。まあ雛の君の計画が着々と進む中、描かないと話にならないわけですが……張らなくてはならない伏線があのひとにもこのひとにもそのひとにもあって、書く側は忘れないようにメモするのに追われてます。若い頃は「忘れるはずない！」とメモも取らず、実際に覚えてたんですけどねえ……あの頃の記憶力が切実に恋しいです。

さて、次回の展開ですが、アーゼンターラと紫紺の妖主の対決がメインになるかと思います……弟取り戻したらすこたら逃げるつもりらしいアーゼンターラですが、藍絲がそれを許してくれるかどうか——は、まあ言わずもがなですが。作者は今から頭を悩ませてます。糸関連の

攻撃法は、ラストとの対決時に思いつくだけ書いてしまったので。対決シーンまでに、何とか捻り出さなければ……（汗）。ごめんね、アーゼンターラと先に謝っておきます。

今回もイラストの小島榊さんをはじめ、関係各所の方々には大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

それでは、また次の本でお会いできることを願って――。

平成二十一年　秋

前田　珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

この作品のご感想をお寄せください。

前田珠子先生へのお手紙のあて先

〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10
集英社コバルト編集部　気付
前田珠子先生

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『空の呪縛』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



——破妖の剣　6——
鬱金（うこん）の暁闇（ぎょうあん）5

COBALT-SERIES

2009年11月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

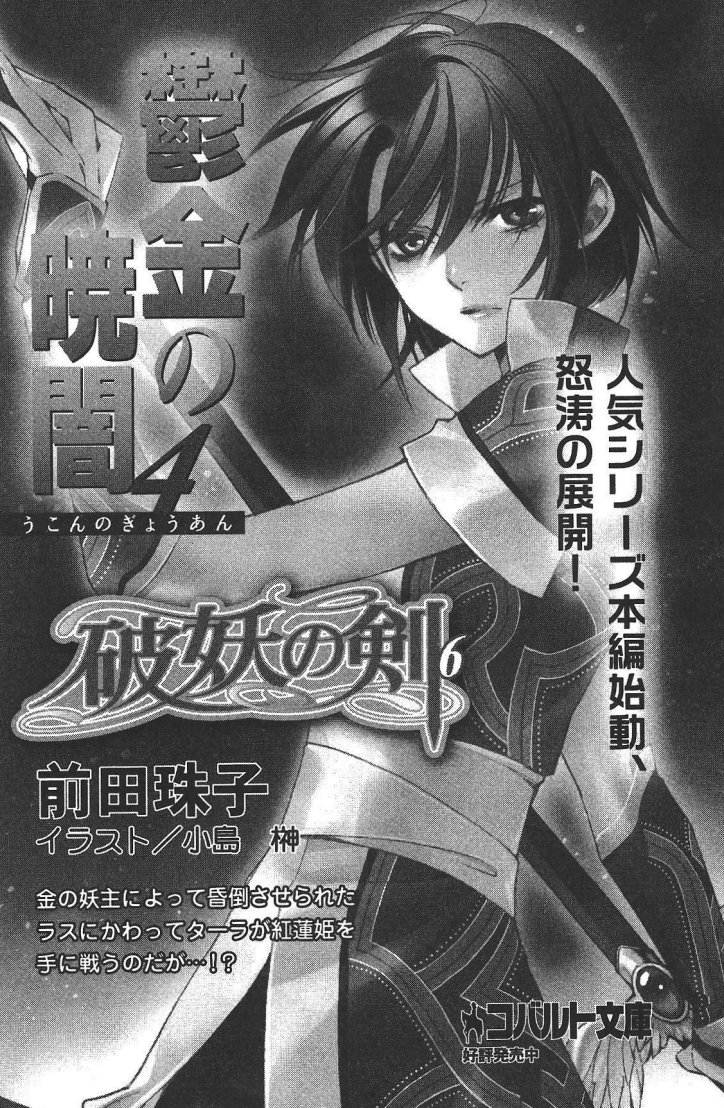
著者　前田珠子
発行者　太田富雄
発行所　株式会社集英社

〒101—8050
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
(3230) 6268 (編集部)
電話　東京 (3230) 6393 (販売部)
(3230) 6080 (読者係)

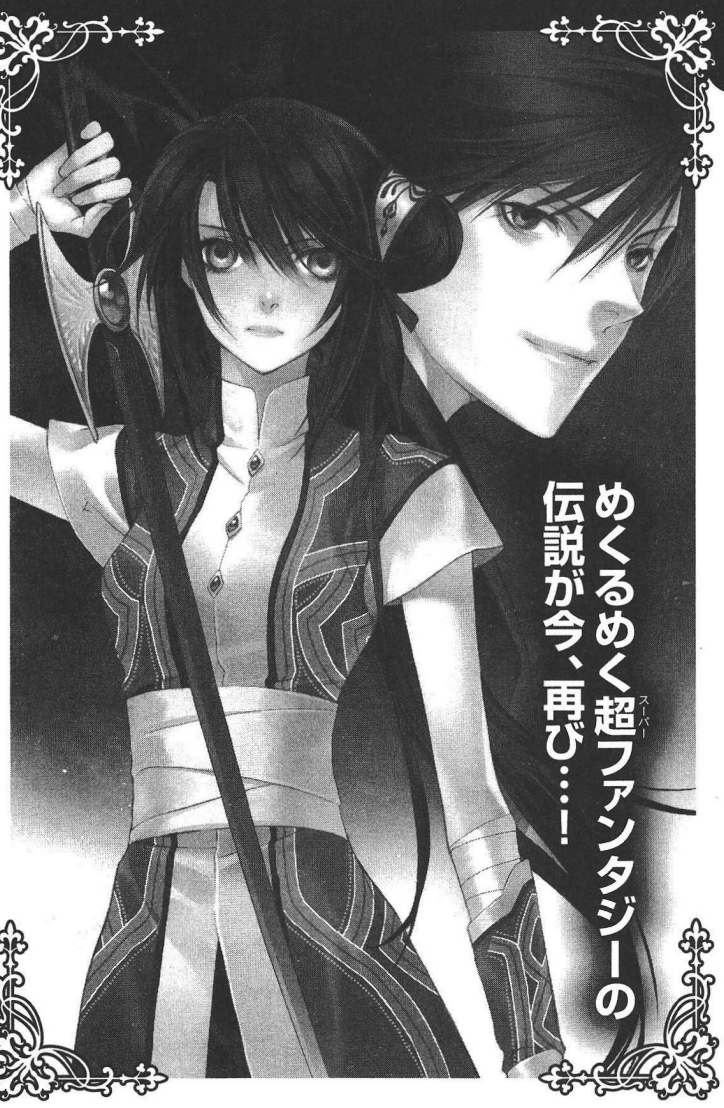
印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2009　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN978-4-08-601346-8 C0193


黎金の暁闇4
うこんのぎょうあん
人気シリーズ本編始動、
怒涛の展開！
破妖の剣6
前田珠子
イラスト／小島 榊
金の妖主によって昏倒させられた
ラスにかわってターラが紅蓮姫を
手に戦うのだが…！？
コバルト文庫
好評発売中


破妖の剣 外伝
伝説級ファンタジー、外伝で登場!!
言ノ葉は呪縛する
義父レンバルトを密かに想う少女リエンカ。ある夜、レンバルトが呪いを解くために自分を養っている事を知ってしまい…?
前田珠子
イラスト／小島 榊
コバルト文庫
好評発売中


めくるめく超(スーパー)ファンタジーの
伝説が今、再び…！

好評発売中 コバルト文庫

破妖の剣

前田珠子

破妖刀に選ばれし少女よ…愛と正義のために闘え！

イラスト／廈門　潤

紫紺の糸（前編）（後編）
翡翠の夢1～5
女妖の街 破妖の剣 外伝①
ささやきの行方 破妖の剣 外伝②
忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③
時の螺旋 破妖の剣 外伝④
魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤
呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

イラスト／小島　榊

新カバーで登場!!

漆黒の魔性
白焔の罠
柘榴の影
鬱金の暁闇1～3


コバルト文庫
好評発売中
本好き少女の
波瀾万丈ファンタジー！
前田珠子
イラスト／明咲トウル
天を支える者
天を支える者1～4
天を支える者 古懸唄1～5
天を支える者 罠は、蜜の味
天を支える者 緑風に誘われ
天を支える者 緑の糸をたどって
天を支える者 緑蘿の檻に囚われ
天を支える者 緑玉の枷に繋がれ
天を支える者 緑の鈴を、振る
天を支える者 空に響く緑の鈴音

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。

前田珠子

〈聖石の使徒〉シリーズ

イラスト／山本鳥尾





聖石の使徒
其は焔をまとう者

聖石の使徒
其は力を放つ者

聖石の使徒
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
揺籃の瞳

聖石の使徒
蒼の組木箱

聖石の使徒
狩人の爪

〈好評発売中〉 コバルト文庫

僕に運命感じているんだろう？

伯爵と妖精

白い翼を継ぐ絆

谷　瑞恵
イラスト／高星麻子



社交場（カントリー・ハウス）でシルヴァンフォード公爵家の生き残り・キャスリーンに遭遇したリディアたち。彼女はエドガーに意味深な視線を送って…？

伯爵と妖精シリーズ・好評既刊

あいつは優雅な大悪党
あまい罠には気をつけて
プロポーズはお手やわらかに
恋人は幽霊（ゆうれい）
呪いのダイヤに愛をこめて
取り換えられたプリンセス
涙の秘密をおしえて
駆け落ちは月夜を待って
女神に捧ぐ鎮魂歌
ロンドン橋に星は灯る
花嫁修業は薔薇迷宮で
紳士の射止めかた教えます
紅（あか）の騎士に願うならば
誰がために聖地は夢みる
運命の赤い糸を信じますか？
誓いのキスを夜明けまでに
紳士淑女のための愛好者読本
すてきな結婚式のための魔法
魔都に誘われた新婚旅行
月なき夜は鏡の国でつかまえて

〈好評発売中〉 コバルト文庫

サイキックサスペンス、新展開!

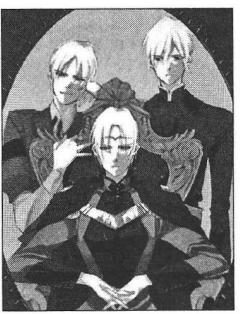
シュバルツ・ヘルツ―黒い心臓―

監獄のファラオ

桑原水菜

イラスト／夢花李

湖底都市ラムリアから帰還した奏たちは、消えたアイザックを探す手がかりにアースガルズと同じ設定のネットゲームを探索するが!?



〈シュバルツ・ヘルツ―黒い心臓―〉シリーズ・好評既刊

シュバルツ・ヘルツ―黒い心臓―
ワルキューレの雪騎行
アリアドネの糸車
シヴァの踊る森
燃える湖底のラム(前編)(後編)
神々の脈拍 vital.A
神々の脈拍 vital.B
神々の脈拍 vital.X
神々の脈拍 vital.XX
シュバルツ・ヘルツ ゲスタァン
シュバルツ・ヘルツ ゲスタァン―カラクムルの機械神―

〈好評発売中〉 コバルト文庫

「私に触れられるのは、恐ろしいか？」

そして花嫁は恋を知る

黄土の大地を潤す姫

小田菜摘
イラスト／椎名咲月



間に合わせ感の強い政略結婚をさせられたブラーナ皇女のアンナマリア。嫁ぎ先のカストラバ王フェランは噂通り非情で冷たい男で…？

——〈そして花嫁は恋を知る〉シリーズ・好評既刊——

そして花嫁は恋を知る 黄金の都の癒し姫
そして花嫁は恋を知る 白銀の都へ旅立つ姫
そして花嫁は恋を知る 紅の沙漠をわたる姫
そして花嫁は恋を知る 緑の森を拓く姫
そして花嫁は恋を知る 緑の森を統べる姫

〈好評発売中〉 コバルト文庫

魔王女さまじゃ、しかたない!?

鳥籠の王女と教育係

姫将軍の求婚者

響野夏菜
イラスト／カスカベアキラ



エルレインの暮らす離宮を、妖艶な美女が訪れた。婚約者のアレクセルは怯えてカエル化し、魔法使いのゼルイークは引きこもり――!?

〈鳥籠の王女と教育係〉シリーズ・好評既刊

鳥籠の王女と教育係 婚約者からの贈りもの
鳥籠の王女と教育係 魔王の花嫁
鳥籠の王女と教育係 永遠の恋人

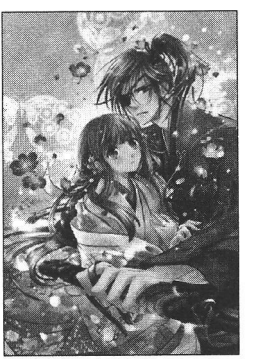
〈好評発売中〉 コバルト文庫

ぜったいに、妻にしていただきます!
押しかけ姫の戦国ラブコメディ!

政宗様のお気に召すまま

～花嫁御寮は求婚中～

ながと帰葉
イラスト／くまの柚子



政略結婚で伊達政宗のもとに嫁いだが、ある事件で実家に戻された愛姫。政宗の迎えを信じて待っていたが、別の縁談が浮上！　耐えきれず、愛姫は政宗の城に押しかけるが…!?

〈好評発売中〉 コバルト文庫

2009年度
ロマン大賞
受賞作!!

あたえるだけの愛で、
ひとは幸せになれる――?

最後のひとりが死に絶えるまで

我鳥彩子（わどりさいこ）
イラスト／水谷悠珠



秘宝を盗んだ犯人を追う亡国の王子ラエル。やっとの思いで巡り逢った犯人は、不死身の天才調香師エォンと、宝石しか食べられないという不思議な力を持つ少女レクィエで…!?

コバルト文庫　雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の書き手を目指す方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人発掘の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!?

大賞入選作　正賞の楯と副賞100万円（税込）

佳作入選作　正賞の楯と副賞50万円（税込）

ノベル大賞

【応募原稿枚数】400字詰め縦書き原稿95枚～105枚。
【しめきり】毎年7月10日（当日消印有効）
【応募資格】男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】締切後の隔月刊誌「Cobalt」1月号誌上（および12月刊の文庫のチラシ紙上）。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10
（株）集英社　コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる**「ノベル大賞・読者大賞」**（読者大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円）の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】400字詰め縦書き原稿250枚～350枚。
【しめきり】毎年1月10日（当日消印有効）
【応募資格】男女・年齢・プロアマを問いません。
【入選発表】締切後の隔月刊誌「Cobalt」9月号誌上（および8月刊の文庫のチラシ紙上）。大賞入選作はコバルト文庫で出版（その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします）。
【原稿宛先】〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10
（株）集英社　コバルト編集部「ロマン大賞」係

応募に関する詳しい要項は隔月刊誌Cobalt（2月、4月、6月、8月、10月、12月の1日発売）をごらんください。

9784086013468

ISBN978-4-08-601346-8

C0193 ¥476E

1920193004762

定価 本体476円＋税



コバルト文庫

昏睡状態が続くラエスリールにかわり、破妖刀「紅蓮姫」の使い手として闘うアーゼンターラ。彼女と妖貴の死闘はまだ続いていた。暴走する「紅蓮姫」に振り回されながらも、ある奇跡が彼女を救い…？　ラスの魂を探し続ける邪羅の前に、遂に柘榴の妖主が現れる。第六の妖主・雛の君の動きが不穏なものになるなか、死んだはずのラスの母がある行動に出て。愛しい暁の姫よ、今こそ目覚めの刻だ…！